夜明けの狩人

猫又提督

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何時か書いてみたかったものです。主人公は暁ちゃんです。でも、暁ちゃんぽくないです。全然似てないです。なのでそういったものが苦手な方にはお勧めしません。

暁ちゃんにこれといった目的はありません。自由気ままに夢から艦これの世界にやってきます。彼女が満足したら夢に帰ります。

投稿に関しては本当に不定期で続くかどうかも分からないので、こいついつになったら失踪するかな、程度でいてくれればいいです。

目次

第1話 1
第2話 8
第3話 16
第4話 24
第5話 31
第6話 39
第7話 46
第8話 53
第9話 60
第10話 70
第11話 78
第12話 86
第13話 94
第14話 102
第15話 110
第16話 118
第17話 126
第18話 134
第19話 142
第20話 150
第21話 158
第22話 169

第1話

目の前で知らない3人が海に沈んでいく。否、彼女はこの3人知っている。彼女は海から突き出す手をつかむ。否、彼女は何もできなかった。暗闇が覆い何も見えない。心地よい鐘の音がなった気がする。どこかで、誰かが呼ばれたような。

目を開くとそこには知らない風景が。否、彼女はこれを知る。階段を登り扉を開けば、そこには彼がいる。

「狩人様。」

彼女が声をかけると、彼はこちらを振り向き机の前から体をどかす。彼女が用があったのはその机だった。

「ありがとう。」

彼女は微笑む。彼は何も反応しないが、彼女には確かに彼の感情を理解していた。彼女が取り出したのは、その華奢な体躯からは到底想像できない仰々しいもの。彼女が作業していると彼は彼女を撫でる。

「狩人様?」

彼女の問いかけに彼は一切応じない。ただ彼女の頭を撫で続けるだけだった。

「…そう。そうなのね。分かったわ、狩人様。」

しかし、彼女は理解した。彼の意図を汲み取った。彼女は作業を足早に終わらせ持ち物を整理し始める。彼は2つのものを差し出した。輸血液と水銀弾であった。

「大丈夫よ、狩人様。ちゃんと持ってる。もうここに二度と来れないわけではないもの。また来れるわ。」

彼女には、彼が些か寂しそうにしているように感じたようだった。

「ねえ、狩人様。私は狩人かしら。獣かしら。…上位者、もしくはそのなりそこない?それとも、昔殺した艦娘かしら。」

彼女は出口で問う。彼女自身それが答にならないと知っていた。だが、聞きたい。他人の瞳は自分に何を見出すのかと、自分の瞳と違って何を見ているのかと。彼は、ただ一つ頷くだけだった。回答とは一切思えない行為。到底理解などできないその行為。しかしやは

り、彼女は理解した。なにゆえそれを理解したのか。
階段の人形に挨拶をし、広い庭園の大木の根本。車椅子の横に大きく存在する慰霊碑。かつてここで高かったものと彼女は一切の関係がない。あの瞬間全てはもう終わっていた。後ろから足音がした。彼と人形が見送りに来てくれたらしい。
「えへへ。うまく行くといいな。」
彼女は微笑み、慰霊碑の前に手を掲げる。彼女の念じに使者が答えた。瞬間、この場に彼女は消滅した。

そこは森の中。明かりはついていて使者が祈りを捧げている。近くに砂浜があって、静かに波が砂地を撫でている。空には星と満月が浮かんでいる。しかし、ここはヤーナムではない。だから獣狩りの夜はないし、獣の病もない。いずれ夜は明ける。ここはどこか知らない場所。でも、必ず自分が知っている場所の近くのはずだった。彼女は森を出て砂浜を歩く。直ぐに砂浜は終わりヤーナムにはないはずの建物が見えだす。コンクリート製の建物。夜でも明るい建物群。ヤーナムよりも多い人口。ここは日本だ。彼女は狩人の衣装から学生服へと着替える。昔は毎日のように着ていたはずの服。何時しかそれは狩人の衣装へと変わっていた。彼女は懐かしい建物を背に海へ向かう。
波止場の先。向こうの喧騒はここまで届かずわずかな音を波がすべて打ち消してしまう。今宵は本当にいい月だ。思わずその場で交信してしまう。なにも考えず、その月の向こうにいる存在を感じる。ふと手が伸びてくる。その手が彼女を包み込もうとして…。
「……。」
後ろから笑い声が小さく聞こえる。どこかの学生二人。こちらを見て笑っている。どうやらスマホで映像もとっているらしい。狩人になってからいろいろな感覚が研ぎ澄まされてきた。特に耳と目は。鼻だけは少し衰えたかもしれない。しかし、これは見世物ではない。あまり見られていいものではないし、気が散る。彼女はメスを一つ手

に取り投げる。まっすぐ学生たちの足元に刺さる。それだけで逃げてしまった。情けない。

彼女はやはり再び仮装束へと身を染めて海面へ降り立つ。そのまま月へ向かって歩き出した。

彼女は当てもなくただ海面を歩いていた。気づけば周りはすべて水平線で月も沈もうとしていた。彼女がこの瞬間に我に返ったのには訳がある。彼女の視線にあるものが映った。全身が黒くかつ金属のような光沢。見たことがないようなフォルムでもなぜか生き物であると確信できるその姿。深海棲艦が艦隊を組んで過ぎ去ろうとしていた。彼女の狩人としての本能が目覚める。

相手も気づいたらしく各々が砲門を向ける。しかし、すでに彼女の姿はなく唐突に一本の腕が舞い上がる。彼女の腕か。否、それはその艦隊の旗艦であったヘ級の腕であった。すでに彼女は自身の間合いに入っていた。これで艦隊は総混乱。近接戦など一切考えられていない奴らの武装では彼女を攻撃しようとも仲間を巻き込んでしまうと躊躇ってしまう。しかし彼女は止まらない。尚も鉈を操りヘ級を切り刻む。寸刻にも及ばずして見るも無残なヘ級の残骸が海に浮くこととなった。彼女の姿は返り血で染め上がり夜のせいで色こそわからないものの月の光でも返り血は鈍く光るのである。思わず深海棲艦ですら後ずさりしてしまう。

次に彼女はイ級を狙った。瞬きする間もなく近づく相手にイ級はわずかな思考でまとっている装甲で受け止めることを選んだ。が、その決断虚しくまるで肉を切るかのようにイ級の体が二つに切断され李。上位者の体すら難なく切断する狩人の仕掛け武器。深海棲艦の装甲程度訳なかった。装甲が意味をなさないと悟ったのか逃走を開始した。しかしそんなことを許す彼女ではない。逃走を図る深海棲艦に片っ端から鉈を振り下ろす。残っていた深海棲艦は四隻。彼女は獣狩りでもあり、上位者狩りの狩人でもあった。が、さすがに力では対応しきれるものの数では対処のしようがない時もある。何とか三隻は狩ったが残りの一隻が早々に潜って逃げてしまったため取り逃してしまった。

わずか数分の出来事。数分の喧騒が収まり再び静寂が訪れる。浮いていた残骸もゆっくりと沈みだした。周りに波のなくなると彼女はまたあてもなく歩き出した。彼女は先ほどのことを思い出していた。なぜか砲撃を躊躇った。仲間の無残な死にざまに狼狽えた。頼みの綱が効かないと悟った瞬間に逃走した、それもまるで恐怖にかられたかのように。深海棲艦があんなに人間のような態度をとるとは知らなかった。いや、彼女の昔の記憶ではやはり深海棲艦に感情の類は一切感じられていない。人間も新兵は感情が行動に出やすく熟練へになるほど行動には出なくなる。深海棲艦も同じだろうか。あれやこれやと考えているうちにだんだんと空が白んできた。水平線が太陽が昇り強烈な光が彼女を刺さんとばかりに照らす。彼女はまた歩みを止めた。

それまで望んでいたもの、取り戻さんとばかりにヤーナムを駆け回ったあの頃。それがいつからか獣を狩るために、上位者を狩るために、時には血に酔った狩人を狩ることが目的となったのはいつ頃だったろうか。今の自分はきっと血に酔っている。狩人が通ればきっと自分を狩ろうとしてくる。かつて求めたものがここでは毎日やってくる。夜明けがやってきた。

「暁…。」

彼女の名前でもある現象をつぶやく。見慣れないものをみて少し眉を顰める。まるで夜明けを嫌うかのように今度は太陽を背に歩き出した。

もう何日も歩いた。夜も夜明けも何度も体験した。暁を何度も見た。いくつ艦隊をつぶしたか分からない。艦隊を見つけたとき彼女の瞳は希望を見出したかのように光り、狩りつくせばまた虚ろになり歩き出す。狩りの対象や自分に牙をむかんとするもの以外に反応しない彼女には数日前からずっと見られていることに気づいていなかった。そして、前方から近づいてくるものの音にも。

「止まれ。」

前方から聞こえた声に彼女は顔をあげる。するとそこには一人に

女性が立っていた。いや、一人ではないその女性含めて五人いた。彼女は女性の言葉に従い止まる。すると、その女性がほかに二人引き連れてやってきた。彼女はその女性を知っていた。昔の記憶が蘇る。女性の名は長門。そしてその両脇にいるのは吹雪と叢雲だ。長門たちは少し離れた位置で止まり、話しかける。

「…。単刀直入に聞く。貴様は何者だ。ここが日本の海域だとしているのか。」

「…狩人。」

「女の子？」

「しっ。」

「日本語が分かるのか。じゃあ次はその帽子とマスクを取るんだ。」

彼女はその言葉に従い帽子と布を降ろす。その姿に吹雪と叢雲は驚いた様子だった。長門は依然として平静を保っている。流石だ。記憶の中の彼女もそうしていつも厳格であった。それであって時折優しい物腰になるのだからみんなから好かれていた。かくいう自分もその一人であった。だから彼女が苦悶に満ちた表情を見せたときは心配し絶望したのを覚えている。そんな変わりない彼女が今自分の前に立っていた。

「…。海上を立っているところを見る限り貴様は艦娘のようだが、あいにく『狩人』という名の艦娘は聞いたことがない。詳しい話は鎮守府で聞かせてもらう。抵抗しようなどと考えるなよ。もし抵抗する気がないのならその手に持っているものを渡し、我々の指示に従え。」

彼女はおとなしく長門にノコギリ鉈とエヴェリンを渡した。次に府引きと叢雲が近づいてきて「腕を後ろに」というので、後ろにやるとそのまま体ごと縛られてしまった。さらに手錠をはめたような音も聞こえた。これで両腕を完全に封じられてしまった。叢雲が背中を押す。なすがままにされるとボート———大発の前まで案内された。どうやらこれに乗れということらしい。少し狭い大発に座ると。先から伸びていたワイヤーを吹雪が自身に取り付けた。長門の号令で艦隊が出発する。吹雪が前進し、寸分遅れて大発が引っ張られる。

艦隊は太陽を背にしたまままっすぐ進んでいった。

艦隊の一人赤城は大発の右側で監視していた。自らを狩人と名乗る少女。赤城はこの少女に底知れぬ恐怖を抱いていた。が、決してそれを顔には出さない。あくまで平静を保つ。この少女に恐怖を抱いているのは何も自分だけではないだろう。恐らく逆側にいる加賀と長門もそれを感じているはずだ。現に二人ともちらちらと少女を見ている。吹雪と叢雲はずっと周囲警戒をしている。これと言って気にしている様子はない。この恐怖はきっとある程度実戦を体験したものにしかわからないのだろう。少女が顔を見せたとき駆逐艦の二人はその見た目に驚いていた。むろん自分も件の正体が少女の姿をしていたのには驚いた。しかし、それよりも驚くべきはその眼だ。生きているとは思えないほど濁った眼。その眼に気づいたとき何かを見たような気がした。とても、恐ろしいものを。とてもではないが根移譲できるものではない。あんなに恐怖を感じるのは初めてだった。姫や鬼級と対峙した時よりも純粋な、それでいて異常な恐怖を感じた。

その少女は先ほどから一切その体を動かさない。言葉の通り波で大発が揺れても一切体が動くことはない。潜水艦の娘たちから報告を受け数日前から加賀と交代しながら監視し続けた。観測機が撮った映像を見たときは戦慄が走ったのを覚えている。ただ歩いているだけかと思いきや深海棲艦に近づくや否や突撃先ほど長門に預けたあの武器で深海棲艦を攻撃しだした。少女は一切の躊躇なく武器をふるい続けていた。その中でも最も恐ろしかったのは空母機動部隊と主力部隊を無傷で壊滅させたことだった。敵の艦載機の攻撃をすべてかわし、戦艦の砲撃すら弾くことがあるル級の盾を一太刀で切り落とす姿を見て言葉を失った。

その映像を見て直ちに提督に報告。何人かの艦娘も含めて会議した結果、接触し会話が可能であれば拘束して鎮守府へ移送。こちらを鎮めんとした場合はその場での処分が決まった。結果として、その対

象はこうしておとなしくこちらの指示に従っているわけだが…。
少々この少女に気を取られすぎてしまったのか出発尻も早くに鎮守府近海へ戻ってきた感覚がした。

第2話

連れて行かれて数十分後。大きな建物群が見えてきた。あれが鎮守府だろう。昔より規模が大きい。彼女はそのままもうちょっと過ぎたところで、ほかからは死角なのだろうドッグへ連れて行かれた。ドッグで待っていたのは数人の艦娘。その艦娘が立っている後ろに扉が見える。きっとその扉の先が目的地なのだろう。艦隊が止まり長門が立っていた艦娘の一人と言葉を交わす。

「準備は……」

「大丈夫です。…報告を……。」

コソコソと話す二人。耳をすませば誰でも聞こえそうなものだが彼女は聞く必要はないと判断したようだ。話が終わると彼女は立たされついてくるよう指示される。案の定、一人が扉を開け長門はそこに入っていく。彼女もついていく。後ろから艦娘がもう一人ついてくる。その艦娘のことも彼女は知っていた。赤城だった。扉の先は真っ暗で少し埃っぽい。そう長くついていくわけでもなく扉から少しまっすぐ行った先の階段下が目的地だった。コンクリートが撃ちっぱなしの部屋で光源の類はなく部屋の上部に小さく採光窓が取り付けられているだけ。鉄格子で仕切らているスペースがいくつかある。なるほど、禁錮室か。彼女は、その一つに案内させられた。

「私が見張っているから、提督を呼んできてくれ。」

「わかりました。」

長門の命で赤城は別の扉から出て行った。長門はさっきの言葉通り彼女が入っている牢の前で立ち始めた。彼女も長門も何も話さない。彼女は長門との邂逅の時を思い出していた。あの時長門が彼女に行った質問のことを彼女はいい加減だったように思えた。たったニ、三の質問で結論を出した。彼女はただ従ったにすぎない。そも、長門は彼女のことを憶測で艦娘と決め、結局それを確認することはなかった。言葉が通じることだけを確認したかったのか。と、すれば艦隊は最初から彼女を鎮守府に招き入れるかあの場で処分するのが目的だったのだろうか。

「長門。」
「提督。こっちだ。」
彼女の思考は早々に打ち切られる。赤城が出て行った扉から男性が入ってくる。長門が声をかけたように彼がここの提督のようだ。その後ろから赤城と加賀も入ってくる。提督は彼女の牢の前で立った。
「やあ、初めまして。僕がここの提督だ。君のことは報告書でよく知っている。…君の目的は何だい？」
「…ない。」
「目的もなしに深海棲艦を蹂躙したのかい？」
「…。」
「おい、答えろ。」
「まあ、まあ。えーっと？君は艦娘なのかな？映像も見せてもらったけど海面に立っている時点で人間ではないはず。でも私も長年提督をやってるけど君みたいな服装の艦娘は見たことがない。」
「…昔。」
「昔？」
「昔はそうだった。」
「…じゃあ、本当の名前。艦娘としての名前教えてくれるかな。狩人ってのは違うんでしょ。」
「暁。」
提督はずっと優しい顔をして話しかけていた。が、彼女が顔を変えずに相手を驚かせようという気など全くなく、まるでおまわりさんに名前を聞かれたときのような彼女の言葉にその顔はすこし崩れることとなった。
「暁…!?」
長門と赤城が驚愕の顔をあらわにする。それもそうだ。彼女たちが知る暁と、今目の前でそう名乗った少女とは似ても似つかないのだから。彼女たちの知る暁は決してこんなにも暗い死人のような、この世のものではないような雰囲気を漂わせるような少女ではない。
「…それは本当かい？」

「ええ、本当。」
「貴様嘘をつくな！それはいくら何でも無理がある！」
「私もそう思います。提督やはりこの者は深海棲艦の…。」
「いえ、赤城さん。それではわざわざ深海棲艦を蹂躙する理由がありません。」
「なんだ加賀。じゃあ貴様はこいつが嘘をついてないというのか。」
「そういうわけではありません。彼女が本当に暁なのかは疑わしいことです。ですが、深海棲艦の仲間というのもおかしいと思います。」
「僕もそう思うね。何、疑わしいなら確かめてみるだけだよ。」
「確かめるとは？」
「艦娘ってのはそれ専用の艤装を持っているだろう。長門が長門専用の艤装を持っているようにね。専用とはいっても長門の艤装は長門ではあればだれでも作動するからそれをこの娘にもすればいい。加賀、明石から暁の艤装借りてきてくれ。」
「分かりました。」
加賀が部屋を出る。提督、長門、赤城は牢から少し離れて話し出した。やはり、彼女はその会話を聞く気がなかったため何を言っているのかはわからなかったが、大方彼女自身のことを話しているのだろう。加賀案外早く戻ってきた。更にはその後ろにもう一人いた。その艦娘のことも彼女は知っていた。明石だった。
「すいません。どうしてもと言うので。」
「いや、明石には話しているから大丈夫だよ。それよりも工廠はいいのかい？」
「はい！夕張産に頼んでるんで大丈夫ですよ。彼女がそうですか。」
「ああそうだ。本当かどうかは今から決めるがな。」
長門が牢を開け彼女を外に出す。そして腕の解かれた。が、長門の手は彼女の肩に置かれたままだ。警戒されている。逃げ出すつもりなど毛頭ない彼女は加賀に促されるままに艤装を取り付ける。
「よし、じゃあ艤装を起動してみて。それでその艤装が動き出したら君は暁だと証明される。」
彼女は艤装を起動させた。本人にしか聞こえないほどのモータ音

が聞こえた。体内を血液とは別のものが流れていく感覚を覚える。それから数秒後その違和感もなくなり、とうとう彼女はその艤装を操作しだした。主砲の砲塔回転、魚雷発射管の操作。後ろの錨のロックも外し起用に回って伸びた鎖をつかんだ。これで彼女が正真正銘駆逐艦暁であることが立証された。

「これは…どうしましょう。」

「うーん。確かにこの娘は暁のようだね。…長門、後で何人か呼んでくれ。」

「了解した。」

「あ、あの。拿捕した武器ってのはどこにあるんですか？私それが気になって気になって…。」

「ああ。それならここにあるが？」

「うわー。これですか。これであの深海棲艦を真っ二つに…。でもなんかちょっとごついだけでそれほど切れ味が良さそうには……。こればらしてみていいですか？」

「…いいんじゃないか。」

そんな声が聞こえたのはちょうど加賀に手伝ってもらって艤装を外し終えた頃だった。きっと加賀には急に彼女が消えたように思えただろう。そしてその場にいた全員が見たのは明石の首元に突きつけられた剣と長門に向けられた銃口だったろう。

「だめ。それをバラさないで。こっちならいいわ。あなたも勝手に許可を出さない。拿捕した武器の扱いは提督が権限を持ってる。艦娘は提督がその場にいない、かつ判断を急するとき。…今はどっちでもないわ。」

「ウヒっ!?…え、あ、ありがとう？」

「うっ…す済まない。…というか！」

明石はギクシャクしながら受け取る。

「な、なぜそんなものを持っている！あれで全部ではなかったのか！」

長門は激昂して問いただす。しかし、彼女はキョトンとしている何を言われたのかわからないような様子だ。

「ええい！いいから持っている武器を全部出せ！」
仕方がないので彼女は持っている仕掛け武器を全部出した。ノコギリ槍にルドウィークの聖剣、慈悲の刃等々途方もないほど出てくる。どう見たってその体躯では納め切れない武器の数々。その場にいた全員が言葉を失った。
「…全部出したわ。…没収？渡しははするけどそれ以外バラさないでね。大変だから。」
机には収まりきらずその周辺にゴマンと置かれた武器を前に彼女はぶっきらぼうにいう。長門は動揺しながらも応えた。
「…あ、ああ。これで全部だな？貴様の言うとおり没収する。扱いは今夜決めるから、今夜はここで過ごせ。」
彼女は頷いて自ら牢の中へ戻っていった。長門が鍵を締める。
「…これどう運ぼうか。置く場所は…数が多いから工廠に持っていくしかないかな…。」
「ですね。夕張さんはこの件のことは承知で？」
「あ、はい。私と一緒に話だけは聞いてますよ。」
「となると問題は、これを他の娘たちにバレずに持っていくことですね。」
「この件を知っているのはあと何人だ。」
「あとは、吹雪さんと叢雲さんだけですね。」
「じゃあ、その三人にも手伝ってもらうか。バレないようにね。」
「了解した。」
それぞれ仕掛け武器を運び出した。途中から吹雪と叢雲も手伝いだした。やはり彼女の顔を見ると少し顔が歪む。彼女が暁であったことを聞いたのだろうか。最後の一つを持っていくとき長門が言った。
「…貴様は今、特別処置で捕虜の立場にいる。この場監視の目は入れないが外はそうではないからな。絶対に抜け出すなよ。処遇については明日報告するからな。」
そう言って部屋を出ていく。結果としてこの場にいるのは彼女ただ一人だけとなった。外から足音が遠ざかっていく音がする以外何

も聞こえない。採光窓から入ってくる光が埃を照らす。簡易的な椅子やテーブルがあるが彼女は床に座り壁にもたれた。ここには変わるものがない。必然的に視線は埃を照らす光とその光が入ってくる採光窓に行く。太陽の光なんてものを感じるのは本当に久しぶりだった。見れても悪夢の中でモドキの光が、ただそこが明るかっただけだった。だが、彼女には太陽に出会った感動は薄かった。もはや、太陽を見ることが感動には値していなかった。

扉が開いたときに彼女はこの世界を再認識した。誰か入ってきた。入ってきたのは吹雪だった。

「えっと…夜ご飯持ってきました。」

吹雪はお盆を持っていてその上には軽食が乗っていた。吹雪は近くのテーブルにそれを置き机の上のランプもつける。この部屋の唯一の光源。それを持って牢の中に入った。

「ここに置いときますね。３０分後に取りに来ます。……。」

「…何かしら。」

彼女は吹雪の言葉に返事をするつもりはなかったが、吹雪がやけに彼女の顔を見つめるため、つい彼女は声をかけてしまった。

「ああ、いや。こうしてみると本当に暁ちゃんなんだなぁと思って。」

「…私は暁だもの。」

「でも雰囲気とか全然違うから。」

「…そうかもね。」

「あ、じゃあ。また後で。」

吹雪は部屋を出ていった。彼女の前にある食事。狩人に食事は必要ない…と言ってもそれをあちらが知っているはずもない。何も必要ないからと言って狩人が飲食ができないわけではない。獣ではあるまいし。ただ、普段口にしてきたものに比べて自身がその昔よく食べていたものは不思議と何か落ち着く感じがするのだった。３０分

後やはり吹雪がやってきた。
「あれ？着替えたんですか？」
「ええ。ちょっとね。改められないと分からないというのは少し寂しいから。」
「あはは。思ったより人間味がありますね…あ、そ、その人間ぽくないとかじゃなくて、その、映像で見たときはなんか機械みたいで感情がまるで感じられなかったから、寂しいって思うんだなあと思って…。」
「…そうね。私も不思議に思うわ。」
もはや彼女には人間である要素などなかったはずだった。少なくとも夢以外では感情を捨てたはずだった。ここに来てから不思議といろいろな感情が浮かび上がってきた。これも、ここが昔慣れ親しんだ場所と似ていて昔の仲間と似た人と話しているからなのだろうか。吹雪は空になった皿と一緒に机を外に出し「消しますね。」という声でランプを消した。「お休みなさい」と言って部屋は再び暗闇が閉ざす。
彼女は珍しく意識を保っていた。何も聞こえてこない。ただ空気の音が聴こえてくるのみ。こんな夜は初めてだった。ヤーナムでは必ず何か聞こえてくる。獣の足音、うめき声、市民の声、何か金属を引きずる音、肉を引きちぎる音、いろんな音が聞こえた。こっちに来ても波の音は聴こえるし深海棲艦の声だって、何を言ってるかはわからないにしろ何か話しているような音が聴こえる。故に彼女は恋をした。この静かな夜を欲した。彼女にとってこの夜は夜明けよりも大切なものになった。もっと感じたい。認知したい。…もっと瞳を得てこの夜を認識していたい。…医療協会の気持ちもこのようなものだったのだろうか。彼らもまた何かのために瞳を得ようと。だが、もう少し見た目を気にしようとは思わなかったのだろうか。今となってはもう分からない。彼女が全て狩ってしまった。もう獣しかいなかったから。さっきの行動もこの静かな夜のせいかもしれない。
彼女は結局、再び窓から月の光ではなく太陽の光が差し込むまで夜を楽しんでいた。遠くから喇叭のような音がする。起床時刻なのだろう。恐らく6時。そこからもうしばらく経ったごろ遠くから足音

が近づいてくるのが分かった。吹雪よりも早い。きっと長門とか加賀あたりだろう。扉を少し乱暴気味に開けたのは長門だった。手にはお盆を持っている。恐らく彼女の朝食だろう。長門はテキパキと机にお盆を載せ牢に入る。

「食べながらでいい、聞け…何だ貴様着替えたのか。どこから持ってきた。」

「最初から持ってた。誰かさんが信じれないって言うから。」

「…はぁ。もういい。貴様の処遇が決まったから今から聞け。」

第3話

彼女は今、ある部屋の中にいた。
「…案外広いのね。」
「今は、ここしか空いてないからな。」
「部屋の内装はしっかりしてるのに物置みたいね。」
「実際物置だ。確かにもとは客室として使っていたが別に専用で作ったし、あっちのほうが立地とか警備とかしやすいから。」
確かに今彼女がいる部屋は鎮守府の中でも端っこの方だ。この部屋がある棟は二部屋ずつの二階建てで彼女は二階にいた。なぜ彼女がこんなところにいるのか。それは今朝長門から彼女を捕虜から艦隊へ編入することに決めたと伝えられたからだった。しかし、ここの提督は彼女を『個人的』に使いたいらしく存在を伝えられている数名以外には知らせずに箝口令もしいたらしい。
「…『個人的』に使いたいってどういうことなの？」
「…作戦も近いからこの場でも話しても構わんかな。一週間後大規模な作戦がある。ほかの鎮守府と共同で進めていく。」
「ふーん。私は大きな作戦には参加したことないからわからないけどほかの鎮守府と合同なら相当ね。」
「ああ。しかも今回の作戦は大本営主導だ。ここみたいな中規模から呉や佐世保なんかも参加する。」
「あら、それはまさに相当ね。で？私を使う理由と関係はあるの？」
「うちの提督は戦果を求めている。もっと権限が欲しいらしい。こういった大規模作戦はうまくやれば戦果も大きくなる。だが、呉や佐世保みたいなところが参加するとなるとそういうのはかなり難しいからな。」
「ふーん。で、私を利用しようって？」
「そういうことだ。今回の作戦において開始前にお前には前もって出撃してもらう。」
「つまりは私という秘密兵器で戦果をぼろ儲け？」
「まあ、そういうことだな。幻滅したか？」

「いいえ。そんなことで幻滅はしないわ。それに私はただここの人たちさえ知らないだけの存在だけでもうここの艦娘。別に横取りとか不正でも何でもないわ。この鎮守府所属の艦娘が深海棲艦と交戦し、それに勝つ。…ね？それは立派なこの鎮守府の戦果。」
「…そうか。」
「でも、私の分をどうやって戦果に加えるのかしら？…大本営発表？」
「まさか。それについては心配するな、ちゃんと考えてある。…潜水艦にも一人息をかけたほうがいいな。」
「ま、そういうことならお任せするわ。私の仕事はただ深海棲艦を狩ること。…あなたは提督のやり方に疑問は持たないの？私が知っていた長門はこう、不正は全部許さない！って感じだったわ。」
「…なに、私たちはただ提督に従うまでだ。今こうやってお前と普通に話しているのも提督がお前を仲間と認めたからに過ぎない。……確かにほかの私がこのことを知れば絶対に許さなかっただろう。貴様は知らないだろうが同じ長門でも鎮守府によって多少の違いは出るものなんだ。私はただ『そういう』長門なだけだ。」
「…。」
「…実を言うとだな、お前の存在を知らせないのにはもう一つ理由があってな。ただ単純に同じ名前で同じ姿のやつがいると混乱が生じかねない。」
「…まともね。て言うかいるの？暁が。」
「ああ、いるぞ。むしろ、こっちが先だ。さっき話したことは後で思い付いた。…おっともうこんな時間か。すまないがそろそろ行かなければならない。あとで吹雪と叢雲を向かわせるがそれまで一人で片付けててくれないか。」
「いーえ、部屋を用意してもらうだけでも感謝よ。」
長門はそれを微笑で返し小走りで部屋を出て行った。
部屋にいるのは彼女一人になった。改めて部屋を見渡すと至るところにダンボールが積まれている。机の上、ベッドだったのだろう土台の上にも。唯一ある窓に近付き開ける。見える風景は一面の海

だった。少し体を乗り出し右を見ると小走りの長門が少しだけ見えた。体を戻しまた部屋を見る。片付けると言ってもどこに置けばいいのか。隣の部屋でいいのだろうか。と、部屋を見渡すと置かれていた棚の後ろに周りとは違う色の壁が見えた。棚を動かすとそれはドアであった。特に鍵穴も見当たらない。試しにドアノブを回すと錆びていたせいか少し抵抗があったが割とすんなり回った。ドアを開けるとそこは小部屋になっていた。光源を探すと部屋の真ん中に豆電球がついている。紐を引っ張るとまだついた。小部屋は本当にただの部屋で、前からおいてあった荷物以外何もない。こっちのほうが物置に思われる。その荷物というのはどうやら本のようだ。物置の外にあった棚は本棚として使えそうだし、2台あったのでこの本と交換する形で置いていけば片付くだろう。というわけで、早速開始する。納められていた本は意外にも彼女が昔艦娘であった頃に話題となったものが多かった。本の束はそれぞれジャンルがバラバラだったがとりあえず本棚に納め紐を切る。それを繰り返してちょうど本棚2台に全部収まった。と、ここで部屋のドアが開いた。

「手伝いに来たわ。」

「どう?片付け。」

入ってきたのは吹雪と叢雲だった。

「あんまりね。荷物をこっちに入れるから持ってきてくれると助かるわ。」

吹雪と叢雲が近くにあったダンボールを持ち上げる。ものが詰まっているのか重そうだ。彼女が物置まで誘導する。それから彼女もダンボールを物置に納めていく。三人でやったおかげで、早々に終わった。

「ありがとう。早く終わったわ。」

「ベッドのシーツは大淀さんに頼んでおくね。」

「…片付くとここ広いわね。流石元客室。」

「なにー叢雲ちゃん。羨ましいの?」

「ちょ、や、やめてよ。人前で。」

「えー。いいじゃん暁ちゃんだよ。」

「い、いや、でもこっちの暁はほら、雰囲気が…。」
「いいのよ。わざわざ私を暁と呼ばなくても。好きに呼べばいいわ。」
「ああ、いや。別にあなたがどうだからとか言うわけじゃなくて…あなたは暁だから、ね。」
「暁ちゃんは家具はいる？」
「家具？」
「うん。椅子と机とベッドとあとは本棚２つだけだから。他にいるものがあれば大淀さんに言っておくけど…。」
「……今は必要なものはないわ。ありがとう。」
「そっか。また後で必要になったら言ってね。」
こんなにも人と会話をしたのはいつぶりだろうか。こんなにも獣を恐れていない人と話すのは。少なくともヤーナムに来てからは一度もなかった。こうして二人で話していると昔を思い出す。
「あ、姉さん。そろそろ昼食の時間よ。早くしないと席埋まるわ。」
「うん。あ、でも暁ちゃんはどうするの。」
「どうするのって、長門さんに許可取らないと外に出せないわよ。」
「いいのよ。狩人はそんなに物食べないから。」
「でも、食べれないわけではないでしょ？」
「…まあね。」
「でも、どっちみち長門さんに許可取らないと…。」
そんな押し問答が続いていると階段を登る足音が聞こえてきた。しかも二人分の。来たのは長門と、スク水を来た艦娘だった。
「お。お前たちまだいたのか。食堂の席が埋まるぞ？」
「あ、長門さん。あの、暁ちゃんを一緒に連れてはだめですか？」
「駄目だ。申し訳ないが出来るだけリスクはゼロで行きたいんだ。食事は後で持っていく。」
「そうですか…。」
「そんなもんよ。ほら、早く行かないと。」
「うん。またね、暁ちゃん。」
「随分と仲良くなったようだな。」

「そうね。駆逐艦同士、自然と仲は良くなるものね。」
「『駆逐艦』ね。…確かにそうだな。」
「ちょっと！イクのこと忘れないでほしいのね！」
「おっと、忘れてた。」
長門の後ろから出てきたのは先程見えた青髪のスク水。さっきの二人のことですっかり忘れていた。しかしそのスク水の姿を見たときにふと、昔のそいつのあだ名を思い出してしまった。
「あ、泳ぐ１８禁。」
「紹介するこいつは…なんて？」
「ちょ、ひどいのね！」
「あ、ごめんなさい。ちょっと昔の記憶が。」
「どういう記憶してるのね！」
「あー。うん。つづけるぞ。こいつは伊１９だ。」
「第一印象最悪なのね。」
「ごめんなさいって。」
「…見た目は本当に暁ちゃんそっくりなのね。」
「そっくりじゃなくて本人だけどね。」
「今回の作戦でイクにも手伝ってもらうからな。一応顔合わせで来てもらった。あとは伝令が一つ。今夜早速作戦の打ち合わせをする。消灯時間を過ぎてからやるつもりだが一応誰か呼びに来てもらうからそれまでここにいてくれ。」
「…了解。」
「じゃあ、またなのね。」
二人も出て行って再び一人となった。彼女を迎える部屋はさっきと違って片付いている。静寂が彼女の世界を包み込む。ここにきてから少し話過ぎたように感じた。こんなところでなきゃ話すことはない。何回もそう感じる。もうすっかり太陽がある生活に慣れてしまった。一週間後に行われる大規模作戦。そこで行う狩り。あと一週間待たなければならない。昔の経験からして後の一週間毎日作戦会議が行われるだろう。他の鎮守府とも協力するとなれば猶更。さらに彼女を一切の味方に知られないように暴れさせる。それはもう

かなり緻密な作戦が要るだろう。そうぬけぬけと向けだせるものではないかもしれない。いや、終わったらそのままぬけだせばいいか。幸いこの部屋唯一の窓は海を向いている。この建物自体海にかなり近い。今日は久々に狩りができそうだ。ああ、その前にちゃんと狩り道具を返してもらわなくては。

気づけば本棚の前で一冊の本を手にしていた。昔、刊行されて一回は読みたいと思っていたが結局読むことのできなかったこの本。まだ初版だった。残念ながらそんなに人気がなかったのか、それとも発売されて日が浅かったのか。側面についた埃を払って改めてみる。この本を読もうと思った理由はよく覚えていない。確かにカバーに描かれている絵は彼女の好みであったが別に理由があった気がするのだ。思い出せないまま椅子に座りページと一つめくる。２０章に区切られているらしい。もう一枚めくる。主人公が出てきた夜の公園でベンチに寝そべっているらしい。昔の私はこんなに活字を読むことを好んでいただろうか。今、こうやって読んでいるのであればきっと当時からその兆候はあったのだろう。あまりに没頭したため後ろでドアが開いた音に気づいていなかった。

「…本を読むのですね。」

「……ええまあ。」

主人公が夜の桟橋でブレイクダンスをしながら大福を食べているところで声をかけられた。加賀が隣で昼食を持っていた。

「ここに置きますね。」

「…ＶＩＰにでもなった気分だわ。」

「そういうのであればここはもとはそのＶＩＰのための部屋ですからね。」

「でも私はＶＩＰではないわ。私は提督が所持する弾丸よ。」

「…そうですか。２０ｍｍそれよりも何倍も大きな弾丸ですね。むしろ砲弾では？」

「あら。私はそんなにも大きいのかしら。」

「ええ。あなたはとても大きいのですよ。だから注意して取り扱わなきゃいけない。間違っても暴発させないように。」

「買いかぶりすぎよ。」
「いいえ、買い被りではありませんよ。1時間後に取りに来ます。」
昼食は鯖定食らしかった。残念ながら本を読みながら食えるものではなさそうだ。
彼女は昼食を食べながらさっき読んでいた本のことを考えていた。なぜ主人公はあんなにブレイクダンスにこだわるのか。彼にとってブレイクダンスは月よりも大事なのだそうだ。彼女には理解しかねた。なぜ月よりも大事なことがあるのだろうか。そんなものがあっていいのだろうか。しかし、実際に彼には月よりも大事にしているものがあるのだ。そうすると、月よりも大事なものがある人は存在するのである。

さて、昼食も食べ終わり加賀が食器を持って行ったあと、できることは何か。外に出ることはできない。狩りに行くなどもってのほか。つまりは読書しかない。彼女自身まさかこんなにも本を読むことに熱中する日が来るとは思わなかった。今度、ビルゲンワースや教育棟から本を拝借してみようか。読み進めて数十ページ。とうとう彼も恋をした。結局のところ彼も人間。その彼の恋人は月が好きだそうだ。ある日彼は恋人と彼の親友とともに夜の砂浜を歩いていた。突如彼はブレイクダンスを始める。親友は『またそんな意味のないことを』というと、恋人は『意味がない行動なんてない』という。恋人は月の下でブレイクダンスをする彼が好きなのだそうだ。だから、このブレイクダンスには恋人を喜ばせるという意味があるという。親友は『意味がない行動だってあるに決まってるだろう』と反論する。恋人は『たとえ誰もが意味がない行動だと思っても本人にはきっと意味があるはずだ』という。『本人が無意味だといえば』と聞かれると、『それは本人にすらわかってない意味がある』のだという。
ふむ、なかなかに面白いと思う。突拍子もない言動が多いこの本だが、不思議と理解できてしまう。ふと、自身を振り返る。『意味のない行動などない』。果たして、過去にやった行いのすべてに意味があっただろうか。ふりかえってみれば意味もなく豚のケツを掘っていた

ような気もするがきっとあれにも意味があるのだろう。『本人にすらわかってない意味』が。そろそろ終盤かと思っていたそのころ後ろのドアからノックが聞こえた。返事をすると入ってきたのは吹雪だった。

「迎えに来たよ。」

窓を見るといつの間にか外は真っ暗になっていた。

「あら、もうこんな時間なのね。」

「もう消灯時間は過ぎてるから大丈夫だと思うけど一応ね。」

「分かってるわ。」

あともうちょっとで読み終わるはずだったので少しもどかしいがこの後の会議も重要なのでとりあえずは一度お預けである。本を閉じ、電気を消して二人暗い廊下を歩きだした。

第４話

案内されたのは執務室と書かれた部屋。入るとそこには見慣れた者ばかりいた。
「連れてきました。」
「うん。それじゃあ始めようか。」
長門が持っていた筒状の紙を広げる。海図だったようだ。
「私たちの鎮守府はここだ。担当海域は明日大本営から通達が来るはずだ。」
「それで、僕の予想としては担当海域はここらへんだと思うんだよね。」
提督が、取り出した赤ペンで丸を付ける。
「…思ったより狭いですね。」
「ここの戦力が整いだしたのはつい最近ですしまだ定期報告で戦力の増加を通達できていませんからね。」
「問題は、暁をどう使うかなんだよね。」
「この範囲だと、今の戦力で十分カバーしきれますね。」
「この予想された範囲外でやってもらうのが必須だな。一番いいのはこのあたりだろうか。」
長門が青いペンで新しく丸を付ける。
「そこは、最近レ級や姫級以上の深海棲艦が目撃されるところですね。」
「ああ、まだこの海域がそう言った深海棲艦の拠点になってる確証がないからまだどこにも報告はしてないし、暁を発見したところから逆方面だからきっとまだいるはずだ。」
「昨日の偵察の報告を見る限りでは、その海域が拠点となっているのはもう確実そうだから、確かにそこがベストだね。」
「それでは、その時の編成としてはやはりこの海域の担当は私と加賀さんが？」
「そうだな。ついでに吹雪を入れよう。私は…恐らくこの本来の海域の主力をたたく部隊に入るのが自然だろう。できるだけ時間稼ぎ

をしてここの主力にみんなの目を注目させたほうがいいか。」
「じゃあ、私は必然的に赤城さんたちとは逆方向に進む部隊のほうがいいわね。」
「イクはどう動けばいいの？」
「ああ、イクには単独で暁への伝令を頼みたい。」
「伝令？」
「うん。暁が一定の戦果を挙げた後に芝居をかけるからね。流れとしては暁が一定の戦果を挙げた後イクがそれを赤城に報告。芝居のために艦載機をあげるからそのことを暁に知らせて暁は撤退してもらう。そういえば、暁は一度にどれくらいの敵に対処できる？」
「ん…私？別に何体でも？」
「あいまいだな…。」
「まあ、彼女が圧倒的な戦力であるのは間違いないですし特に問題はないでしょう。」
「…ねえ、私の道具そろそろ返してくれない。」
「道具？ああ、あれのことか。そうだな、明日明石に返すよう言っておくよ。」
「今じゃダメかしら。」
「今日は明石呼んでないからもう寝ちゃってるだろうからね。申し訳ないけど我慢してもらえるかな。」
今日は特にこれ以上話すことはなかった。また明日会議をするらしい。けっよく今日中に狩り道具が帰ってくることはなかった。素手でできなくもないが圧倒的に効率が悪い。失意のまま部屋に戻ると物置のドアが開いていることに気づいた。
「…。」
一瞬警戒する。しかし人間の気配も獣の気配もしない。ただの閉め忘れかと近づくと中に灯されていない灯りがあった。
「…なんでこんなところに。」
疑問には思ったがとりあえず灯りをつける。使者が出てきて祈り始めた。見慣れた光景だ。なぜこんなところに灯りが出てきたのか

は謎だったがこれで夢に帰れるのは便利だ。道具もないので一度戻って適当にノコギリ鉈でも買おうかと思ったがふとあるものを思い出した。今まで使ったことはないが一応使えないことはない。水銀弾消費が激しいのでせいぜい一艦隊が限界だがまあ、狩りができるなら何でもいい。そもそも今日はあまり月が見えない。そんなにいい夜にはならないだろう。

唯一の窓から外に飛び降りる。直下の狭い建物と海の間の部分に降りた。そこからまた降りて海に立つ。何歩か歩いてから振り返った。やはりいる。吹雪と会議に行った時からアメンドーズがずっと張り付いているのだ。今も同じ体制で建物のほとんどを覆うようにして張り付き彼女をじっと見つめている。奴は彼女を殺そうとはせずただじっと見つめているだけのようだ。奴らにとって彼女はもはやただの狩人などではない。もはや彼女は奴らを狩ることさえできる。ゆえに彼らは彼女を監視する。監視したところでそれがいったい彼らにとって何になるのかは一茶不明だが、ただ見ているのだ。彼女は早々に思考を打ち切り歩き出す。せめて今日一番の狩りとなるように。

ああ、いた。艦隊がいた。獣だ。獣がいるぞ。今日は夜だ。獣狩りの夜なんだ。月も二つある。奴もまたそこに存在する。血に酔うため、狩りをする。青ざめた血を求めるのだ。血を恐れてはならない。全うせよ。しかし、今夜彼女は祈りを行う。ああ、医療協会よ。汝らは素晴らしきものを生み出してくれた。はるか彼方への交信。それは必ずしも失敗ではなかったのだ。力だ。この交信は特別な力なのだ。だから彼女は祈り、交信する。

彼方への呼びかけを

彼女の周りに光弾が浮かぶ、数秒ののちすべてが艦隊めがけて飛んで行った。呼びかけを行い応じたのは上位者ではなく星そのものであった。その星は本来この場で存在などできないものだ。ゆえにその形を保てるのは数秒。直後に爆発を起こす。何も知らない艦隊は

光弾を食らいその爆発も受けてすべてが吹き飛んでしまった。原型を残したものなど何一つない。すべては星の爆発とともに消え去ったのだ。

……というわけでもないらしい。彼方への呼びかけなんて初めて使った。一応一度は使ってみたかったので神秘を鍛えはしたが、確かに威力は絶大で直撃したものはチリになったし、爆風で十分吹き飛んだ。それでも外したり中途半端で生き残ったものがいる。しまった。武器なんて持ってきていない。最悪素手で殴るしかないだろうか。

相手には、ヲ級がいた。夜中だし艦載機は出さないだろうと思っていたがなんと普通に発艦してきた。まさか獣狩りでヤーナムを訪れている間にこんな個体が出てくるとは。艦載機からの攻撃をよけるのは簡単だ。しかし狩るのは難しい。武器の類はいまだに没収されたままだし、なんか手元に残しているものは……あ、あった。こんなものがあった。

彼女は懐からずさんに止められたはさみのようなものを手にはめた。

艦載機が爆弾を落とし至近弾、もしくは直撃したのかヲ級から彼女は水柱で見えなくなる。攻撃を続けるべきか否か、水柱が崩れ相手の様子が見えた瞬間に判断を下す…はずだった。水柱に穴をあけて突撃する一つの塊があった。艦載機の攻撃をやめる判断と相手を確認してから判断を下すという思案の間に起った出来事にヲ級は水柱が収まってから判断しようという考えを頭に残したまま本能で防御態勢をとった。頭より上のものが強く後ろに引っ張られる感覚がした。予想以上に強いその衝撃はヲ級を後ろに引き倒した。確認しなくともわかる。格納庫がやられたのだ。その証拠に頭の上がかなり軽くなった。今、自分は無防備となった。護衛の仲間もみな中破以上の損傷を受けている。この艦隊の旗艦としてヲ級は被害を最小限に食いとどめるため撤退を決意した。すぐさま残りの仲間に撤退の指示を……

――――――――――――ッッッ!!!

咆哮だ。なにか吠えた。聞いたことのない鳴き声だ。仲間の声でないことは明らかだった。では、この声の主は…？それは、予想だにしなかった、しかしありえたものだった。だって、それは到底艦娘とは思えないものだったから。雲から月が出始めた。格納庫がないヲ級にとっては今まで以上に景色がよく見えただろう。ゆえに月光に照らされたそれをはっきりと見たはずだ。片手には動物の手をまねたようなもの。もう片方には動物同然の腕。顔を深く覆ったその衣装でうなだれているせいで表情は全く読み取れない。しかし、ありえないほどに美しい月がそのシルエットをはっきりと映し出す。

また、吠えた。今度はその主も一緒に。やはりそれが発していたものだった。飛び込んできたソレは両腕を広げ、大方人の形をしていればすることはなさそうなフォルムだった。護衛の一隻が標的だった。もはや動くことしかできなかったその仲間は避けることなどできるはずもなくソレの餌食になった。一振りするごとに舞い上がる仲間の体液。装甲がまるで役目をはたしていない。その光景はヲ級を含め艦隊の全員をくぎ付けにするには十分すぎた。同族にしか聞こえないおぞましい悲鳴が止んだ時、ヲ級は再び撤退命令を出した。仲間が撤退を開始する。ソレがまた飛んだ。今度は自分であった。今度は杖を前に出して受け流そうとする。だが、それがいけなかった。杖で防御姿勢をとった。ゆえにヲ級は迫りくるソレをまじかではっきりと見てしまった。目が合った。血走った、いやそれでも足りないほどにおぞましい目。瞬間ヲ級はソレの目に映ったものを見た。

理解できなかった。訳が分からなかった。存在などするはずがなかった。こんなもの存在していいはずがなかった。しかし、それは今目の前で自分めがけて飛んできている。ここはどこだ。あれはなんだ。どうして棺を開けている。どうして私は棺を開けて、棺の中から私を見ている。悪夢だ。悪夢が見える。町中に悪夢が広がっている。月からやってきた悪夢が夢の中にやってきた。私を連れて行こうとする。いやだ、やめてくれ。私に近づいてくるな。逃げたい。手足を必死に動かして花畑を匍匐する。ああ！だれだ。今私の足を切ったのは。奴だ。奴がいる。奴が私を狩ろうとしている。おかしい、違

う、矛盾だ。矛盾しているんだ。矛盾している矛盾している矛盾している矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾、待て。はて、月は二つあっただろうか。満月が少し欠けたものと。大きく赤みを帯びた月。脳は理解を求める。だが求める理解はない。それでも理解を求め脳は外へ行こうとする。耐えろ。だめだ。言ってはならない。その理解を求めてはならない。だめだ、出て行ってしまう脳が外に、そとにそとにソトニぃィイイィィいいぃい!!!!……ッ…

彼女は理性を保っている。故に目の前に浮かぶ物体を眺めていた。少し前聖杯ダンジョンから持ち出した獣の爪。恐らくそんじょそこらの人間が使えばたちまち理性を失ってしまうであろうこれは彼女のような狩人だからこそ扱えるものだ。この浮かぶ物体は彼女が首を飛ばす前に頭が吹き飛んだ。この物体は彼女を見たらしい。彼女を理解しようとしたそうだ。理解できるはずのないものを理解しようとした慣れの果て。この物体には啓蒙が足らなかったらしい。今日はもう止めにしよう。月も隠れた。残党も狩った。今夜はもう狩る必要もない。彼女は来た道を戻っていった。

アメンドーズはまだいた。相変わらずその視線を彼女に投げ続けている。彼女は奴を無視して部屋に戻っていった。ただもし奴が何か邪魔をするようであれば即刻狩ってしまおう。早々に狩りを切り上げたせいで窓の外は暗く今日の月は少し欠けた様子を見せている。きれいな薄い薄い青色だ。彼女は血に濡れた狩り装束から着替え、制服で椅子に腰かける。海面と水平線、その上に位置する月。なんとも綺麗なものだ。それに加えられる静寂。ここなら奴の視線も届かないのである。彼女はそのまま月が水平線に近くなるまでただひたすら月を眺めているのであった。

そうして月も沈みかけたころ彼女は灯りのことを思い出した。物

置に行けば灯りが物悲しく光っている。どれ、そろそろ一回戻ってもいいころかもしれない。

目を開ければ目の前にはあの花畑が広がっていた。後ろにはあの石碑が立っていた。門を開け家に入る。

「ああ…狩人様。」

何時も通り彼がそこにいた。彼女は彼に微笑みを見せる。

「ええ。とても楽しいの。新しい発見もあったわ。上位者狩りよりも楽しいこと。」

彼は彼女の頭を撫でる。

「うふふ。これは私の昔の服よ。狩人様と初めて出会ったときに来ていた服。……そうね。あの頃からずいぶん変わってしまった。でもそれは狩人様も。昔の狩人様はかわいいなんて絶対行ってくれなかったわ。」

彼は彼女の言葉に何も答えるそぶりがないが、ただひたすらに彼女の頭を撫で続ける。

「…故郷というものは私を戻してしまう。少し、人間に戻ったわ。それがいいことなのかはわからない。複雑な気持ちになるの。」

彼は彼女の頭に手を置いたまま動きを止めた。

「えへへ。そうよね。狩人様の言う通り。もう行かなくっちゃ。」

彼女は彼の手を降ろし家を出ようとする。

「狩人様は私が獣になっても狩人様でいるのかしら。」

彼女は彼の反応を確認せずに行ってしまった。まるで大きな独り言のように済ませた。人形が立っていたが、人形が彼女に話しかけることはなく彼女もまた人形に何も言葉をかけずに通り過ぎた。石碑の前にたたずむ。正面に大きく書かれた自分の名前。その横に書かれている年号。その期間は1年にも満たなかった。彼女は膝真づき消えた。

第5話

しまった。ついでに本を持ち帰ってくればよかった。と、後悔しすぐにまた戻ろうとするが運悪く外からノックが聞こえてきた。少し急いで扉を開ける。いたのは叢雲だった。

「おはよう。はいこれ、朝ごはん持ってきたわ。2時間後にまた来るからそれまでに食べといてよね。」

「…ありがとう。」

時計を見るとちょうど6時だった。外もいつの間にか明るくなっている。朝食を食べながら読みかけていた本を読み切った。なかなかに面白かった。流石当時テレビで話題になったことだけはある。本棚にはまだまだ本がたくさんあるからしばらく暇はしないだろう。早速に冊目に取り掛かった。

しばらくまともに文字を読んでいなかったので最初のほうは苦労したが一冊読み切るとすっかり元に戻って8時時を回るころには中盤まで読み切っていた。またしてもノック。案の定叢雲、そして吹雪がいた。

「回収に来たわ。あ、それと今からついでについてきてくれないかしら。」

「提督が呼んでるんだ。なんか試験するらしいよ?」

「試験?」

「うん。詳しくは聞いてないけど、とりあえず暁ちゃんを呼んできてほしいって。」

「分かったわ。」

二人に連れられ外に出る。ほかの人は大丈夫なのかと聞くと、それぞれが業務や訓練を始めるころだからこっち方面に来ることはない、だそうだ。いくら、業務があるとはいえこっちに一人も来ないというのはないと思うが、たしかにこっちには旧客室以外には本当に何もない。途中で叢雲と別れて吹雪と二人きりになる。この吹雪がかなりおしゃべりでやれ、生活には慣れたか、とかどんな本を読んでいるのかだとかいろいろ聞かれた。ちなみに吹雪が彼女の部屋を見たこと

はあっても、読んでいるところを見せたことはないはずだが。
「…なんで本のことなんか聞くの？」
「あれ。暁ちゃん本読んでなかったっけ？机に開いてる本があったと思うんだけど。」
吹雪を中に入れたのは荷物を物置に突っ込んだだけの時だ。あとは扉に前にいたに過ぎない。まさか隙間から見たのか。となれば恐ろしいほどの観察力だが…。
「いえ。何でもないわ。そうね、あまり常識にとらわれてない物語が好きよ。」
「常識にとらわれてない？」
「ええ。」
「それってどんな？」
「どう、と言われるとそうね…私たちにとっての非日常が主人公にとっての日常みたいな…。」
「深海棲艦がいないことが日常な世界ってこと？」
「そうね。そんな感じよ。もっと言えば代わりに別の脅威があるやつがいいわ。それも私たちが理解できないような。」
「へー。難しそうなの呼んでるね。」
「そうね。最近は比喩じゃなくて言葉そのものの通りが欲しいわ。」
案外話し込んでしまった。彼女もまた、自分がかなり読書にはまっているのだと認識した。吹雪が案内したのは工廠だった。裏口であろうドアから入ると中で明石が座っていた。なにか書いている様子だった。
「明石さん連れてきましたよ。」
「ん、お、ありがとう吹雪ちゃん。じゃあ、暁ちゃんはこっち来てね。」
呼ばれたのは彼女であったが吹雪もちゃっかりついてきた。どうやら試験が気になるらしい。明石が同伴を許可したので彼女が何か言うことはできないが…。明石は彼女を作業スペースらしきところに案内した。ラジコンサイズの艦載機がずらりと床に並べてあって機械が動いている音がとてつもなく大きい。

「夕張ちゃーん！あれ持ってきてー！」
明石がスペースの奥に声をかけると奥から、はーい！と答える声がした。このスペースは直接つながっているらしく入ってきた外の光が艦載機を半分ほど照らしている。彼女がいるところはちょうど横に荷物があって影になっていた。返事から少し遅れて顔を出したのは夕張、とその後ろから大量にやってくる妖精だった。夕張の手には彼女の狩り道具がいっぱいいっぱいに積まれていた。そのほかの道具も後ろからついてきた妖精が運んでいるらしい。どこか…この様子をどこかで見たことがある。…望月が持っていたゲームにこんなものがあった気が…。
「すいません。お待たせしました。いや、量が多くって…うわ！びっくりした…すご、本当にそっくり。」
「でしょー。これで全部？」
「確認したんでこれで全部のはずです。あ、ヤッホー吹雪ちゃん。」
「おはようございます。夕張さん。」
「どう。暁ちゃん。これで全部かな。」
聖剣に、千景、慈悲の刃に……
「…うん。全部あるわ。」
「よしよし。じゃ、さっそく行こっか。」
「いくって？」
「あれ？聞いてない？試験するって言われてると思うんだけど？」
「ここじゃないの？」
「違うよ～。今回やるのは戦闘試験。暁ちゃんの戦闘能力の計測をね。」
「あ、私もいいですか？」
「吹雪ちゃんも？」
「はい。今日特に何もないんで。」
「それじゃあいいかな。どっちみち有事の時の護衛が増えるんだし。試験は〇九〇〇に始めるからちょっとゆっくりしててね。」
時計を見た感じではまだあと３０分ほどある。
「これは？」

「これ？今度の作戦で使う予定の航空機だよ。」
「…いろいろあるのね。」
「そうだねー。ここ数か月で一気に開発を進めたからね。そろそろジェットも開発のめどが立ってきそうだよ。」
「ジェット。」
「そう、ジェット。」
彼女がこの世界から消えて何年たったかのかは分からないが最近の航空機はかなり発展しているようだった。あの頃は空母さえなかなか配備できなかったし航空機なんてのはほぼ陸上からしか飛ばせなかった。それも複葉機が限界だった。それがジェット機までとは。
ゆったりとした時間が流れていた。特にやることがないやることがない彼女は無造作に置かれていたベンチに座るしかなかった。ついてきた吹雪はついでだからと明石に艤装の点検をしてもらっている。
「あー。また無理したねぇ。うーん、まだ実用的ではなかったかー。」
「でも、いつもより故障は少なかったですよ？加速もよかったですし。」
「でも、燃費悪いでしょ。」
「あー、まあ。」
「あ、いた。」
二人のよくわからない会話に耳を傾けていた彼女だったが突如声の主が一人増えたため少し目も傾けた。いたのは叢雲だった。
「探したわよ。こんなところにいたのね。」
「ごめんごめん。ちょっと暁ちゃんの試験がどんなものか気になってね。」
「ふーん。で、当の本人はそんなところで何を？」
「…ベンチに座っているわ。」
こう、ベンチに座っていると何か思い出しそうだ。確か、ヤーナムの聖堂街にどこかベンチの置いてあった広場があったはずだ。そこから大橋が見えたのを覚えている。ここから見えるのは反対側工廠

の壁だ。
「ねえ。叢雲ちゃんも一緒に見に行かない？」
「試験に？でも迷惑でしょ。そんなに大人数で言ったら。」
「んや。別に構わないよ。」
「まあ…明石さんがそういうんだったら別に…。」
どうやら同伴者がもう一人増えたみたいだ。
「すみません。遅くなりました。」
少し慌て気味で工廠に入ってきたのは赤城だ。察するに、今回の本来の護衛だろう。遅れたと言ってもまだ２０分以上あるのだが。
「大丈夫ですよ。まだ２０分以上ありますから。」
「え、あ、本当…。」
「時計でも壊れてたんですか？」
「そうみたいですね。部屋の時計が１０分ほど早かったみたいです。」
結局２０分余ってしまった。予定を早めないのかと聞くと、提督も参加するらしいので提督が来ない限りは始めれないそうだ。
「提督も来るの？」
「うん。一度自分の目でも見てみたいって。」
「あんまり見せるものではないのだけど。」
「まあまあ、そんなこと言わないで。私も結構気になるんだよ。暁ちゃんからもらったやつ、あれ素材はごく一般的なもので、何なら素材の質では今の金属よりも悪かったから。いったいどう扱えば深海棲艦の装甲を容易く破れるのかとね。」
「あ、そ。」
「うーん素っ気ないなあ。なんか私の知ってる暁ちゃんと差がありすぎる…。」
「…暁、さん。今回の護衛を務めます赤城です。」
「言いにくいなら態々そんな名前で呼ばなくてもいいのよ。」
「いえ、あなたは紛れもなく駆逐艦暁なのですからそういうわけにもいきません。早くこちらが慣れればいいだけのこと。」
全くまじめなことだ。こっちから見ても無理してるのが分かる。

恐らく赤城が今最も彼女に対していまだに猜疑心が強いのだろう。加賀とは違って先入観が強いようだ。別に彼女が怖いのであれば今回の護衛など引き受けなくてもよかっただろうに。…いや、言うまあ。どうせ同じことを繰り返されるだけだ。

彼女は視線を外に向ける。まだそれほど時間は経ってないがすでに日差しが強い。彼女もすっかりこの世界に慣れてしまったといえよう。これもヤーナムでは一切経験してなかった朝というもの。目指していた夜明けよりさらに向こうのもの。あれほど苦労したものが何もしなくてもやってくるこの世界は、しかしヤーナムにも存在したはずのものである。すべては獣の病が悪い。相変わらず何もない今この瞬間。彼女の後ろから聞こえてくる様々な音が彼女の耳に入ってくる。ほとんどは何かしらの機会の音だが、かすかに聞こえる明石と赤城の会話。吹雪と叢雲の会話。何かを叫ぶ夕張。獣の叫びでない音が彼女を埋め尽くしていた。

「や、待ったかい？」

水平線を楽しんでいると工廠の端から提督が顔をのぞかせた。彼女はちらりと時計を見る。予定時刻まであと１０分。

「…いえ、全く。」

「そっか。それはよかった。どう、ここの生活で何か不満はあるかい？」

「いえ、満足に過ごさせてもらってるわ。」

「そうか、それもよかった。」

「あ、提督。来ましたか。」

「いやーすまないね。どうやら来たのは僕で最後みたいだね。なんか2人増えてるけど。」

「あ、いや。私たちもちょっと気になるなーって。」

「そういうことね。まあ、せいぜい気を付けて。それじゃ行こうか。」

「あ、はい。夕張ちゃーん！あと頼んだよー！」

「はーい！」

提督を先頭にみんなが歩く。彼女もまたついていく。やはりあの

時のドッグから出るらしい。狩り衣装に着替えた彼女は水面を歩きだそうとするが明石がそれを止めた。
「あ、暁ちゃん。こっち乗ってくれるかな。そっちのほうが楽だからさ。」
なるほど。確かに全員で一緒に向かったほうが変に速度を合わせずに行かなくて済む。彼女は明石の言う通り乗船した。中はそこまで広くない。そのスペースもほとんどよくわからない機械で埋められていた。明石が手際よくエンジンをかけ外に出る。
「予定海域はここから北東に３０ｋｍほど行ったところ。大体３０分ぐらいで着くかな。」
なんだもう３０待つのか。
「……？」
彼女はふと視線を感じた。視線と言えばアメンドーズだが確かに今も建物にくっついて彼女を見ている。しかし彼女は別に視線を感じていた。しかもそれは海上からだった。あたりを見ても特に何かあるわけでもない。それにその視線もすぐに感じなくなった。気のせいか。
予定海域までつくまでずっと船に揺られっぱなしだった。その途中で何度か先の視線を感じた。そのたびにあたりを見渡すがやはり何もない。少し啓蒙を取りすぎただろうか。見えないものが見えるのは面白いがあまり見えすぎても面白くないし、発狂しやすくなるのもいただけない。今度いくつか取引しようか。
「着いたよー。」
着いたらしい。特にこれと言って目立つものがあるわけではないが。
「ちょっと、これ誰か持ってくれないかな。」
「あ、私持ちますよ。」
明石は何か機械を外に出している。提督も手伝っていた。
「ふいー。…よっ。」
明石が何か打ち出した。水上機らしい。明石が持っていたのはカタパルトか。

「よし、じゃあこれ持って。暁ちゃんはこっからもう１ｋｍ進んでね。そこで始めるから。」
「分かったわ。」
明石に言われた通りに進んだ。持たされた無線機から明石の声がした。
『あ、あー。聞こえてるかな。今から暁ちゃんには３０分ほど深海棲艦と戦ってもらうね。』
「なに。戦術テスト？」
『まあ、そういうことだね。いま頭上を観測機が飛んでると思うけどそこから試作型の深海棲艦をおびき寄せる装置を落とすね。それの効果時間が３０分だから。』
なんだ。ついでにその装置の実験も入ってるのか。
『でね。問題はその装置がどれだけの効果を発揮するのか未知数なんだよね。もし、予想以上に来るようであれば赤城さんの艦載機で対処してもらうしそれでも無理そうなら回収するから安心して。じゃあ、準備はいいかな。』
「ええ。何時でも。」
『オッケー。』
明石の声と同時に何か落ちてくる音がする。それは海中にぼちゃんと落ちた。あれが例の装置だろう。
ああ。悪趣味なことだ。どうやっておびき寄せるのかと思ったが、声でおびき寄せるなんて。普通人間や艦娘が深海棲艦の声を聴くことなんてのは姫級やそれ以上のものでないと不可能だ。だが、彼女には聞こえる。深海棲艦のまるで憎悪に満ち溢れているような声が。それは言葉なんかではない。まさに鳴き声のようなもの。聞いていてあまり気分のいいものではないがそれも今更だ。
今は真昼間で月など到底出てるはずもないがまあ、べつにいい。きっと多くの獣がやってくることだろう。それでは始めようではないか。獣狩りだ。

第6話

海面の下に黒い影が一つ、彼女に近づいてくる。かなりのスピードの伴って飛び込んできた。しかしあらかじめ構えていた鉈を振り下ろされて飛び出した勢いのまま2つに割れてしまった。ノコギリ鉈はそんな切り口がきれいになるような切れ方はしない。よってその断面はボコボコするし、切る際に中の内蔵を雑に傷つける。彼女には大量の血と言えるような青い液体が降りかかる。青い液体。もしこれを血というのであればまさにこれは青ざめた血だ。

『青ざめた血を求めよ。狩りを全うするために。』

昔見た手記を思い出した。

彼女はその大量の返り血を浴びても微動打にしない。飛び出した深海棲艦を2つに割った体制で静止していた。いや、むしろ彼女は笑っていた。

さっきのを皮切りにしてか海の影がどんどん増えていく。

不思議とこのおびき出された深海棲艦はその全てが重巡以下であり、皆砲撃をせず叫び声を上げながら吶喊する。周りを一切気にしてないような行動は戦術的とは到底思えず、もはや互いを認識しているのか、理性があるのかも怪しい。それは彼女めがけて突撃する際よく互いの体をぶつけるものだから、おかげで確かに切り裂くはずだった彼女の刃が、空を切る、カス当たりする、別の個体を切り裂くほどであった。

彼女は思った。これでは効率が悪いと。ノコギリ鉈は複数の相手を一度に相手するには分が悪い。彼女は斧を取り出し、その柄を伸ばした。体をひねり体制を低くする。大量の深海棲艦が彼女の全周から一斉に飛び出す。瞬間、彼女はその体制を引き戻しその勢いのまま2回転した。遠心力を伴った斧は深海棲艦の装甲などものともせず容易く切り伏せた。ボトボトとただの肉塊とかしたものが一時的に肉の壁を作った。

その様子を観測機を通して見ていた明石たちは、まさに絶句といったような様子だった。

「う、うわぁ…。」
「おびき寄せ過ぎじゃない？」
「そうですね。実践訓練に使えたらと思ったんですけどこれ訓練どころじゃなくなりますね。」
「…そっちなのね。」
「彼女を敵にしたら駄目ですね。」
「うん。僕の鎮守府終わっちゃうね。…これならとりあえず心配することはないね。」
「はい。あとは担当海域がどこになるかですね。」
彼女はその後も深海棲艦を切り、叩き潰し、串刺しにした。気づけば周りは沈みきっていない残骸だけで、海の色が変わるほどの影も今は一つもない。あの機械から発せられていたおぞましい声もすでに聞こえなくなっている。終わったのだろうか。取り敢えず明石を呼ぼうと無線機を持つが、どこを押しても反応しないし明石が呼んでくるようなこともない。壊れたのか。いろいろ傾けるとスピーカー部分の穴から深海棲艦の血がドボドボと出てきた。すでに血で染まっていたこの無線機。この様子だとカバーの隙間から血が入って壊れてしまっているだろう。伝わるかはわからないが上を飛んでいる水上機に無線機を掲げたままバツじるしを作ってみる。少しだけ残っていた血がポトポトと慕っている。意思は伝わったのか、バンクした。
１０分ほどしてクルーザーが来た。
「どうしたの。話しかけても全然応じないしバツじるしも。」
「無線機が壊れたのよ。」
「どれどれ。…んひゃ⁉」
明石は彼女から無線機を受け取った瞬間ぬちゃっとしたその感触に思はず落としてしまった。運良くクルーザーに落ちた無線機は白いクルーザーの床に藍色を着けた。深海棲艦の血は青く、さらに彼女の服装とその無線機が黒かったのでよくわからなかったがどちらも血まみれだった。
「ぇ、これまた派手に…。」

「私、深海棲艦の血初めて見ました…。」
「いや、普通見ないと思うわ…。」
クルーザーの椅子に座るとベチャっとした感触がある。
クルーザーが出発した。
「……。」
やはり誰かがこちらを見ているような気がする。結局見回しても何もいないのだが。

鎮守府に戻ってきた。
「着いたよー。暁ちゃんはとりあえずシャワーをって、な、なんでそんな綺麗になってるの?」
つい数十分前まで深海棲艦の血や贓物でまみれていた彼女の全身はすっかりきれいになっていた。しかし彼女が座っていた場所は少しの青いしみ以外痕跡はなにもない。まるで血や贓物が蒸発してしまったかのようだった。
「狩人なら常識よ。」
「どんな常識よ…。」
「叢雲ちゃん今日突込みばっかりだね。」
「…なんででしょうね。」
今日はもう解散でいいといわれた。吹雪の付き添いのもと部屋に戻る。ついでに昼食も渡された。さっと食べて本で読もう。
少しだけ読み残していた2冊目を読み始める。まあ、1冊目と比べると突拍子もない世界観ではないが話自体は面白い。まともな世界だから人物の言動い理解しやすい。そうすれば読むスピードもおのずと速くなるものだ。3冊目はどうしようかと本を収めながら本棚を眺める。個々の本棚にはいろいろなジャンルがある。本自体も2つある本棚にぎっちりと仕舞われている。ヤーナムから本を持ってこようとしたが収めることが出来なさそうだ。諦めるしかないか、と思いつつ目に入った本を一冊取り出してみる。…これでいいか。
机に置いたその本は今の時代ではなかなか見ない無地の表紙で革のような質感だった。題名も何も書いてない。どれどれと一枚め

くってみる。
「…。」
本に書いている文字は読めなかった。だがなぜかその内容は理解できる。内容としては、何かの召喚だったり魔法に関してだろうか。…ああ。多分これはやばい本だ。なにか、引き込まれそうだ。そして頭の中をかき回そうとしている。常人ならくるってしまうような代物だろう。狩人である彼女にはせいぜい啓蒙が増えたぐらいだが。今更魔法だの召喚だの何回も見てきた。これぐらいで狂うなんてことはない。せっかくだ最後まで読み切ってやろう。
ある程度呼んでみたことだし、なにか試してみようか。この本によると何か媒体というか魔力がないといけないだしいが、水銀弾でいいだろう。水銀弾を手に取り本に書いている通りに呪文を唱えてみる。
「…お、できた。」
見事水銀弾は彼女の指から火を出す魔法になった。しかし、これなら医療協会の秘術のほうが効率もいいし威力も申し分ないだろう。指からちろちろと吹き出す火をぎゅっと握って消す。召喚の方法についても書いていたが、準備がかなり面倒そうだったのでやめた。
結局この本は最後まで読まなかった。この本、ずっと魔法関連のことしか書いてないし途中で真面目に読むのをやめパラパラとめくってみたところそのあともずっと同じ感じだった。これは本と言っても教科書みたいな奴だろう。書かれている魔法も医療協会の秘術のほうがよっぽど便利なので使うこともないだろう。別の本にしよう。
本を返そうと背表紙を触ったときに気づいた。背表紙に凹凸がある。色がついてないので凹凸とそれによってできる僅かな影で判断するに『ネクロノミコン』と英語で書かれているようだ。本の内容は訳の分からない言語で書かれているというのに背表紙だけ英語とはますますおかしな本だ。
「……？」
誰かに見られている感じがした。海で感じた者とは別のものだ。こっちのほうがこう、威圧感が違う。場所は同じ海のほうから。遠いところから見られているはずなのにまるですぐ後ろから見られてい

るような…。それほど気にすることもないだろうと振り切って別の本を選ぶ。

夕食を食べ終わり月夜とともに読書を楽しんでいたころ。コンコンとノックが聞こえた。返事をすると吹雪が入ってきた。もう、この部屋を訪ねるのは吹雪か叢雲がほとんどになってきた。

「暁ちゃん？会議だから呼びに来たよ。」

「ああ。分かったわ。」

読みかけの本に、付いていた栞代わりの紐を挟んで吹雪についていく。そとは満月から目立って欠けが見え始めていてそれでも月が見えてなかった昨日と比べるとまだ明るい。鎮守府内の道沿いにつけられている街灯がほんのりと明るく光っている。少し蒸し暑かった。今日も今日とてアメンドーズが張り付いて彼女を見つめている。吹雪と一緒にアメンドーズが張り付いている建物に入っていくのだが吹雪は奴に気づいている様子はない。

「連れてきましたよ。」

「お、来たね。それじゃ始めようか。赤城。」

「はい。今日の正午大本営から担当海域の知らせが入りました。」

赤城が丸めた紙を広げた。黒い線が丸く見えるがところどころ赤や青が混じっているので前に書いた線に上から新しく引いたのだとわかる。

「結果として範囲は予想通りとなりました。」

「そうか。」

「これなら作戦の変更もしなくて大丈夫ですね。」

「別の鎮守府の行動範囲も把握する限りは支障はなさそうだね。」

「装備にも変更は？」

「それも変更はない。最新の兵器を使わせてもらう。明石。」

「あ、はい。えと今回使える新兵器はまず試作型ですけど５１ｃｍ連装砲。５連装酸素魚雷…まあいろいろあります。種類多いんで省かせてもらいます。」

彼女は退屈していた。確かに大切な会議であろう。しかし彼女にはほとんど関係のない話だ。自身が本当にこの会議で必要なのかと、真っ暗な窓を見ていた。この部屋が明るいため窓には彼女の姿が映っている。我ながら相変わらずの死んだ目である。その奥に見える狂気も。…ついでに感じる視線。朝のとは違うものだ。やはり遠くからも見られているような感じがするしすぐ後ろからとも思える。恐らくこの視線は彼女しか感じてないだろう。彼女以外の全員は謎の視線なんぞ気にせず会議に集中している。あの、ネクロノミコンとかいう本を読んだあたりからどうもおかしいらしい。

「よし、じゃあ今日の会議はここまで明日もまた確認を行うからよろしく。」

結局彼女の名が挙がることはないまま会議が終わってしまった。しかも、明日もまたあると。自分を呼ばないのであればわざわざこの会議に連れてこないでほしいと彼女は思った。吹雪にふとそう愚痴ると。

「あはは。まあ、今日はたまたまかもしれないし明日は暁ちゃんも必要かもしれないから、ね。」

だそうだ。真面目だなと彼女は思う。昔の彼女もまじめだった。それがゆえに妹を庇う形で結局その妹と一緒に死んだのだ。

建物の近くで彼女は解放された。吹雪に挨拶され適当に返事をする。ふと空を見れば今夜は妙にすこし緑が勝った月に見える。

「変わった月もあるものね。」

月に見とれながら建物に入った瞬間、悪寒が走った。彼女が今までにこのような感覚を感じたことがあるだろうか。少なくともヤーナムで狩人を始めてからは感じたことはなかった。どれだけ恐怖を感じようとも自身の狂気がそれをごまかしたのだから。しかし、今。彼女はその狂気ですらごまかしきれないほどの恐怖を覚えている。いる。確実に何かが。それも彼女が知らないほどの恐怖がこの建物に潜んでいる。恐る恐る建物に入る。中に充満していたのであろうか、いやな空気が彼女を全身を撫でる。これほどまでに暗い廊下というのを不気味に思ったのは初めてだ。

一歩一歩進むたびにろうかがからきしむ音がする。今までこの廊下がきしむようなことはあっただろうか。あそこの部屋の扉はずっと開いていただろうか。今まで気にしていなかったことに自然と注意が向いてしまう。この建物全体からにじみ出ているこの不気味さの原因はどれだろうかと、探し回るせいだ。結局、一階に原因となるようなものはなかった。と、すれば後は二階のみだ。彼女はノコギリ鉈を取り出し変形させる。折りたたんでいた刃を伸ばし、まさに鉈と化した。こちらのほうがフルスピードが遅くなるが、その分、力が入る。

いくら恐怖が勝るとはいえ彼女は狩人だ。その本能は恐怖でかき消されるほどやわなものではない。

二階に着いた。不気味な雰囲気がさらに増した気がする。明らかに彼女の部屋からそれは出ていた。寄りにもよって自分の部屋からだとは。これで確信した、あのネクロノミコンとかいう本内容的にろくなものではないと思ったがまさか得体のしれないものを引き付けるとは…あんな本はあとでヤーナムのどこかにおいてこよう。ビルゲンワースあたりでいいか。

あの本の処分先も決まったところで意を決して彼女は部屋に飛び込んだ。部屋を開けた途端あの不気味な視線を一気に感じた。その刺さるどころかぶつかるほどに全身で感じる視線とともに部屋に踏み込む――

ことはできず、彼女の足はとらえるはずの床をとらえることができずさらに下へ行く。前に転ぶような形になるが支えようとした彼女の手も床につくことはなくさらに下へ沈む。これらの出来事に彼女は驚くがそれよりも早く、まるで最初からそこに地面などなかったかのように彼女の全身が床よりも深く沈みこんだ。

第7話

彼女の目の前には緑色が広がっていた。その場でもがく感じで水の中にいるのだとわかる。しかし、息苦しさを感じることはない。

緑色に黒色が混じってきた。…否。違う。黒色が混じってきたのではない。黒い空間の中で緑色の何かが動いているのだ。気づけば彼女の周りには細長い触手のようなものが取り巻く。しかしその触手も彼女からはかなり遠く見える。それでも彼女よりも圧倒的に長く見えるそれはいかに巨大化なのかを示す。もはや、その触手が目の前の緑色のものと繋がっているのかわからない程に。そしてよく目を凝らすと下の、底のほうに小さく建物の跡が並んでいた。まるで町のようだった

緑色の壁から目が開いた。片目だけだがそれでも彼女よりも大きい。目が開いたことでその他の配置がある程度把握できそうだった。

「……」

「…何よ。」

「……」

「放っといて。」

それがは彼女に話しかけてきた。彼女にしか聞こえない声。彼女は淡々と答えるが、しかし心の中では全く余裕がなかった。ちょっと気を抜けば意識を持って行かれそうだ。…発狂してしまいそうだ。一本、一本と鎮静剤を飲む。空になって捨てた瓶は彼女の下に広がる真っ黒な空間に吸い込まれていく。動くときの抵抗感と違って声を出した時の反響や息苦しさがないのでここが本当に水中なのかが分からなかったが、ゆっくり、ゆっくりと空き瓶が落ちていく様を見るとやっぱり水中なのだとわかる。

「……」

「…聞こえなかった?…無駄よ。」

「……」

「……」

物体は絶えず話しかけてくる。そろそろ答える余裕がなくなって

きた。絶え間なく鎮静剤を飲むが追いつかない。啓蒙がどんどん上がっていく。駄目だ。もう耐えられない。
「…っ。」
頭がはじけとぶ。体に自分の血が降りかかる。彼女は体勢を崩し床に倒れた。
「……っはぁ、はあ。…耐えれた…。」
床に倒れた。もうさっきの緑色の何かも、あの空間も、建物全体を取り巻いていた不気味な雰囲気も、視線すらももう何もない。立ち上がった彼女は床に転がった大量の空き瓶にぶつかり、自分の血が付いた衣服がこすれたときのニチャっとした音を立てながら立ち上がる。外はすでに明るくなっていた。
「…うそでしょ。」
せっかく出かけてすっきりしようとしてたのにこの有様である。今度出てきたらあのタコ野郎は狩ってやろうと胸に誓った。…はて、何故タコ野郎なのかあのとき触手らしきものは見えたがタコだとはわからなかったはずだが。なぜあれだけでタコと判断したのか自分でもわからなかった。
今がもう朝であることを知らせるようにノックが鳴った。しまった。今自分は全身血だらけだ。しかも外に出る前だったので寄りにもよって制服姿で、である。流石に制服は狩り装束のようにはいかない。普通に洗濯しないとだめだ。制服に予備はないので、とりあえず狩装束を着てドアを開ける。吹雪が朝食を持ってきていた。最近本当に吹雪ばかりが訪ねてくるようになった。そのことを吹雪に言うと
「提督がね、仲がよさそうだからって、任されてるんだ。」
だそうだ。別に特段仲がいいわけでもないのだが。
「そういえば、暁ちゃん服どうしたの？いつもと違うね。」
「たまには違う服を着たい時だってあるのよ。」
服のことはそう言ってごまかした。あとでどこかで洗濯しなければ。
なんともやりきれない気持ちで朝食をとり本を読んでいると不意

にノックが鳴った。回収に来るにはまだ時間が早いはずだが…。
「隣に引っ越してきたものです。挨拶に来ました。」
隣に引っ越してきた？隣というと空き室のことだろうか。いや、まて。そも、ここは鎮守府でこんなアパートのようなことが起こるはずはないのだが。しかし、彼女にはそんなことはどうでもよかった。お隣さんである。母から、毎度のようにお隣さんとの関係は大切にするべきだと言われていた。
「はーい。あ、これはどうも。」
だから、彼女の言葉遣いも丁寧になる。
「初めまして、隣に引っ越してきた鳴子と申します。」
「あ、私は暁です。」
そこに立っていたのは、きれいな女性だった。綺麗すぎるとも言っていい。彼女が出会ってきたどの女性よりもきれいだった。
「暁さんですね。あ、これ良かったらどうぞ。」
「ご丁寧にありがとうございます。」
鳴子という女性が手渡してきた紙袋を覗くと、入っているのはもみじ饅頭の箱らしかった。何故もみじ饅頭なのか。
「もみじ饅頭ですか。」
「はい、ちょっとここに来る前に寄ったものですから。」
鳴子とは、そのまましばらく話をして別れた。机の上で箱を開けもみじ饅頭を一つ取り出す。袋には『カスタード』と書いてある。もみじ饅頭が広島のお菓子であるのは知っていた。しかし彼女は佐世保生まれであるのでこれと言って広島に思い入れがあるわけでもないし、もみじ饅頭すら初めて食べる。が、話だけは聞いていた。話の通りこの饅頭はおいしかった。しかしまあ、こういった菓子を食べるとどうものどが渇く。あいにく渡されたコップのお茶は飲み干してしまった。また吹雪が来た時にお代わりでも貰おう。
回収に来た吹雪にその旨を話すと
「それじゃ、ここに冷蔵庫でもおいてもらう？いちいち頼むのも面倒でしょ。」
彼女はただお茶のお代わりを頼んだだけで話が飛躍した気もする

がまあ、確かに饅頭はまだたくさんあるし、そのたびにお茶をもらうのも確かに面倒だし頼んどいたほうがいいだろう。
数時間後、吹雪、ではなく長門が小さめの冷蔵庫を持ってやってきた。吹雪はその後ろで大きめのペットボトルのお茶を持ってきていた。流石に吹雪では冷蔵庫は持ってこれなかったようだ。
「はいこれ、必要になったら言ってね。」
「ありがとう。」
今日は特に自分を使うようなことはしないらしい。今日の静寂が訪れた。となれば彼女のやることは読書のみだ。読みかけの本を取り読み始めた。
夕方になったころ、またノックがなった。いたのは鳴子だった。
「すいません。越してきたばかりの者が尋ねるのもおかしいんですがちょっと探し物をしていて。」
「いいえ。困ったときにはお互い助け合うものですから。して、探し物ととは？」
「ええとですねこれなんですけど。」
鳴子はポケットから携帯を取り出した。彼女が知っているものより薄いように思えたが今はそんなことはどうでもいい。見せられたのは一冊の本の写真だった。
「ちょっとこの本を探していまして。」
パッと見昔の本のようだった。本の表紙がそんな感じだし色も無愛想な茶色だった。しかしその本の題名は書いていなかった。
「ほう。…この本の名前は？」
「ネクロノミコンです。」
ネクロノミコン…あ、そういえば昨日読んだ奴がそんな題名だったはずだ。彼女は鳴子にちょっと待っててくださいと言って本棚に向かった。
「なんでまたそんな本を？」
「ちょっと、頼まれてましてね。」
あった、あった。が、ぎっちり嵌っているせいでなかなか取り出せない。

「その人は考古学の方かだれかで？」
「いえ、別にそうではないですけど…なぜそのように？」
「その本に書いてある言語が全く見たこともないようなものだったのでてっきりかなり昔の本かと。」
やっと取れた。彼女はネクロノミコンを持って鳴子のもとに戻る。
「…読んだんですか？」
「ええ、まあ。全く書いてあることは読めないのに内容はなぜかわかるとかいう不思議な本でしたけどね。まあ、私にはあまり面白くは感じれなかったですが。あ、気を付けてくださいよ。この本、読んでから変なことが起こりますから。なんか変に大きなタコに気を狂わさせそうになりますからね。私もあそこまで焦ったのは久々ですよ。死にかけましたから。」

彼女はこれでも一定の常識がある。むやみやたらに、ましてまだ一度しかあってない人に本を読んでから気が狂いそうになったただの、変なタコに出会っただのは言わないだろう。たとえ警告だとしても、それが到底理解されるようなことではないと彼女当然分かっている。しかし、彼女は鳴子がこの警告を理解すると判断した。鳴子はこの警告――いや、注意と言ったほうがいいだろう。この注意の意味が分かると。
「…大丈夫ですよ。いや、しかし。驚きました。まさかアレに出会って正気を保ってまさか記憶まではっきりとしている人間がいるなんて。」
そのなるこの言葉はまるで自分が人間ではないとでも言っているような言い草だった。
「なんか、自分は人間じゃないって言ってるみたいですね。」
「ええ。私は人間ではありませんから。」
鳴子は当然のようにそう言った。彼女は、しかし当然のようにそれを受け取った。むしろ納得し質問をした。
「なるほど。じゃあ、鳴子さんはあのタコが何なのか分かるんですか。」

「タコ…はは。いいですね気に入りました。今度から私もあいつのことタコって呼ぼ。…あ。すみませんえっとあのタコですね。あー、言葉で説明するのはちょっと…あっあれ。ちょうどあれがまあ、似たようなやつですよ。」

鳴子が指したのはアメンドーズだった。

「存在はあんな奴よりもっと上ですけどね。」

当然だ。彼女の正気を奪いかねないほどの存在だったのだ。そんじょそこらの上位者クラスではないだろう。しかし、アメンドーズと似たような存在とは？あのタコは上位者なのだろうか。こう言っては何だが上位者という枠には収まりきらないような気がしたが。

「一応、支配者ではありましたからね。いくら馬鹿にしたところでそれは事実なんで。あ、一つ言っておきます。別に擁護するとかじゃないんですけど、奴に刃向かおうなんて思わないほうがいいですよ。人間とは格が違い過ぎるんです。本来一生出会うことのないような存在なんですから。まあ、あのタコも、もうあなたには近付こうとはしないでしょうけどね。」

鳴子は礼を言って自分の部屋に戻っていった。

「…人間。私が人間かぁ。私も、もはや人間とは言い切れませんけどね…。」

そうつぶやく彼女の言葉はきっと背を向けている鳴子には聞こえなかっただろう。

彼女は部屋には戻らず鳴子が部屋に消えた後一階に降りて昨日建物の中を進んだ時に気づいた洗面台で血だらけの服を洗い何とか血を落とした後、部屋でそれを干し、本を読んでいた。一区切りついてふと窓に目をやった時、遠くから砲撃のような音がした。演習か…、彼女はそう思った。今日はいつもより砲撃の音が激しいような気がするし、時々怒号のような声もかすかに聞こえる。そういえば例の作戦も近い。きっとそれでいつもよりも激しい訓練をしているのだろう。時たま窓からも遠くで演習を行っている様子が見て取れた。

彼女は懐かしいと思った。あの演習の様子を見ていると昔、神通さんと行った演習を思い出す。あの人の演習は特に厳しかったから余

計覚えている。人に厳しい分あの人は優しい時は優しかったしとても強かった。それ相応の人だった。きっとあの人ならあの日を生き延びたことだろう。今もどこかで元気にしているかもしれない。ああ、あの人が言っていた通り厳しかったこともなんでも時間がたてば全部いい思い出になるもんだ。特にそれしかこれといった思いでしかない彼女は特に。

今の彼女があの艦隊と戦ってもきっと彼女が勝つだろう。それほど彼女は自負していたし、実際彼女は強い。ずっと人ならざる者、それを狩る者ですら彼女は狩ってきた。今の彼女に勝てるのはあのタコか、鳴子ぐらいだろう。彼女は鳴子がまとっていたどこか異様な雰囲気を、鳴子が自分は人間じゃないといったことで納得した。どれほどの存在なのか知らないがあのタコを心から嘲られるのであれば相当なはずだ。彼女は正直あのタコには勝てないと思っているし、そもそも二度と会いたくない。あのタコはいくら啓蒙を減らしても嫌でも認知してしまう。鳴子の言う通り奴には下手に反抗しないほうがいいのかもしれない。まあ、また鳴子の言う通り二度とあのタコに会わないのだろうけど。

「世の中って不思議なのねぇ。」

どこかで知ったか、事実は小説よりも奇なり、という言葉。まさにこのようなことを言うのだろうと彼女は思った。この世界もこの世界でヤーナムと似ているのかもしれない。あの狂った世界に。

月日は淡々経って行った。もはや代わり映えのしなくなった毎日。彼女が日中に呼び出されることもなければ、意味もなく出席させられる会議でなにか尋ねられることもない。楽しみで言えば読書と、窓から眺める演習の風景、あとはなることも会話ぐらいだろうか。気づけば作戦日前日となっていた。

第8話

「出撃が今夜？」
「うん。前日の夜には出てほしいって。」
吹雪は朝食を差し出しながらそう言った。
「そんなこと聞いてないのだけど？」
「ごめんね。提督が伝えるの忘れてたって。」
情報の管理ができてないな。しかも当人に一切の相談もなしに決めている。ここの提督は無能か？それとも彼女を信用しきっていないということか。いや、隠ぺい作戦の概要の稚拙さを考えると無能である可能性が高いだろう。今回彼女は先の兵器実験時並みに暴れる予定だ。彼女の常識から考えてまずもって一艦隊が出せるような戦果ではないだろう。隠ぺい作戦に参加する艦娘の数はまあ…艦隊一つぐらいだろう。あれを見て一切変更しないようならいよいよ本当の無能だ。しかし、提督が無能だろうが有能だろうがどっちみち彼女には関係のないことだ。呆れながらも彼女はその時を待つことにした。
時計の針が１０を超えたころ、鳴子が部屋に訪ねてきた。
「おはようございます。」
彼女はここ最近毎日この時間帯、この場所で鳴子と世間話をするようになっていた。しかし、今日は別の場所で話そうというのである。
「外のベンチですか？」
「はい。すぐ横にあるんです。」
はて、ベンチなどあっただろうか。毎日無駄に外に連れ出されているが、ベンチがあった記憶はない。とりあえず鳴子についていくと確かにあった。しかし、そこはいつも歩く場所とは反対側だった。なるほど、道理で見たことがないわけだ。そこにあったベンチは、周りに何もないせいかどこか哀愁を漂わせていた。
彼女は鳴子の隣に腰かけた。昨日まで騒がしく聞こえていた演習の音も、今日は鳴りを潜めている。明日のために体力を温存する算段だろうか。

「今夜出発ですか？」
「おっと、聞こえていましたか。」
「ええ、そんな感じがしたので。」
彼女はこの人のことをつくづく不思議な人だと思っていた。そういえばこの人は人間ではなかったな。では、この場合どういうべきか。鳴子さんはあのタコと同じ類のものらしいが。
「どうかしましたか？」
「あ、いえ。鳴子さんは人間じゃないんですよね。じゃあ何者なんだろうなあって。」
「ああ…。人間どもは私のことを皆神様だとかニャル様だとか言ってましたね。」
に、にゃる？いや、それよりもまさか神様だったとは。神様ということはつまり上位者？…だめだ。鳴子さんは大事なお隣さんだ。
「だからって、そんなに委縮しないでくださいね。暁さんとはお隣なんですから。同等ですよ。」
「はい。もちろん。」
彼女は気をそらすため海を眺める。静かな波の音がただただ聞こえる。今日は曇りであるが、晴れているときであれば絶景とまではいかずとも、きっといい風景だろう。
「暁さんは、ここをどう思いますか？」
「ここ、ですか？…思うというと、どう？」
「ここはいつまで持つと思いますか。」
「もつ…。そうですね、あまり長い間は持つとは思いませんね。」
「そうですか。私もそう思います。ここの人間はどうもよくない。」
「詳しくご存じで？」
「彼があなたみたいな人間と話しているのを聞いてましたが、彼は理想しか話さない。」
「私みたいな…鳴子さん。それは艦娘というものですよ。」
「艦娘。ああ、あれが例の。あ、で、話を戻しますけど、彼にはあまり現実を理解してないような気がします。」
「私も全く話したことはありませんが同感ですね。行動を見ればわ

かります。彼がこうして活動で来ているのは周りの艦娘たちのおかげでしょう。」
「確かに。その艦娘という人間たちは実際よく動いています。リーダー格のような人がいるようですね。」
リーダー格というと、きっと長門のことだろう。
「でも、その人は提督のことをどうやら信じているようでちょっと不安です。」
「そうなのですか？」
「ええ、本人と話しているときにそう聞きました。きっとほかの艦娘もそうなのでしょう。自我を持っているように見えますが、あれでは自我を持っているとは言えない。どっちかというとＡＩでしょうね。」
「ＡＩですか。」
「はい。物事を自分の基準で考えて行動できる。でも人間の操作が入れば簡単にその基準がかわる。まさいＡＩと言ってよくはないですか？」
「確かに。言いえて妙ですね。暁さんは例えがうまい。」
「いえいえ。そんなに褒めないでください。あまり天狗にはなりたくないですから。」
「そんな。天狗だなんて。」
「昔、似たようなことで調子に乗って後悔したことがるので。」
「あらあら、それは…。」
二人で笑った。この時間が彼女にとって読書と同じぐらい幸福な時間なのだ。鳴子は気の置けない相手であるから冗談も言いやすいしちょっと無理やりな例え話をしても鳴子は分かってくれる。しばらく、そうやって世間話をしていると時報が聞こえた。
「おや、１２時のようですね。そろそろ戻らないと。部屋にいなかったら何を言われるか分かりませんからね。」
「そうですね。暁さんも大変ですね。」
「ええ。提督の変なこだわりのせいでまるで囚人のような扱いですよ。」

「でも、どっちかというと箱入り娘の方では。」
確かに。囚人と比べるとまだ自由がかなりある。
「おや。確かにそうだ。鳴子さんも上手ですね。」
「うふふ。では、また明日…はいないですかね？」
「どうでしょう。いつまで出撃なのか。今回の作戦がいつまであるのか、私に一時帰投が許されるのかさえ分かりませんからね。でも、いつかはまた絶対に話せますから。」
「そうですね。あなたはそう簡単に死ぬような人ではないですから。今夜からでしたよね、頑張ってくださいね。」
「はい。ありがとうございます。」
彼女はベンチにただ一人座る鳴子を残して先に部屋に戻った。

我に返った。彼女は椅子に座って窓を眺めていた。沈みかけた太陽はそれほどまぶしくなく茜色が照っている。
鳴子と別れたあたりからどうも記憶が怪しい。手には本を持っていたが、開いているページに心当たりがない。３０ページほど先を開いているようだがずっと上の空で読んでいたのか。
背伸びをすると固まった筋肉が伸びたような感覚がして気持ちがいい。夕焼けだけでは部屋全体の照らすことはできず、窓の近く以外は薄暗い。背伸びをした勢いで立った彼女は電気をつけてその流れで冷蔵庫を開けた。中にはペットボトルのお茶と、もう一つ、ガラス瓶に入った黄色い液体が粘性を感じさせながら揺れている。
数日前に鳴子からもらった。何かと聞くと、蜂蜜酒と答えた。『黄金の蜂蜜酒』という銘柄だそうだ。確かに綺麗すぎるほどのこの色は黄金と言い表すのには十分だ。どうやら、作り過ぎたのでおすそ分けにということらしい。
鳴子には一種の強壮剤みたいなものだとあの時言われた。一度に少量で飲んだほうがいいということらしいので、コップに少量注ぎ、飲み干す。彼女は酒を飲んだことがないのでこれが酒として美味しいのかはわからないが、とりあえず十分飲める味はしている。少なく

とも匂いは、彼女であったもこれはいいものだとわかる。ヤーナムにある酒は血の匂いしかしないのでとてもじゃないが飲もうとは思えない。いくら狩人は血が好きだとは言え、だ。だから狩人は酒なんてものは獣をおびき出すためにそこらに投げつけるぐらいにしか使わない。

飲み干してすぐ、頭がさえわたるような感覚を覚えた。そのせいか部屋の中の雰囲気を違うように思われる。そして波の音が聞こえだした。普段は聞こえないが、この酒を飲むと五感が研ぎ澄まされるのだろうか。先日もこれを飲んだが、おかげで狩りがはかどった。

しばらく軟禁されていたせいですっかり気が緩んでしまった。今日を機に一度締めなおしたほうがいいだろう。この蜂蜜酒の効能も明日まで持つはずだ。

一つ、溜息を吐く。彼女はその場に立ち尽くし窓を眺め沈み切る太陽を眺めていた。太陽が沈めば、にわかにそこから月が見えだした。今日の月は満月だ。まるで今日の門出を祝うかのようである。彼女はその月に交信を行う。ああ、なんとも綺麗な美しい月だ。見惚れてしまう。月も彼女の交信に応えるかの如く発光している。周りに星が集まりだし、ゆっくりと月の周りをまわりだす。いずれ、月から黒く靄が出始める。その靄は月を覆わんとするか。否、その靄は月の形にこの部屋の中に現れたのだ。

ノック

彼女は交信をやめた。部屋の中の靄も、月の周りをまわっていた星も光り輝いていた月も消えた。吹雪だった。

「あ、暁ちゃん。」

「はいはい。時間でしょ。」

「あ、うん。準備できてる?」

「特にこれと言って特別準備するものもないわ。」

「分かった、じゃあこっち。」

吹雪に連れられてきたのはあの時のドッグだ。外に出るとき二階の窓から鳴子が手を振ったのが見えたので振替しておいた。吹雪に少し怪しがられたが適当に返しておいた。

見送りに来たのは叢雲だけのようだ。
「見送りはあなたと吹雪だけ？寂しいものね。」
「しょうがないでしょ？提督は忙しいんだから。」
「じゃ、お願いね。」
彼女は一人海を歩きだす。着替えた狩り装束が月によく映える。
汝、月は見えているか。ああ、よく見えている。とてもきれいな月が、彼女を見守っているさ。彼女は記憶を頼りに定められた海域に向かう。結局地図は渡されず、期間もよく知らされないまま駆り出されたわけだが、彼女はあの男を裏切ろうとはしない。彼女は楽しむためにここに来た。ここにいれば楽しめると思ったからここにいる。なぜ、まだ楽しめてもいないのにここを離れることが出来ようか。彼女はいずれ来る獣狩りの夜を夢見に歩く。

この海はしじまを生み出している。水面に映し出された月は静かに波に揺られている。何も音がしない。感覚が研ぎ澄まされてなお静寂なこの場には彼女ただ一人が存在する。その時がいつ来るのかはわからない。彼女は待つ。ただ待つ。いずれまた太陽が昇ってこようが彼女に問いかける声がなければ彼女もまたそれにこたえることもないのだから。
問いかける声が聞こえずともほかの音は聞こえるものだ。どこか遠くで戦う音がする。飛行機、砲弾、怒号、悲鳴、歓喜、妬み、感謝。感情が彼女には聞こえてくる。それでも彼女にかける声は少しもない。まだ、存在がない。
時間というものは個人によって違うものだ。誰かが見ている時間と誰かが聞く時間が違うように、誰かが生かす時間と誰かが死にゆく時間は違うのだ。だがそれは、対象が違うのであって一緒であれば時間も一緒だ。彼女の時間には誰一人として当てはめることはできない。たとえまねしたとしても彼女の時間に合わせることは不可能だ。彼女は誰にも合わせたがらないのだから。誰かが近づいてこようとも彼女はそれと引き離す。それゆえ誰も彼女に近づくことができない。彼女も近づかないからぶつかることもできない。ぶつかること

ができないのであればそれすなわち、気づくことができない。ほかのものと時間を離した彼女は、誰からも認知されることもないし、彼女がほかのものを認知することもできない。深淵をのぞくとき深淵もまたこちらを覗いているように、彼女がのぞいてなければ、彼女がのぞかれることもない。

彼女はただ待つ。彼女が唯一、時間をぶつける相手を。彼女だけが見ている、彼女だけを見返す深淵を。とっくにまた日は沈み先に飲んだ酒など意味もなかろうが彼女の感覚は研ぎ澄まされる。

ふと、感じる時間の流れ。誰かが時間に乗ってやってくる。海面から飛び出し彼女に切られる。違う。これではないはずだ。彼女が待つのは唯一。これは、相手が自分の流れに多くのものを載せて引き連れてきた。彼女を取り囲む。ゆっくりとその数は増えてきた。すべてが立ち尽している。相手も彼女と同じように時間がぶつかるのを待っているのだ。

待ちきれなかった者が彼女を襲わんとする。静かに切れ臥しその体を丁寧に密着させる。かとおもえばすぐに違う、と投げ捨てる。とびかかり切り捨てるごとにそれを行う彼女の体は夜となったこの場において月の光で鈍く光っている。

もはや自分が切り捨てられることなど受け入れてしまっているうやつらの行動はひどく冷淡で理性的だ。もはや全てをあきらめこれを最後の行動とせんと。彼女に抱擁を願う。彼女もそれにこたえる。元来狩人というのはそういうものだから。

だんだんと時間の流れが太くなったころ、ついにその源が海の底から上がってきた。ひどくその目は冷たく映る。彼女は一種の美を見出した。確信した。彼女が待っていたのはこれだ。これなのだ。これこそ彼女が待ち望んだ相手だ。月が赤い。この日のための赤い月。祝え。今この瞬間を。狩人は動き出す。

第9話

その深海棲艦にどこか見覚えがあったが思い出せない。だが、その深海棲艦と目があったときの既視感は分かった。あのとき、新兵器の試行に行ったときに何度も彼女に向けられたものだった。

「あーあー、せっかく集めた艦隊が壊滅しているじゃないか。」

流暢な話し方だった。こんなにも流暢な話し方をする深海棲艦は昔に何回かあったきりだ。そしてそのような深海棲艦は総じて相当な力を持っていた。

「お前。前から見ていたがやっぱり艦娘じゃないな。」

思い出せない。彼女は最後の記憶をたどる。あの日に見た何か。妹をかばった。妹を庇うときに何を見た…？

あの日、横須賀が急襲を受けた。彼女たちはその日、合同演習で横須賀にいた。演習が終わったあとのちょっとした休憩中のときだった。突如として空襲警報がなり、直後に爆発。壁に穴が空いた。突然のことで誰も動くことができなかった。爆発で空いた穴から海上にたくさんの深海棲艦がこちらに進軍しているのが見えた。はっとした。脳が警鐘を鳴らす。逃げろ、逃げろと。だが体がそれをきかない。誰かが逃げろと叫んだ。その声でやっと体が脳の命令を受け取った。彼女は妹を引いて逃げようとした。だが、それはその部屋にいた全員も同じで数カ所の出口に一挙に押しかけた。彼女は3人いる妹のうち隣にいた1人を咄嗟に引くことはできたが彼女向かいにいた2人は反応が遅れた。すぐにその2人と彼女たちの間には逃げんとする大勢の人達が割り込んだ。彼女は別れた2人を連れ戻そうとした。しかし、その瞬間彼女の目の前が爆発した。爆風が彼女を焼いて吹き飛ばした。逃げようとした人たちが一瞬動きを止めた。しかしまたすぐにより一層悲鳴を上げて逃げた。加えて、あたりには先程の爆風でけがした人たちの呻きや助けを求める声がひしめいた。彼女も爆風を咄嗟に腕で受け止めたが、その右腕とかばいきれなかった部分に火傷を追った。右目が見えなくなった。妹は彼女が盾に

なったおかげか無傷だった。妹は2人の名前を呟いたが彼女は妹の手を引いてその部屋から逃げた。2人の妹は彼女よりも近くで爆発した。何なら直撃したようにも見えた。恐らく即死だ。
彼女は妹を連れ2人で逃げていた。戦うことはできなかった。艤装は今いるところよりも遠いし、そもそも彼女はもはや戦えるような状況ではなかった。鎮守府ないの建物はどこも荒れ、さっきまでひしめき合ってた悲鳴もいつの間にかかなり静かになっている。2人は鎮守府から脱出しようとしていた。出口に近道するためにある建物に入った。そこで、出会った。そう、深海棲艦。あの深海棲艦に。

彼女の目の前にいるのはまさにその深海棲艦であった。あの時と違って下半身は深海棲艦特有の謎の獣のようなものにはまっているが、顔はその当時と変わらなかった。
「ねえ。あなた、横須賀を襲ったことがないかしら。」
「あ?何だ突然。…ヨコスカ?ヨコスカ…横須賀…ああ、そうだな。確か10年くらい前に。」
10年。もうあれから10年経っているというのか。
彼女は質問を続ける。
「そこにいた…紫髪と銀髪の女の子を覚えているかしら。」
「ほう。深海棲艦と対話を望むか。面白い。いいだろう、答えてやる。ああ、覚えているさ。覚えているとも。何せあの2人は私の初戦果だ。それにあの時が最初で最後の大規模攻勢だったから特にな。」
「そう。じゃあ、この顔に見覚えは。」
彼女は帽子とマスクを下げる。
「む。流石に顔となると自信が…何だ。お前はあいつの親戚か?私に復讐にでも来たか。」
「いいえ。私は復讐に来たわけでも親戚でもないわ。私は、その女の子よ。」
彼女は何枚か服をめくり腹を見せる。そこには丸い跡がはっきりとついていた。

彼女はやつと出会った瞬間にその道を引き返そうとした。だが、やつが身構えたのを見て咄嗟にかばおうと、体を無理やり制動して妹に抱きつくようにしてかばった。背中に強い衝撃があった。直後に声が出ないほどの激痛が走る。ひとまず妹は無事なはずだと思った。

彼女は、妹を少しかがませるようにしてかばった。妹の後ろから赤い棘と滴る赤色の液体が見えた。恐る恐る下を見ると彼女と妹の体の僅かな隙間を赤い棒が通っている。彼女の腹から出て妹の胸に。引き抜かれたときに、妹を背にして二人とも倒れた。

「うっ、げほっげほ、う、お、ぉげ、お〝、お〝、ぉ〝、ぁ〝、あ〝、あ〝、……。」

痛みにせき込むが、さっきので胃が破れてそこから内容物と血が混ざって逆流していた。顔に吐瀉物が浸ることになるががもはや動くことができない。腹からいろんなものが流れ出ている感覚がある。妹のほうを見ると目を向いて上を見ていた。

「ひ……び、ぃ。」

まともに出せない声で妹の名前を呼ぶが一向に反応がない。全くピクリとも動かない。奴の高笑いがくぐもって聞こえる。彼女が死ぬことは確実だ。だが、妹と違って急所を外されたためゆっくりと死んでいく。彼女は妹の名前を呼びながらゆっくり、ゆっくり、死んでいった。

そして今。彼女は生きている。どういうわけかはわからない。気づけば彼女はヤーナムにいたのだ。あんとき負った火傷などはすべて治っていた。ただ、腹には奴に貫通されたときのであろう跡がくっきりと残っていたのだ。

「な、お前生きていたのか。あれで生きているとは思えないんだが…。」

だから、深海棲艦にそう聞かれても答えあぐねる。この跡は、狩人になった後も切られ、潰され、焼かれなどしたが結局この跡が消えることはなかったのだから。

「…で。復讐に来たんじゃないならなんだ。そのために私を探してたんじゃないのか。」

「いいえ。あなたを見つけたのは偶然。事実、私は誰かに見られていたのは分かっていたけどそれがあなただということは分かっていなかった。私はただ狩りのためにここにいるだけ。狩人は時に自ら獲物を探し時に獲物が来るまで待つものだから。そして、待った結果あなたがここに来た。だから私は今からあなたを狩るわ。」
「そうか、そうか。悪いがいるのは私だけではないぞ？」
奴のそばから5，6体の深海棲艦が浮上する。どれも姫級や鬼級だ。
「艦隊は壊滅したが全滅してはないからな。どうだ、これでもまたやるか？見たところいるのはお前1人だな。とてもじゃないが1人で艦隊に挑もうなんてのは私でも思わないぞ？」
「問題ないわ。むしろ獲物が増えて喜ばしいことよ。」
「その減らず口を吹き飛ばしてやろう。」
奴が後ろに跳ねた。あんな重そうな謎の獣のような下半身でよく飛ぶ。奴が指示を出し側近の深海棲艦が砲撃を開始する。姫級や鬼級の砲撃ということもあってあっという間に彼女の姿は水柱の中に消えた。

肩透かしだ。あれだけの質量の砲撃であれば必ず命中しているはずだ。あんなに強情張っていたが結局何もしないまま沈んでいった。さて、移動しよう。思ったり弱かったがそれでも艦隊が壊滅状態に陥ったのは変わりない。あとは、この姫鬼級しかいないのだから急いで目的を達成しなければ。
「……？」
おかしい。奴の気配が消えない。まさか、まだ生きているというのか。あれを食らって生きていたというのだからこっちのほうがまだ確実性がなく生きていると言われてもまだ信じることができるが…。いや、違う。奴の気配が変わっていく。どんどん知らないものに変わっていく。戦艦棲姫の砲撃を加わっているため未だ水柱が高い。あの水柱の中にいるのは奴ではない…！
「っ!?」

戦慄した。水柱の中から現れたのはやはり奴ではなかった。代わりに出てきたのは深海棲艦の私であっても十分異質と言えるものだった。

頭から何か生えている。なんというか…カリフラワー？両手からは触手が生えている。今まであんな生き物を見たことはない。いや、そもそもアレは生き物なのか？奴が一歩踏み出した途端景色が変わった。

空が赤黒くなり奴の後ろに船が一隻縦に突き刺さっている。その船はボロボロでところどころ穴が見えるし時折ゴン、ゴン、ゴンと軋む。綺麗な満月は不気味な赤い満月をしている。奴は一歩一歩歩いてくる。しかし、奴が進んでいるようには見えない。その場で足踏みをしているように見える。かと思いきや一気に近づいてくる。

「く、う、動けん!?」

そして何より、動けないのだ。奴の姿を見てしまってから一歩も。つまりはこの景色を見ているというのは完全に奴の術中に入ったということ。その影響で動けないということ。それはほかの者も一緒である。しかし、ある一隻は動けずに苦しんでいる様子はない。だが、様子がおかしい。奴を見て目を見開き見つめながら泣いている。か細い嗚咽を漏らして首を横に振っている。

「ア、ア…ク、来ルナ。コッチニ近ヅクナ…オ願イダ、謝ルカラ、謝ルカラモウヤメテクレ…イヤダ！来ルナ!?来ナイデクレ！死ニタクナイ！マダ死ニタクナァアアアァアァアアアアアァアアア!???!??!?!?!?」

何か叫びだしたかと思えばそのうち目にためた涙は血涙となり、鼻や耳からも血を流し始め最終的に白目をむいて頭が爆ぜた。その一隻の近くにいた、仲間にそいつの血液、脳漿、脳の破片が飛び散る。いくら残忍で冷淡であっても恐怖が込み上げてくる。確かアイツはレベルがまだ低かったはずだ。つまりこうして動けなくなっているのは自分たちの体が、ああならないようにするために微力ながら抵抗しているというわけだ。

しかし、動けないのは動けないでかわらない。奴が仲間の一隻に近づく。まだ、剣であってもリーチが足らないような場所で奴が触手を

ふるった。触手は伸びに延び仲間の胸を突きさす。背中から貫通した触手は突き刺さった心臓も一緒に出てきた。触手と一緒に心臓も引き抜かれた仲間はその場に倒れ音もなく沈み始めた。奴は非常にも抜き取った心臓を粗末に投げ捨て、次に向かう。

次は、触手を横なぎにした。いったいあのタコのような触手のどこに切れ味があるのかが分からないが、横なぎを食らった仲間はその体が雑に分かれた。切れたというよりかは触手が当たったところが消し飛んだちうのが正しいかもしれない。

奴はそのまま仲間を蹂躙し、たまたま私のすぐそばにいた仲間のところまでやってきた。今度は不自然なほど密着する。そして身をよじった。さっきまでとは何か別のことをする。嫌な予感がした私は気合で拘束から逃れようとする。

「あああああああああ!!!!」

間一髪何とかこけはしたが後ろに飛ぶことができた。身をよじった奴は直後からだから変なオーラのようなものを放出させた。心なしか宇宙のように見えたそのオーラは仲間を弾けとばせ、その体は散り散りになった肉片となりその場には足だけが残っていた。

化け物め。しかし、相手が使うのはすべて近接。こっちも持ってる武器は近接だ。さっきの気合のおかげかもう体が自由に動く。奴は触手を

ちぎった。一本一本ちぎり捨て、しまいには頭に生えていたカリフラワーのようなものも抜き捨てた。その抜き捨てたやつの目は赤く鈍く揺らめいていた。

はっとして、また周りの風景が違っていることに気づいた。今度はもはや海ですらない。謎の建物群がある。少なくとも昔襲撃で行った内地の風景ではないし、似ているといった雰囲気でもない。

「見える？」

やつは一言そう聞いてきた。私は恐る恐る頷いた。

「…彼女は私。ここに来たばかりの私。」

奴の遠く後ろから、奴に似た少女が一人、やってくる。さっきまで

いなかったはずの群衆に得物を振り回しながら突っ込んでいった。
「このころは、あなたに復讐をしたいという気持ちでいっぱいだった。あなたさえ殺れればそれでいいと。その結果はあれ。」
群衆の一人が隙を突き彼女を切りつけた。そのせいで一瞬彼女の動きが止まる。そこに群衆が立て続けに攻撃し結局何もできぬまま彼女はめった刺しにされて死んだ。
「こうやって動けるようになったのはちょうどあなたへの復讐心が薄れてきたころ。」
群衆は次にさっきまで見向きもしなかった奴へ目掛け走ってくる。奴は群衆の攻撃を一つ一つかわし隙があればどんどん倒していく。さっきの少女とはまるで別人のようだった。
「…ちょっとだけ昔話に付き合ってほしかっただけ。もう復讐しようなんて思ってないって証明するには回りくどすぎたわね。さあ、話はおしまい。」
奴が本気を出したとわかる。風景は相変わらずそのまま。ただその空には赤い月が昇ろうとしていた。私は爪をだし構える。

最初は奴の飛びつきからだった。奴が振りかぶった得物を左手の爪で受け止める。
「くっ!?」
その刃は容易く私の爪に食い込んだが巨大な爪ということもあってか何とか半分程度でとどまった。奴のほうは少し目を見開いた。受け止められたのは意外だったらしい。食い込んだおかげで刃が簡単に外れることはない。左で受け止めながら右の爪3本で奴の腹を狙う。しかし、奴に体重をかけられ少し前のめりになってしまったせいで私の爪は奴の腹ではなく自分の爪を刺してしまった。爪がわれ奴に距離を取られてしまう。砕けた爪はまたすぐに戻った。
「ふふ。面白いわ。受け止められたのは初めてかも。」
「それは光栄だな。深海棲艦の中では一番の硬度を持つと自負しているからなっ!」
次は私から。次々と奴に刺突を繰り出す。この爪の巨大さとは裏

腹にスピードがあるこの攻撃に対応出来る艦娘はいなかったはずだが、奴は軽くよける。最後に力を入れてより素早く刺突した際に、奴はむしろ接近するようにして私の背後に回った。顔を後ろに向けると力をためるような動作が見えた。足払いでそれを阻止する。

そんな押し問答がしばらく続いた後奴の動きが止まった。私に近づいて攻撃を誘うような挑発的な行動から一転、その場に立ち尽くし観察でもしているかのように佇んだ。私は怪しいとは思いながらも渾身の一撃をだした。奴は回避のそぶりを見せない。当たる。そう思った瞬間奴の左手が動いた。とっさに銃を構え撃った。通常深海棲艦に機銃弾以下の口径の銃弾は効かない。しかし、奴の放ったその銃弾は人体に撃ったかのようにやすやすと私の体内を食い破る。そして、私はなぜか訳も分からず膝をついた。動けない。

奴がステップで一気に近づきその手を私の腹に突き刺した。

「アガッ!?」

そのまま、奴は私の臓物を引きずり出してしまった。

以外にもこいつは強かった。まさか上位者をも簡単に切断するこのノコギリ鉈を受け止めるとは。加え、後ろに回り強攻撃を加えようとしても足払いで阻止されるため仕方なく銃パリィに切り替えた。

結果として成功し奴の臓物を引きずり出してやった。獣でない限り、臓物を引きずり出してしまえば通常生き物は死ぬ。

「ハァ、ハァ、ゲフッガフッ…。」

奴は臓物のほとんどを失い出血多量で瀕死となっている。勝負は決まった。彼女は止めを刺そうとした。

「最後に、いいか。」

奴のその言葉を聞いて彼女はその腕を止めた。

「…いいわ。」

「あまり長くは…言わん。私は、時代遅れの兵器だ。…ゲホッ！っ今時近接以外何もできん兵器に……役目はない。仲間内でも、私はそんな扱いをされた。正直にいうと…今回の、これはいわば特攻だ。どっちみち……私は死んでた。お前もそうだろう…お前も私と同じ

だ。今はまだ……その強さは役に立つがきっといつか、誰かに追い…ぬかれ、る。」
「なに、心配してくれるの？」
「…そう、かもな。あの日以来…あの時代の艦娘と相まみえたのが、お前だけ…だったからかもしれん。……もういい。ありがとう。私の話を聞いてくれて。やはり…誰にも覚えられずに死ぬのはさみしいからな。」
彼女はその言葉を聞き、武器をノコギリ鉈から葬送の刃へと変える。この武器はその昔、最初の狩人が用いた武器で弔いの意が込められているらしい。奴の話を聞いて少し同情してしまったのかもしれない。彼女がそうなることはあまり考えられないが、当時の艦娘として、１０年という時間の間にどれだけ艦娘も進化し、彼女の知る艦娘が今の時代においてどういう位置づけなのかを考えさせられる。
「さあ、一思いに…頼む。」
それを奴の最後の言葉とし、鎌に変形させたそれで彼女は奴の首を飛ばした。

彼女はしばらく佇んでいた。奴の『時代遅れ』という言葉が引っかかる。先も言ったというり彼女がそうなる可能性は低いものの、当時を知る艦娘として深く引っかかる言葉だ。ところでさっきからあそこで何か浮いているのだがアレはなんだ。
近づいた結果、それはイクであった。なぜここで浮いているんだ。それにどこか様子がおかしい。放心状態だ。……さてはさっきまでの彼女の行動をすべて見ていたな。あれは奴がかなりの実力者であったから耐えれたのであって普通あれを見て発狂しないでいられるほうがおかしい。運よく頭がはじけ飛ぶまではいかなかったようなので鎮静剤を飲まして少し待つ。
「ん、あ、あれ…なんかおぞましいものを見た気がするのね。」
「気のせいよ。」
「あ、えーっと。どうなのね？」
「どうって…一通り終わったけど。」

彼女はイクに後ろの惨状を見せる。ほとんどバラバラになり多くの肉片が海面を漂い。時折大きめの肉塊も浮いていた。
「あ、あーうん。十分なのね。ていうか十分すぎるのね。」
「とりあえず仕事はやるだけやったけど私はどうすればいいのかしら。」
「えっと…。これだけやれば後はもう十分だからもう帰って大丈夫なのね。」
「もう帰っていいの？」
「一日中待った結果がこれなら、たぶんいいのね。」
「…あ。ああ…。」
そういえば奴が来るまでこの場でじっとしていたが、そういえば日をまたいでいた。おそらくイクはずっとここで待っていたのだろう。悪いことをした。
「あとはイクたちに任せるのね。」
「頼むわ。」
後をイクにまかせ、彼女は帰路に着いた。
唐突だが、すこし艦載機の話をする。艦載機の尾翼にはそれぞれの鎮守府で特有の識別用のマークが施されている。当然、彼女が今いる鎮守府の艦載機にもそれがあったのを見た。さっきからずっと上空をまわっているあの飛行機。持っていた遠眼鏡で見てみたところどうやらあの飛行機はうちのではないらしい。…あーあ。あれはきっとバレたな。これからまた面白くなりそうだ。
彼女はこれから起こるであろうことに微笑を浮かべながら鎮守府へと帰っていった。

第10話

あれから数か月たった。意外にも彼女の生活は何も変わらなかった。だが周りは賑やかになったし窓から見える艦娘の量も増えた。あの時にここではない飛行機が一機ずっと彼女を付け回したことは誰にも言わなかった。そのせいでここの立場が危うくなったりしているような様子はない。

あの日を過ぎてから彼女に接触してくることが極端に少なくなった。まずもってあれから提督が一度も彼女の前に姿を見せないし、もっと言えば見せるのは吹雪だけであとは叢雲がたまに来るぐらいだ。唯一の楽しみは鳴子との世間話だけになってしまった。

「……。」

うるさい。にぎやかになったのは恐らく最近になってこの建物近くまで艦娘が来るようになったからだ。これまたかなり騒がしい。なんだ、広場か公園にでもなったのか。おかげで本もまともに読めない。

「暁さん。こんにちは。」

「あ、はーい。」

鳴子だ。鳴子と会話すれば多少はこのイライラもおさまるかもしれない。今日は部屋に招いて話をすることにした。

「こんにちは。最近は賑やかになってなかなか静かに過ごせないですね。」

「ええ、なんでも近くに新しい宿舎を建てるらしくて。」

「え、初耳なんですが…。」

現状、彼女はこうして鳴子から話を聞いたり新聞を読ませてもらうなどしないと外の状況が全くつかめない。

それにしても、新しい宿舎。通りで最近艦娘の声以上に何やら大きな音がすると思った。

「まあ、最近決まったようですしね。その割には着工がかなり早い気もしますが。」

「…ここどうなるんでしょうね。」

「あー、残念ながらそこは私にもまだわからなくて。」
提督は彼女をどうするつもりなのか。彼女の存在を一部の艦娘を覗いて秘密にするといい、ここなら滅多に艦娘も来ないから隠しやすいと彼は言っていた。秘密にするというのはまだ守っているが、近いうちに破られそうな気がする。…彼女としてはどっちでもいいのだから見つかったのなら見つかったでその場で存在をばらすとか暴れるとかすればいい。

夜になってやっと静かになった。流石に工事を一晩中やるなんて言う蛮行には走らなかったようだ。今夜も狩りに行こうと窓に手をかけたが…気が変わった。たまには普通に玄関から出よう。階段を降り玄関をくぐる。ドアがガラス張りのため中からでも外の様子が分かる。数か月前まで見えていたドアの向こうの景色は幕のようなものに覆われた建築物ですっかり見えなくなっている。どうやら道も新しくなっているようだ。アスファルトが黒い。このまま裏手に回って降りる。
「…？」
裏手に行こうとすると声が聞こえた。何を言ってるのかはわからないが複数人いるようだ。ひとまず深海棲艦ではなさそうなので警戒はせず、ただゆっくり行く。壁に沿いながら建物の側面に回る。いる。艦娘が４人。
「…にい…？」
「きいた……にいる…。」
ひそひそと話している。あたりは暗いし４人とも向かい合って話しているので誰なのかはわからないが背は低い。駆逐艦だ。ふと、顔をあげた一人が目が合った。
「あっ…。」
「どうしたのいかづ…あ。」
全員が同じ反応をした。彼女は４人を見て凍り付いた。まず目についたのが明るいショート髪の艦娘。昔目の前で死んだ妹の一人だった。それから順々に目を移し、電、響…そして自分。彼女と同じ

暁がいるとは前から知っていた。しかし、いざ会うと少し混乱した。そのうえ、死んだ妹たちまでこうして生きて出会うとさらに混乱した。取り乱しそうになるのをこらえて黙るが、それは彼女たちも一緒なのかお互いだんまりになって気まずい時間が流れる。

「…ね、ね？やっぱりいたでしょ？」

気まずい空気を破ったのは自分…暁だった。

「…珍しいね。暁の話が嘘じゃないってのは。」

「ちょっと!?どういう意味よ、それ！」

「ねえ、あなたは誰なの？どうしてここにいるの？ここで何をしているの？その服は何なの？」

「はわわわわ。い、雷ちゃん。一度に質問しすぎなのですよ。」

一斉に話し出した。暁たちの会話を聞いていると昔の自分を思い出す。それで十分混乱も解けた。

「あー…。」

彼女が何か話そうと口を開けると暁たちは急に黙って彼女を見つめる。どうしようか、自分は暁だと搬送か…いいか。別に困ることはない。

「私は…暁よ。あなたと同じ。」

「え!?私と同じ？」

「Ничего（これは驚いた）себе。暁とはあまり似てないようだけど？」

「こうすればわかるかしら。」

帽子とマスクの布を降ろす。

「本当だ。暁にそっくり！」

「そっくりなのです！」

「こっちの暁よりもずっと落ち着いてる感じだね。」

「なによそれ！私がいつも落ち着いてないみたいじゃない？」

なんだか昔を思い出す。暁なんかは本当に当時の彼女そっくりであるし、響たちもそうだ。艦娘量産計画はどうやら成功したようだ。

「ねえ。あなたたちは何でこんなところにいるのかしら？」

「うえ!?そ、それはぁ、そのぉ。」

「噂だよ。そんなにしどろもどろになるようなことでもないだろ

う。」
「噂？」
「そう！ここにお化けが出るっていう噂よ。あなたは見てない？」
「お化け…？いや、見てないわね。どんなお化けなの？」
「えっと、角が生えてて、顔がなくて、海の上を艤装なしで走る化け物なのです。」
ふむ。角が生えてて、顔がなくて、艤装なしで……。もしかして彼女のことか。ちょっと帽子を手に取ってみる。確かに羽の部分があって角のように見えなくもない。顔がない。マスクか？帽子をかぶり布をあげれば顔は見えなくなる。艤装なしで走るというのは言うまでもなく、彼女はそのまま海上を歩くことが可能だ。
「ほ、ほかに何か噂とかは…？」
「潜水艦の人たちがたまに月向かって変なポーズをしてる人がいるって言うのを聞いたことがあるわ。」
自分だ。それは明らかに彼女だ。彼女自身だ。月に向かって交信するのは狩人のみ。そしてこの場にいる狩人は彼女のみ。そう、それつまりそのお化けというのは彼女であった。しまった完全な不注意だ。潜水艦のことはすっかり抜けていた。そうか、今の時代は潜水艦もいるのか。
「あー、たぶんそれ私ね。」
「え、あなたがお化け？」
「まあ、その噂通りならね。」
「なんだ。やっぱりお化けなんていなかったじゃない！心配して損したわ！」
「怖くて毎晩トイレに私を起こしていたのに何を言う。」
「ちょ、それは言わない約束でしょ!?」
「はて？」
「とぼけないでー！」
「と、ともかくこれで安心なのです。鎮守府七不思議のうちの一つが解決したのです。」
「七不思議？私のこと以外にも何かあるの？」

その七不思議とやら聞いてみると案外普通なものが多かったがうち一つが気になった。
「たくさんの腕がある巨大な化け物？」
「そうよ。と言っても私たち４人しか見たことないから非公式だけどね。」
「そもそも七不思議自体、公式とかそういうものがあるとは思わないけどね。」
「ちょっと！なんで響はいつも一言余計なの!?」
「まあまあ、落ち着いて…その化け物はあなたたちにしか見えないって言ったけど本当？」
「はいなのです。今日も一瞬だけ見えたのです。みんな信じてくれないのです……。」
「その…化け物って顔が網目みたいになってない？」
「言われてみれば…そうかも？暁はどう？」
「え？うーん？そうだったかしら？そうだったような気もするし、そうじゃなかった気も…。」
「それっぽい輪郭が見えるだけだから、はっきりとは見えないんだ。」
「そう…。じゃあ、どこで見たとかは？」
「あそこなのです。何時もあそこで。」
電が指したのは今はもう見えないが、いつもアメンドーズが張り付いている場所だ。まさかこの四人にはアメンドーズが見えるというのか。驚いた。狩人の素質がある。
「…ありがとう。さ、今日はもう帰ったほうがいいわ。もうかなり遅いわよ。」
「それもそうね。明日もまた会えるかしら？」
「構わないわよ。どうせ私はずっとここにいるから。あ、私のことは誰にも話しちゃだめよ。」
「なんで？」
「私の存在は一応、秘匿になってるから。私のことを知っているのは提督と…あとは艦娘が数人よ。吹雪とか、叢雲とか…。」

「うわ、駆逐艦のトップじゃない！」
「これは…触れてはいけない危険なにおいがするね。」
「分かってもらえたかしら？」
「はいなのです！お口チャックなのです。」
「よろしい。じゃあ、また明日。私はここの二階のこっち側にいるから何なら扉叩いてもらえば出るわよ。」
「分かったわ！じゃあ、また明日ね、もう一人の暁！」
結局今日はどこにも行けなかったが、その代わり面白い出会いをした。もう一人の、自分に出会った。そして、彼女たちには上位者が見えている。面白い！

今日、とうとう誰もその扉をたたくことがなかった。見放されたか。もういらないのか。
「…餓死でもさせる気かしらねぇ。」
飯は来ないが、部屋を出るなと言われているからそのままなにも来ず…という感じだろうか。生憎彼女に飢えというものはないので全くダメージはないし、むしろ自由になったともいえよう。
「暇ねぇ…。」
久々にヤーナムでも行こうか。本も大方呼んでしまったし何か面白そうな本を探しに行こう。ヤーナムってどこに本あるんだろうか？…ビルゲンワース…？
「行ってから考えればいいわね。」
そうだ。今日も鳴子が訪ねてくるだろうし張り紙の一つでもしといたほうがよかろう。あの人にヤーナムと言っても通じるだろうか。…いや、あの人のことだ察してくれるだろう。
物置に入り灯りから狩人の夢へ、そこからビルゲンワースへ向かう。久々に来たが一気に辛気臭くなった。それにじめじめしている。ハエを張っ倒しながら中に入る。昔は誰かいたが今は無人だ。本が散らばっているので一つ試しにとってみる。
「上位者…地下の墓に……。」
これは上位者についてつらつらと書いてあるらしい。とりあえず

数ページめくっていい感じのやつだけ持って帰ろう。せっかくだし一冊ぐらいはここで読んでいこうか。

ビルゲンワースの二階。外につながる扉。くぐると正面に月が見え今はもう誰も座っていない椅子がある。彼女はその椅子に座り一つの懐中時計を出す。これはこちらとは違う世界。鎮守府がある世界の時間を示したものだ。恐らく暁たちがまた訪ねてくるだろうから少し早めに、夕方には戻ったほうがいいだろう。

本を一冊開いて読んでみる。やはり上位者のことについてより詳しく書いてある本のようだ。地下の墓にその亡骸が眠っているだの、宇宙からきているだの。…おや。これはアメンドーズのことだろうか。……秘匿者。監視者。アメンドーズがいるところには何かしらの秘密があるようだ。奴らはそれをほかの存在から隠し、また荒らされないように監視していると。たしか、鎮守府にもアメンドーズがいたな。あそこに何かあるんだろうか？

案外こういう本も面白いものだ。今後、上位者狩りをするのに役立つかもしれないし。こんどヤーナム観光でもしようか。もしかしたら面白い発見があるかもしれない。協会とか。

さて、もう一冊。これは…上位者の作り方……だろうか？上位者って作れるものなのだろうか。そういえば確かいたな。上位者かなんかを作ろうとしていたところ。なんといったか…そうだ。メンシス学派だ。あそこはなんか変な生き物をたくさん作ってたし、ヤハグルにいたあの獣…獣？はたぶん上位者だろう。啓蒙手に入れたし、獣かどうかはあやしいし、近くにミコラーシュのミイラがあったし。

というか、なんでビルゲンワースにメンシス学派の本があるのだろうか。つながっていたのか…？わからん。まあ、いっか。別に本が面白ければそれでいい。

そろそろいい時間かもしれない。にしても、この椅子の座り心地は大したものだ。なんとなくこの椅子の先、湖の真ん前までいく。今はもう何の輝きも持っていない。…そういや、あの蜘蛛の頭とアメンドーズの頭は似てたな。ヤーナムで『湖の蜘蛛が真実を隠してる』と

かかれたメモを見た記憶がある。だからどうしたちうわけではないのだが、アメンドーズが守護者であり秘匿者であり監視者であるというという記述と鎮守府にいたアメンドーズが少し気になる。暁たちあたりに何か聞いてみたらわかるだろうか。今日試しに聞いてみよう。

第11話

部屋に戻った彼女は考えていた。ここにアメンドーズがいる理由。…ここに人工の上位者が？

「…まさかね。」

さっき読んだ本のせいでそんな考え方をしてしまったが、一番ありえないことだ。確かに提督あたりが怪しい気がするがいくら何でも上位者を作れるはずなどない。あの男はただの提督で、人間だ。上位者のことはもちろんヤーナムのことすら知らないはず。…しかし、どう考えてもアメンドーズがここにいるのかが分からない。やはり、あの男がメンシス学派であるのか。もしくは、彼女と同じようにメンシス学派がこちらにやってきたのか。あのあともう少し調べてみたが上位者を作ろうとしていたのはメンシス学派だけであった。理由は強靭な肉体を持つため。詳しくは分からないが、獣の力を使って自らを進化、上位者かそれ以上の存在にでもなろうとしていたのだろうか。そんなことを当時の彼女が知るはずもなく、荒らしまわってすべて水泡に帰さしてしまったのだが。

だめだ。考えれば考えるほどよくわからなくなる。第一彼女以外にこっちへ来ることができるやつが居るのだろうか。万が一いたとして彼女は人形と狩人以外に他の存在を見なかったが、夢を通さずにこの世界に行く方法があるのだろうか。

結局、考えても何も案は出てこず彼女はコンコン、とノックされた音で思案を止めた。

「誰…ってあなた達。」

「来たわ！」

「早いわねまだ…18時にもなってないのに。」

「ふふん！それほど私たちが優秀っていうことなのよ！」

「私たちは練度が低いからね、やることが少ないんだ。」

「自由時間がながいのです！」

一つのことを話すのに話すのにわざわざ4人で分担しているところが姉妹っぽいな。廊下で話をするのも何なので中に招いた。生憎

この部屋の内装は来客を想定していない。複数人用の机椅子もなければ出せる茶も茶菓子もない。とりあえず、４人は一度も使ったことがないベッドに座らせることにする。
「で、今日は何の用かしら？」
「昨日応えてくれなかった質問に答えてもらうためよ！」
「質問？」
確か昨日何かマシンガントークを仕掛けられた。３つぐらい同時に吹っ掛けられたか。
「あー。えっと、私がここにいる理由と何をしてるかだったかしら？」
「そうよ！あとその服も。」
「この服はただの狩装束よ。ここにいるのは…そうねぇ、なんて言ったらいいか…しいて言うなら軟禁されてるのよね。特にこれと言ってしていることはないわ。何もさせてくれないから、自由気ままよ。」
「え！軟禁されてるの!?」
「ひどいのです！誰にやられたのです！」
「あなたたちの提督さんよ。軟禁と言ってもただここに置かれて何にも声かけられないだけなんだけどね。」
「司令官か。そういえば最近司令官が素っ気ないな。」
「あ、確かに。最近の司令官ったら全く暁たちのこと構ってくれないのよ。」
「それは、司令官さんが忙しくなったからなのです。」
「でも、いくら何でもここで軟禁しておくのはひどいと思うわ。」
「司令官さんはそんなことするはずないと思うのです…。」
「ふーん…ねえ、最近提督に変わった様子とかない？こう…怪しい実験みたいなのをしているとか。」
丁度いい。なんだか、話題が提督のほうへ向いたのでついでに怪しいことがないか聞いてみよう。暁たちなら彼女よりも提督と接する機会が多そうなのでなにか情報があるかもしれない。
「司令官に？なにか変なところあったかしら？」

「さあ？私たちもあんまり司令官と会えなくなっちゃったからよく分からないのよね。」
「分からなかったらとりあえず別にいいわ。次からちょっと気を付けておいてくれない？」
「もう一人の暁はどうしてそんなに司令官に執着するんだい。」
「…あなたたちにしか見えない化け物と関係があるかもしれないの。」
「本当!?」
「なるほど。それなら別にいいか。」
「…ねえ。もう一人の私。その服…なんて言ったかしら…。」
「狩装束のこと？」
「そうそれ。それってなにか狩りをするってことよね。もう一人の私は猟師さんなの…なんか、もう一人の私って言いにくいわ。」
「無理にそう呼ばなくてもいいわよ。」
「じゃあ、新しい名前つけてあげましょ！」
「何にするのです？」
「暁でしょ？だから…うーん？」
「何か出ないのかい。自分と同じ名前だろう。」
「うーん…何も出てこない…。」
「暁…暁…あ！暁って夜明けって意味よね？じゃあ『ヨアケ』でいいんじゃない!?」
『ヨアケ』夜明けか。まあ、いいんじゃないだろうか。
「私はそれで構わないわよ。」
「じゃあ、きょうからあなたはヨアケね！」
「で、話を戻すけど、ヨアケは猟師さんなの？」
「ん…猟師とはちょっと違うかな。私は狩人よ。」
「カリウド…？」
「狩人だよ、暁。」
「狩人って何するのです？」
「…狩人に興味があるのかしら？」
「すっごいあるわ！」

「そう。じゃあ、今日の夜…そうねぇ、２２時くらいにまたここに来たら連れて行ってあげるわ。」
「本当!?じゃあ、その時間にまた来るわ！そろそろ夕食の時間だから早くいかなくっちゃ！」
「あ、まって。ヨアケは何も食べてないんでしょう／何か持ってきたほうがいいかしら。」
「大丈夫よ。私のことなら心配しないで。」
「でも…。」
「暁。本人がいいと言っているんだ。それを否定するのは失礼だよ。」
「…分かったわ。じゃあ、またあとでねヨアケ。」
「ええ、また。」
そうか。彼女たちは狩りに興味があるのか。嬉しいことだ。笑みがこぼれてしまう。つかの間の喧騒は過ぎ去り再び静寂が訪れる。時刻は１８００。夕暮れは低く、日が沈み切るまでそう時間はかからないだろう。彼女…ヨアケは、今度から来客用にいろいろ準備してたほうがいいかしら、と実に平和な悩みをかかえていた。

日が沈み切り暗闇が世界を照らし数刻。彼女は一人、電気をつけずに月光で本を読む……ことはさすがにできないので素直に電気をつけてビルゲンワースから持ってきた本を読んでいた。あれから、アメンドーズについてもっと何か書かれていることは二だろうかと呼んでいたが、分かったのは昔は、アメンドーズはたくさんいたらしい、ということだけ。確かに、アメンドーズは上位者ながら個体数は多い。ここにいるアメンドーズもあちらにいた個体とは違う個体だろう。
コンコン、とノック。時計の時刻は２２時である。彼女たちだ。
「いらっしゃい、時間ぴったりね。」
「レディーだもの！時間はしっかり守るわ！」
「暁が全然起きないから遅れかけたんだけど。」
「だ、だってしょうがないじゃない！２２時っていつもは寝てるんだもの！」

「それじゃ、行きましょうか。」
「私たち何も用意してないけど大丈夫？」
「大丈夫よ。今回は見てるだけでしょ？」
「はいなのです。」
「じゃあ、ついてきて。」
彼女は、暁たちを引き連れ建物の裏まで行った。すぐ下は海だ。彼女はいつも通り海へ降り立った。しかし、暁たちは降りてこようとしない。
「どうしたの。」
「え、か、狩りって海に出るの？森じゃなくて？」
「そうよ。だから、見たいなら降りてきなさい。」
「で、でも私たちは艤装がないと海の上には立てれないわ。艤装はもう工廠が閉まってるからつけれないし。」
「ん…そうね……じゃあ、ちょっとこれ使ってみて。」
彼女が取り出したのは頭蓋骨。『狂人の智慧』だ。狩人は得た啓もうによってさまざまなことを『知る』。それが例え理に反するものだとしても、その方法を知ることができる。
「うえ!?な、なによそれ！」
「何って、智慧だけど？」
「い、いやいやいや。それ完全に頭蓋骨じゃない！どう、しろってのよ！」
「どう、ってこう。」
彼女はその頭蓋骨を握り潰す。手ごろなうめきとともに、頭にはその狂った思念が一つ入り込む。彼女には何の問題もない。何時も見た光景よりも幾何か平和な惨事が入ってくるだけだ。
「…え、ええ…。」
暁は明らかに躊躇った。引いてまでいる。雷や電まで苦笑いだ。しかし、彼女がもう一つ取り出した狂人の知恵に響がそれを受けった。
「え、ひ、響、本気!?」
「本気も何もこうしないと何も始まらないだろう。ここまできて退

くわけにもいかないし……お、思ったよりも簡単に…ぃ!?」
「ひ、響!?」
狂人の智慧を割った瞬間いままでずっと涼しい顔つきをしていた響の顔がゆがんだ。両目をかっと見開いてその場にうずくまる。この狂人の知恵は狩人に対してこそ、ただ啓蒙を得るだけでどうってことないがそうでないものがその智慧を引き入れることはまさに危険なことである。『狂人の智慧』だ。普通の人がとうてい耐えられないものだろう。狂人の智慧は狂人が知るからこそ意味がある。そう、もし響に狩人である可能性がないなら彼女はその場で発狂して死ぬ。ヨアケは、彼女たちにはその資格があると判断し使わせようとして、実際に響が使った。
響はすぐに元に戻った。額に汗がにじんだり、まだすこし呼吸が荒くあれど発狂することはなかった。
「だ、大丈夫？響。」
「あ、ああ。大丈夫、落ち着いた。」
「さあ、おいで。私は狩人であると強く思って。狩りに行くんだって。狩りのためならどんなことも辞さない。海の上ぐらい造作もない。」
ヨアケは響の手を取り優しくエスコートする。響もそれに応え彼女の手を取りゆっくりと海面に降り立つ。
「…本当だ。立てた…！」
「すごーい！ねえ、今度私私！」
「はいはい。落ち着いて。ほら。」
雷にも智慧を渡す。割った時の反応をひどくしかめっ面をしただけ。その次に試した電も同じであった。
「うへえ。なんか嫌な感じ。」
「頭の中にいろいろ入ってきたのです。」
二人も響と同じようにヨアケのサポートに海面に降り立つ。
「さあ、最後はあなたよ。暁。」
「う、うん…。」
「なんだい。怖いのかい暁。」

「大丈夫よ。ちょっと嫌な感じはするけどすぐに収まるわ。」
「暁ちゃんも早く来るのです。」
「わ、分かった！分かったわよ。」
「はい、どうぞ。」
暁にも狂人の智慧を渡す。しかし、彼女は気づいてしまった。暁にわたった瞬間。渡したものが狂人の智慧ではないことに。それは『上位者の叡智』だ。神に近い存在である上位者。その断片が収まったこの智慧はもちろん狂人が持つ智慧以上の狂気が入っている。人ならざるものに出会った人の智慧とそもそも人ならざる者の智慧。簡単に人が触れればたちまちその理解を通り越してしまう。訳が違う。流石にいくら彼女たちが狩人になりうる者たちであっても狩人でなければ絶対に死ぬ。
彼女はなぜそんなミスを犯してしまったのか。否、彼女はミスなど起こしていない。最初から知っていた。自分が暁に上位者の叡智を渡そうとしていることに。それは通り一遍の、すこし頭の出した存在では簡単にその命を砕かれてしまうものであることを。だから彼女はそれをわたした。
暁は上位者の叡智を割る。人ならざる者の叡智がいま、暁の頭に怒涛の如くなだれ込む。…数秒経つ。暁に変化は見られない。何も起こらない。
彼女は笑いをこらえていた。必死にこらえていた。久方ぶりの興奮。今すぐその場で自分の予想の的確さについて自画自賛を盛大にしたい気持ちを抑え微笑で済ます。
「……おしまい？」
「そうね。どう？なんともなかった？」
「…なんか変なのが見えたわ。」
「なんかって？」
「うーん。見たことない動物だったわ。頭がすっごいもじゃもじゃしててすごく細かったわ。そいつ私を捕まえようとしたけど、つかもうしたらなんかどっか行っちゃった。」
「そう…さあ、おいで。あなたもきっと立てるようになっている

わ。」
「う、うん…わあ、立ってる！」
「遅いよ、暁。」
「響が早すぎるのよ！あんなに普通怖くて触れないわ。」
「さあ、行こうか。個々の夜はいつまでも続かない。私の狩りは夜の間だけだから。」
彼女は暁たちを促す。その顔はひどく優しかった。しかし、彼女の内面はまたひどく笑顔であった。耐えた。耐えたぞ。あの上位者に彼女は耐えた。しかも平然としてだ。しまいには上位者すら恐れた。ああ…素晴らしい。それが自分の分身であるというのだからなおさら素晴らしい。きっと、彼女たちはいい狩人になれる。いや、して見せる。して見せよう。私がそうさせてあげたい。そうだ、帰ったら彼女たちを夢に連れて帰ろう。そして狩人様に頼んでまた獣狩りの夜を繰り返してもらうんだ。ああ…楽しみだ。ひどいくらいに…ああ、だめだだめだだめだ。耐えろ、耐えるんだ。興奮したらまた全身から血を吹き出してしまうぞ。あまり怖がらしてはいけないよ。楽しみは逃げていかない。ゆっくりゆっくり楽しまなくちゃ。
彼女は暁たちの前に立ち歩く。その顔は誰にも見られていない。ゆえに、その笑顔はひどくゆがみ、一番の楽しみを後にに置き、今夜の獣狩りを始めんとしていた。

第12話

「ここで見ててね。」
「ここで？何もいないと思うけど？」
「いいえ。来る…ほら。」
海からイ級が飛び出す。今ここでなます切りにしてもいいがそれでは暁たちの服が汚れてしまうだろう。ここはひとつ、受け流すようにして投げ飛ばす。ね？と４人のほうを見ると、唖然として吹っ飛ばされたイ級を見ていた。
「この程度で唖然とされては困るわ。さ、私の近くにいると服が汚れちゃうからもう少し距離を取って見てて？」
４人が十分に距離を取ると、彼女の手には武器が握られる。さっきと同じように飛び込んできたイ級の腹を袈裟斬りにする。腹を裂かれたイ級は彼女に大量の体液をぶちまけ海中に没していった。
気配。またイ級が飛び出してきた。いや、少し違う。イ級ではなくロ級だった。しかし、狩る対象であることに違いはない。仕掛けを発動させ鉈に変える。腹を見せたロ級に刃を滑らせ綺麗に裂いていき、装甲で引っかかる。彼女の持つ仕掛け武器は、例え上使者であろうと簡単に断つ。深海棲艦の装甲など話にならない。しかし、それは武器の性能もさながら、彼女の技量に基づくところが多い。ゆえに、少しでも角度が甘ければその刃を通すことができない。彼女はコレを逆手に取り刃を装甲で引っ掛けて、振り下ろしてロ級を海面にたたきつけた。当然この程度で深海棲艦は沈まない。彼女は手早く聖剣に持ち替え頭のあたりに突き刺す。ロ級は痙攣し、それもすぐに収まり静かに沈んでいった。
後ろから暁たちに感嘆の声が聞こえる。しかし、彼女はその声になんという反応をすることなく思案にふけっていた。というのも、ここ最近さっきみたいに考えもなしに、まるで理性をなくしたように突撃する駆逐艦や軽巡をよく見る。なんなら、数日前からはそれしか見なくなっていた。なぜだろうと考えたときに、数か月前に試験した兵器が思い浮かんだ。さっきのイ級やロ級の挙動はあの時とそっくり

だった。しかし、今回彼女にはあの時聞こえた悪趣味な悲鳴のような梅井期越えのようなものは一切聞こえない。ならば違うのか。…あれから数か月たっている。もしかしたら改良され地区過程でその声がより深海棲艦だけに伝わるようになったのかもしれない。メンシス学派の本を読んだせいでいろいろな偏見が思い付くが、たどり着いた結果としてやはり人口の上位者を、それも深海棲艦を素材にして作っている可能性がある。

「すっごいわ！あなたあんなのできるのね！あれ？ヨアケ？」

「ん、あ、え、ええ。そうよ。でも。あなた達もきっとできるようになるわ。」

「え、ほんと!?やった！そうしたらきっと司令官も喜んでくれるわ。」

「でも、服が大変なことになりそうだけどね。」

響が彼女のことを怪訝な目で見てくる。それもそうだ。彼女の体は深海棲艦の体液でまみれている。色こそあまり目立ってないが、その分鈍い光沢は見えるし何よりも深海棲艦独特のにおいがより一層際立っている。つまり臭い。彼女は特に気にするようなことでもないのだが、この４人はそうではないらしい。

「魚臭いのです。」

「む、そんなに匂うかしら。」

自分でも嗅いで見るが、そこまで悪いにおいではないと思う。

「さ、どうかしら。あなた達も狩人になる気はない？」

「うーん。面白そうではあるけどちょっとにおいとか…。」

「それに、電はあんなに機敏には動けないのです…。」

「大丈夫よ。匂いはいずれ気にならなくなるし、狩人だってみんながみんな最初から機敏に動けるわけではないわ。」

その時、突如海から影が飛び出す。その影はヨアケ目掛けてその手に持っているものを振りかざそうとする。その突然の出来事に４人は表情を変えることすらできない。しかし、彼女も４人に向けた優しい笑顔のままその飛んできた影目掛けエヴェリンを撃った。その、衝撃で影はみっともなくひっくり返った。

「あなた達だってこんなことできるようになるわ。……ねぇ。今わたし、大事なお話してたんだけど分からなかったかしら。」
丁度いい見せ場を作ってくれたとは言え、話を邪魔された。これすなわち万死に値する。どうやらこの深海棲艦は軽巡らしい。先ほど同様理性はないように思うが、心なしか恐怖でおののいているようにも見える。しかし、彼女にはそんなことは関係ない。無慈悲になぶり殺す。これは狩りとしてではなくただの八つ当たりだ。殴り続けているうちに相手の皮膚は破れ、殴っていた音もいずれミンチに手を突っ込んだような音に変わる。殴るたびに派手にしぶきが上がる。
「…ふう。さて、どうかしら?やる気になってくれた?」
「あ、いや。ちょっとそのー私には…。」
「電もちょっと…。」
「あの光景を見ると正直引くね。」
「ちょっと響!?」
「なんで言っちゃうのです!?」
「?思ったことは正直に言うべきだろう?」
「だとしても正直すぎなのです!」
「そうよ!少しはオブラートに包んであげなきゃ。」
引かれてしまったし、ちょっとその言葉はかえって逆効果のような気がする。
「私やりたい!」
その声は意外な人物から発せられた。
「ほ、本当かい。暁。」
「ええ!あれこそレディーよ!」
「……えええぇ。」
「それはないと思うのです。」
それは自分も思う。が、暁が乗っかるのは予想できた。自分をもとにして作られたコピー品だ。趣味嗜好が同じなのは当然だ。…成長した今だから言えるが、当時の自分はわけもわからずレディー、レディーと連呼していたものだ。こうして暁を見ると当時自分がどう思われていたのかよくわかる。…クッソ恥ずかしい。

「しょうがない。暁がやるなら私もなろう。保護者が必要だろう？」
「ちょ、ほ、保護者ってどういうことよ！」
「えー、二人がやるなら私もなろうかしら。」
「み、みんながやるなら私も…。」
ふむふむ。ネームシップの提案には基本的に賛同するというプログラムもちゃんと機能しているらしい。艦娘量産化計画は成功していたみたいだ。これがもっと早く実行されていたら自分たちが死ぬこともなかっただろうに。…いや？死ななかったらヤーナムにはたどり着いていなかった。やっぱり死ななきゃだめだ。いやそれでも響が死んでしまったのは…でもやっぱり…やめよう。うん。過去は過去、今は今だ。
「じゃあ、早速戻ってヤーナムに行きましょうか。」
「やーなむ？」
「そうよ。狩人になるにはそこで狩りをしなきゃ。あそこで狩りを完了させるのが狩人よ。」
「…あ、明日私達遠征じゃないっけ。」
「え。」
「…そうだね。明日は遠征に行かないと。」
「数日コースなのです。」
「えー、じゃあそのやーなむに行くのは…。」
「遠征が終わるまでお預けだね。」
「えー…はあ、ごめんねヨアケ。私達明日遠征なの。」
「…あーうん。しょうがないものね。遠征は、うん。」
すっかりやる気が削がれてしまった。今日は狩りにも気が入らない。それに４人を返さないと。仕方なく血まみれな彼女は４人を引き連れて鎮守府に帰っていった。
鎮守府に帰っていくその背中は明らかに落ち込んでいた。
翌朝、彼女は一人で部屋の中にいた。本来なら今頃ヤーナムで暁たちとキャッキャウフフな狩人ライフを送っていたはずだが、あいにく彼女たちは今日から数日間遠征に出かけておりいないのだ。丁度、こ

この窓から彼女たちが出発していく様子も見えた。
「……。」
何もすることがない。本でも読めばいいし何ならヤーナムでもめぐって暇つぶしすればいいのだが不思議とやる気が起きない。結局今日も朝にだれも来ることはなかったし。
「……」
「暇そうですね？」
「うぉ!?」
珍しくベッドの上で天井を眺めていると、突然目の前に顔が現れた。
「な、鳴子さん？」
「はい、鳴子です。」
「あ、あれ。どうして。」
「扉をたたいたんですけど反応がなかったもので、鍵も開いていたので失礼ながらお邪魔させてもらいました。」
「あ、す、すみません。」
彼女に限って誰かの気配に気づかないで接近されるというのはありえないことなのだが、この上なく暇だったので注意力が散漫になっていたのかもしれない。相手が鳴子であったというのもあるかもしれないが。
「どうしましたか？暁さんらしくないですよ？」
「いやぁ、ちょっと予定がつぶれてしまったので暇していたんです。」
「あー、なるほど。あ、それじゃあ今時間ありますよね？」
「え、あ、まあ。3日後までは。」
暁たちからはあの後遠征が3日かかると聞いた。
「十分です。ちょっと用事に付き合ってくれませんか。」
「え、まあ。いいですけど。」
「よかった。丁度人手が欲しかったんですよ。私の部屋まで来てくれますか？」
「わ、分かりました。」

鳴子に連れられて彼女の部屋にむかう。何気に鳴子の部屋に入るのは初めてだ。
「あ、そうだ。一つ暁さんに言っておかないと……大丈夫かな？」
「え、なんですか？」
「あー、いや。ちなみに文明の利器的な者って持ってますか？」
「文明の…いや、現代ものは特に…しいて言うならこれとか…？」
彼女は、エヴェリンを鳴子に見せた。
「うーん…これぐらいなら問題はないかな。最悪私が何とかすればいいか。すいません、じゃあ行きましょうか。」
「あ、はい。」
鳴子が扉を開けるとそこには部屋が…というわけではなく先が全く見えない階段だった。明らかに空間がおかしいがもはや彼女はその程度では驚かない。
「足元暗いので気を付けてくださいね。」
「はい。」
かなり暗い。太陽の光は窓から十分入っているはずだが扉から先はまるで別空間のように光が急に届いてない。携帯ランタンぐらいはつけておくか。
階段が続く。
「これ、どれくらい続くんですか。」
「すぐですよ。ほら。」
鳴子の言う通り、下のほうにぼんやりと光が見えてきた。なんとなく後ろを見ると上に見えるはずの外の風景は全くなく闇が広がっていた。階段を下りた先には洞窟が広がっていた。謎の人が二人いる。彼女の姿を見て、鳴子の姿を見ると姿勢を正した。うち一人が服を持ってきて鳴子に渡した。
「あい、お疲れ。あ、彼女のはいいかな。あの服装なら別に大丈夫だよ。」
鳴子はその場で着替え深いローブをまとった。顔の上半分が見えなくなったがそれだけで一気に不気味感が増した感じがする。
鳴子が着替えるともう一人が案内をするように洞窟の中を先行し

始めた。鳴子の後ろに彼女がついていき、さらにその後ろをもう一人がついていく。
階段の前まで来たとき先行していた一人が横にそれた。
「うむ。案内ご苦労。お前さんも頑張れよ。さ、暁さんここからも暗いですし今度は階段も長いですから気を付けて。」
「はい。」
鳴子の言う通り、さっきと同じように階段は暗く、彼女が携帯ランタンで照らしているところ以外は全く何も見えない。互いに無言のまま時間の流れすら全く感じないうちにふと鳴子がまっすぐに進みだした。そのあたりに彼女が至ると階段が終わっておりまっすぐな道となる。なぜか周りはこんなにも暗いのに鳴子の姿だけははっきりと見えるのだが、さすがに暗すぎたので松明をつける。すぐに大きな扉が現れた。鳴子はその扉を何のためらいもなくおす。床をこすってうごく扉の荘厳な音がなり、その先の風景が見える。
森だ。その入り口の四方を森が取り囲んでいる。扉をまたいで後ろを見ると、扉はあるがその扉は岩についておりその岩も上には伸びず鎌倉のような形をしていた。あの階段は独立した人るの空間なのだろう。
「さあ、着きました。本当はここから北のほうに行かないといけないんですがここの時間はあっちとは違ってあっちよりも進みが早いんです。大体…場合にもよりますけどあっちの一日でこちらの一週間、長いと数十年になります。
「そんなに…。」
「早い話。こっちでは時間があっちよりもたっぷりありますから少しぐらい遊んでもいいですよ。私の用事もそこまで急ぐようなものでもありませんし。この先に町があるんです。この世界、幻夢境（ドリームランド）で一番大きな町らしいです。
「なるほどそれは面白そうですね。」
鳴子がウキウキで森の中を進む。ここはここであっちの世界や、ヤーナムとは違ってかなり気持ちのいいところだ。あっちみたいに森が全くないような場所ではなく、ヤーナムみたいに獣がはびこる森

でもない。
「ふん、ふんふん。」
「…鳴子さんが一番楽しそうですね。」
「え、あ…あはは。私もここに来るのは久しぶりですからね。私みたいな存在でも、町は楽しいですから。」
「ほー。あなたを楽しませるような街ですか。それはそれは、期待が膨らみますね。」
森を歩いてしばらく、突如として道が現れた。アスファルトや、小石の道ではなく轍が目立つ獣道的なもの。そこだけ木や植物が生えておらず光が堂々と照らしていた。
「えーっと、たしかウルタールがこっちだから、こっちか。」
鳴子が道を右に進んだ。彼女もそれに続く。太陽がまぶしく光っていた。

第13話

歩くことおそらく数時間。日が真上から少し傾いた頃、大きな城壁が見えた。あれが…なんと言ったか「ダイラス＝リーンです。」そう、ダイラス＝リーン…今この人ナチュラルに思考を読んできたな。いやもう今更だ。この人神様だし。

城門の中はまさに都市といった感じだ。中世のヨーロッパといえばこんな感じだったのだろう。案外建物はヤーナムと変わらない。せいぜいガス灯みたいなちょっと近代を感じさせるものがない。しかし、その盛況は辺境の地であるヤーナムとは全く違う。思わず圧倒されてしまうほどだ。

「…おお。」

「ね、すごいでしょう。この街私も好きなんですよ。人間の活気もよく感じられる。あっちの世界もここと違う盛況があっていいですがこっちはこっちでまた別の良さがあります。そうですね…一週間は滞在しても大丈夫ですよ。」

「い、一週間？いいのですか。ここでそんなに…流石に鳴子さんの用事とか…。」

「大丈夫ですって。あ、あっちの世界のことを心配してるんですか？何、どっちみち一週間未満だとあっちでは半日過ぎないぐらいですよ。もし3日以上進んじゃってたら私がなんとかします。」

流石に神様が言うと信憑性が違う。その言葉に甘え1週間後この城門前で集合ということで別行動を取ることになった。去り際に鳴子からお手製だという地図をもらった。かなり現代的なデザインの地図だ。この世界の文化がどれほどかわからないが、おそらく中世あたりで、中世にこんな地図はないだろう。まあ、彼女にとってはこっちのほうが読みやすくていいのだが。

別れて早速彼女は地図を読み込む。探しているのは服屋だ。というのも、この街は中世ぐらいとはいえヤーナムよりも更に前だ。狩装束はただでさえ変わった作りなのにあっちの世界では古めかしい格好になるがこっちだと奇抜な衣装に見えるだろう。現に今も彼女は

道の真ん中で注目を集めている。そばを通っていく人が皆一度は彼女に目を向ける。やっとそれらしい場所を発見し、さあ向かおうと思ったところで気づいた。

「…あ、お金ないわ…。」

そう、彼女は通貨の類いを持っていない。いや、厳密に言えば持ってないわけではないがおそらくこの世界では使えないだろう。彼女はこの世界の通貨を持っていない一文無しだった。

しかし後悔先に立たず、後の祭り。鳴子に言えばなんとかしてもらえただろうが、すっかり忘れていた。仕方がないので、服屋を探すときに見つけた図書館に向かう。

「…おお。」

大きい。ただ一言、それだけだ。その荘厳さに周りの奇っ怪な目も忘れていた。まるで、教会とも言える形をした建物はそれはもう大量の本があると体が表していた。ワクワクしながら帽子を取り中に入る。

中はやはりとても広い。吹き抜けになっているようだ。それでいて何階か上に通路があるのが見える。当たり前だが中は静かだ。しかし、ヤーナムのように当然の静寂ではない。人々が図書館をそうである場所して認識した上の静寂だ。だから完璧な静寂ではなくページをめくる音。歩く音。本を手にする音。そういう静寂だ。

この世のすべての本を集めたんじゃないだろうかと思えるほどの蔵書量。きっと面白い本がたくさんあるだろうと奥へ突き進む。

人である以上、必ず人と同じ行動をとる。この世界でも奇っ怪な姿をしている彼女を図書館内の人はやはり気にする。本から少し目を外しちらっと見てはまた本に目線を戻す。

彼女はある一つの棚で曲がり、本を物色する。ここの街は中世の見た目をしているので、てっきり英語圏だと思っていた。だから、その街にある図書館の蔵書は英語だと思っていたがロシア語や、おそらくドイツ語、フランス語、どこの文字であるのか分からない本まである。勿論日本語も。ただ、古い。今で言う文庫本やライトノベルの類は一切なく、昔の枕草子とか源氏物語とかそういうものだ。

狩人となったその時から彼女は英語を理解した。今までさっぱりだったのにまるで母国語のように解し、話すことができる。当然読むことも。昔の日本語はさっぱりだが、英語ならまだわかりそうだ。適当に物色し手に取る。本当はロシア語の本なんてのも読んでみたかったが、昔ロシア人とのハーフであった妹から簡単な単語とキリル文字の読み方だけ教えてもらったので、読めはするが理解はできないので諦めた。

そこら辺の椅子に座りページを一つめくる。更にもう一つ、またもう一つ。その繰り返し。この本は何かの物語、攫われた姫を助ける騎士の物語。すべてが大げさで、騎士は自分の正義を振りかざし魔物を殺し姫を奪還しようとする……卑屈になりすぎた。この騎士は人間の英雄だ。これでもまだ限りなく人に近い存在なのでまだ人間に同情心がある。

最後には見事魔物を討ち取り姫を取り戻した。これでこの本はおしまい。本棚に本を戻し次の本を探す。

次の本は、と手に取り中身を見ると、これは神への讃美歌か。普段はこういうものは全く見ないがせっかくだし見てみようか。

あれからかなりの本を読んだ。悪魔による所業や、とある王様の逸話。確かにここにはたくさんの本がある。ジャンルが一緒でもその中身はそれぞれが違うものになっている。これほどのものを一日で読み切れるはずがない。一週間で読み切れるかも怪しい。できることならばずっとここで本を読みつくしていたい。しかし、そうはいかないようで、どこからか鐘の音が鳴ったかと思うとぞろぞろと人が出てきて外に出て行った。窓を見れば日もだいぶ傾いている。通りで少し読みずらいと思ったわけだ。閉館の時間だろうか。仕方がないので彼女も外に出る。

外に出た彼女はこの図書館の名前が書かれた看板を見る。『ドリームランド図書館』すばらしい図書館だ。ぜひ、明日も来よう。

困った。宿がない。そうだ。彼女はこの世界の通貨を何一つ持っていない。宿を取ろうにも金がないのだ。彼女に睡眠は不要だ。し

かし、野宿で夜を明かしたいとは思っていない。日もかなり暮れてきた。この世界には夜に灯りが照らされることはなくもうすでに周りは真っ暗となっていた。いよいよ、鳴子に金のことを相談しなかったことが悔やまれる。と、どこからか声が…？

「…て……！」

「いい…か。な？」

「おじさ……ぜ？」

女の声が一つと、男の声が二つ。発生源に近づくたびにその声がどんどんはっきりと聞こえ出す。

「な？この先に俺の家があるから、今日は泊めてやんよ。だからな…？」

「ですから、家には父と母がいるので…。」

「はは。小娘一人でこんなところまで大変だねぇ？おじさんたちが送ってあげよう。でもその前に腹が減ってるだろう？ご馳走してあげよう。」

「結構です！」

「んだと、このガキ。俺たちがせっかく親切にしてやろってのに。」

「恩を仇で返すような奴にはお仕置きしねえとなぁ？」

「ひっ、い、いや。やめてください…。」

おっとこれは、少し危なそうな様子。恐らくこの曲がり角の先。あまり目立たないところだ。すっと角から覗いてみる。おっさん二人に女性…いやあれは子供か、が腕を引っ張られているようだ。気づかれないように近くまで行く。ここは全くと言っていいほど灯りがないので足音や気配を完全に殺した彼女のことを気づける人など誰一人いない。その中でおっさん二人と女の子一人の攻防を互いの顔が見えるぐらいまで近づき顔をじっと見る。表情や言動を見る限り…彼女は女の子の味方に付くのがよさそうだ。

「あら、こんな夜中に何してるのかしら？ナンパ？」

急に聞こえた声に三人は驚きそして自分の横を見てさらに驚き男の一人がつかんでいた腕を離した。

「な、なんだてめぇ。何時からそこに居やがった。」

「ついさっき。声がするから来てみれば…気持ち悪いことしてるのね。」
「んだと、てめぇ。喧嘩売ってんのか？」
「上等だこら！」
男が一人勝手に彼女をなぐりつけた。帽子が飛び、彼女はうまくマスクも降ろした。
「…なんだ。てめぇも女じゃんかよ。いいぜ、お前も俺の家で相手してやらぁ。」
「お、そんときゃぁ俺も混ぜろよ。」
男が彼女の顔を見た瞬間、その顔は吐き気がするほどのにやけ顔になった。相方も同じく。こういっては何だが、彼女の姿はそれなりのものだ。大人の美しさには及ばないだろうが、少女としてはそこそこな者だろう。ゆえに、獲物が増えた男らは気が緩む。しかし、それは彼女も同じ。大したことがないなと気が緩む。彼女は男にゆっくりと近づく。上着を脱ぎ棄てながら。
そういうことだと勘違いした男らはにやにやとしながら彼女を手で迎える。抱き合い、お互いを見つめあうように立つ。
「へへ、なんだ。さっきの文句はどうした。その気になったか？」
「うふふ。そうね。よく見たらあなたはとってもいい男だわ。さ、あなたも私のことをよく見て。」
彼女の言葉道理男は彼女の目を『しっかり』と見つめた。しかし、徐々に男の顔色が蒼く、そして白くなっていく。表情にも余裕がなくなり、ガタガタと震えだした。抱きしめていた手を離し彼女から逃げようとする。しかし彼女はそれを許さんと、余計にしっかりと抱く。やがて男はあ、あ、と短く呻き倒れた。突然のことに二人組の相方はパニックになっていた。
「んな、て、てめ、何しやがった！」
「んふふ。私の愛に耐え切れなかったみたいね。どう？あなたは私の愛に耐え切れるかしら？」
「ひっ、う、うわあああああ！」
相方はもう一人を置いて逃げてしまった。薄情なものだ。さて女

の子はというと。
「……」
完全におびえていた。まあ、それもそうか。急に男が顔面蒼白で震えながら倒れたら恐怖だろう。まして女の子ならさらに。できるだけ怖がらせないように目線を合わせ、優しく話しかける。
「…大丈夫？」
「……。」

まだ、震えているが頷いてくれた。やはり、ちょっと服装があれだろうか。しかし、これ以外に持ってきているのは…。仕方がない、人間見えない部分と暗いところが苦手だ。ぱっと制服に着替える。女の子は彼女の葉や着替えに驚くがさっきよりも顔がよく見えるのと、服が白くわずかな月光でも反射し明るく見えるのでもう少し緊張を和らげた。
「立てる？」
「…はい。」
おや。今気づいたが、この子は図書館で司書をやっている子ではないか。ちらっとしか見てないが確か入り口にいた子だ。背丈は彼女と同じくらいか。
「どうしたのこんな時間にこんなところで。」
「あ、えっと。仕事が長引いてしまって…。」
なんとこの見た目で仕事とは。恐らく年も当時の彼女ぐらいだろうに。
「あ、あのあなたはどうして？」
「え…あ、あー…お金がなくて…ね？」

彼女は、ある宿にいた。なぜか？町で助けてもらった子に宿に泊めてもらったからだ。その子はウルタールという町から出稼ぎやってきたらしく、約一か月の間ここに滞在するそうだ。その間はその子の親の友人の宿主がこの子を好意で泊めてやっているらしい。一週間

ここにいるという話をするとなんとその間ここに泊まっていいと言ってくれた。何かお礼をしなければ…。
「お礼にあなたの仕事を手伝うわ。」
「え、いいですよ。そんな。」
「いいえ。流石にこれは私も何かお礼をしないと落ち着かないわ。だから、ね。お願い。」
「ま、まあ、そういうことなら。あ、ご飯食べますか？お金ないから買えないんですよね？私今から買ってきますよ」
「え、あー。大丈夫よ。私はご飯食べなくても大丈夫な体してるから。ほら今日はもう結構遅いし、さっきみたいなこともあったから私が買いにいってあげるわ。」
出稼ぎに来ているという時点でこの子の経済状況は想像に難くない。なぜ、出稼ぎ先が司書なのか、あまり司書が出稼ぎに向いているとは思えないが、ともかく流石にお金を使わせるのは更に気が引ける。それに、もうこんなに暗いのだから食料を扱う店が開いているとは思えない。一人で行かせるのもそうだ。
「む、私も人を助けたいんです。気を使ってくれるのはありがたいですが、何も食べれない人を前に私だけご飯を食べるのも落ち着きません。それに、近くにずっと開いているお店があるんです。あそこならご飯とか、日用品とか色々売ってるんですよ。」
なんか、正論を言われた気分だ。というか自分の言ったことをそのまま言い返された。同じことをまた言われた以上はその好意に甘えなければならない。ただやっぱりまだ心配だったので買い物には付き添った。
しかし、ずっと開いているお店か。そんなコンビニみたいな店があるんだろうか。

彼女は道中近づいてきた何故かいた人攫いを女の子に見つからないように狩ったり、変な獣が来たときは殺意マシマシで睨みつけて追い返しながらその女の子が言う店に行った。その店の名前は『コンビ

ニエンスストア』なんでこの女の子は無事なんだかと思っていた彼女の頭の中は一瞬でこの言葉に置き換わった。……特定の名前ではないが…。世界観壊れる。

その看板を見た彼女は微妙な笑顔で固まってしまった。

第14話

名前こそあれだが、見た目はおかしくはない。中も、ＴＨＥコンビニというわけではなくゲームで見るようなお店だ。商品は様々。弁当と書かれていたり、水、薬、雑貨も売っていてここはコンビニっぽかった。

「ここ、ちょっと高いんですけどずっと開いているしそのまま食べられるので便利なんですよ。」

それはまあ、コンビニエンスストアだから。入ってきたときに店員さんが「いらっしゃいませー」と気の抜けた挨拶をする。ああ、深夜のコンビニってこんな感じなんだろうなあとくだらないことを考えながら女の子についていく。

「どれにしますか？好きなの選んでください。」

この世界の物価がどれほどか分からないが隣から、これはちょっと…おいしそうだけどもう少し安かったら…と聞こえてくるのでやはりちょっと高いのだろう。ここは一番安いのを選んであげたほうがいいだろうが、それだとまた怒らせてしまいそうなので真ん中からちょっと数字が低いものを選んでおいた。

会計を済まし、また宿まで戻る。また色々と女の子に近づこうとしていたので殺気を出しながら。

部屋で弁当の蓋を開ける。入っていたのは白米に野菜炒めのようなもの。それと肉が2枚。うーん、中世に白米は似合わないなぁ。

「うふふ。これ、コンビニでしか売ってないんですよ。なにも、とっても遠くから渡ってきたものだとか。」

だろうな。おそらくあっちの世界のものが何かしらの理由でこっちまで迷い込んできたのだろう。図書館で地理の本を覗いたが、異世界からやってきた国王のことが乗っていた。その国はコンビニであふれかえってたりするんだろうか。

遅めの夕食を済まし床につく女の子。当然狩人である彼女は眠らず一人夜空を眺めていた。そういえば女の子の名前を聞くのを忘れていた。明日の朝聞いておこう。ここも、あっちと変わらない月が浮

かんでいる。ぴょん、と何かが窓から飛び込んだ。猫だ黒ぶちの猫が窓から入ってきた。月の光が淡く毛を照らしている。猫は机の上で座り尻尾を時折ゆらして彼女を凝視する。彼女もまた猫を見る。互いがしばらく見つめ彼女はゆっくりと手を差し出した。猫は近づき何度か彼女の手をスンスンと嗅ぎスリっと頭を手にこすった。両手を伸ばして猫を撫でる。彼女は一晩中猫をなでて過ごした。

夜が明け、空が白んで来た頃、それまでずっと撫でられ続けていた猫が急に彼女の手から離れ入ってきた窓から出ていってしまった。それと同時に寝室の扉が開き、女の子が起きてきた。

「ふわ～。おはようございます。」

「おはよう。」

女の子は少し寝ぼけながらもテキパキと準備し３０分立たない頃には2人分の食事が並んでいた。

「悪いわね。色々と。」

「いえ、いいんですよ。私も一人で寂しかったですし。」

「…そういえば、私あなたの名前を聞くのを忘れていたの。あなた、名前はなんていうの？」

「私はフレデリカといいます。」

「フレデリカ、ね。私は、暁よ。」

ヨアケと言う名はあくまであっちの暁と区別するため。本名は暁だ。

「アカツキさんですか。あまり聞かない名前ですね。どこから来たんですか？」

「暁でいいわよ。…異世界って言っても通じるかしら。」

「異世界？…あーそうなんですね。へー、初めてだなあ、こんなに近くで見たの。」

「結構いるの？そういう人。」

「ええ、そこまでって言うほどではありませんが時折見かけることはあったので。」

「そうなの。」

「はい。話しかけられたことも数回ありましたね。」

思ったよりいるもんだな。自分みたいに誰かに連れられてくるんだろうか。…あ、そうだった。話すことがもう一つあった。
「ねえ、私あなたの仕事を手伝おうかと思うの。」
「え、ええ？」
「一週間も泊まらせてもらうのに何もしないのは流石にあれだわ。」
「で、でも…。」
「あと正直なことを言うと私今お金がないの。知り合いの人に貰うのを忘れちゃったの。欲を言えばお金もほしいなあって。」
「ああ、そういう。日雇いですか…私が言うのも何ですけど司書ってあまりお金にならないですよ。」
「あなたがそれを言ったらおしまいじゃない。」
「私は元々司書を目指していたので…時間を掛ければまともな金額はもらえますし。でも暇ですよ、私みたいな本の虫じゃないと。」
「大丈夫よ。私も虫だから。」
「…館長に頼んでみます。人手不足なので断られましないと思います。」
「助かるわ。」

結論から言えば彼女は司書として働けることになった。給料もその日ごとに出る。人手が足らないというのが案外深刻なようで已む無く給料を引き上げているがそれでも集まらないらしい。
仕事はフレデリカが教えてくれた。昨日見た限りでは一日中座って過ごしていたように思ったが、意外にもかなり動き回る。図書館は別の町の図書館と繋がっていて、ほぼ毎日本の移動が行われている。こっちから別のところへ貸し出すものや、逆に向こうからこっちへ貸し出された本が地下の倉庫へ山積みになっている。それを対応する棚へおいていくというものだ。確かにこれは誰もやりたがらないのも頷ける。彼女は初日なのでかなりもたついたがフレデリカは流石先輩というか、テキパキとこなす。
昼も過ぎた頃やっと一連の流れが終わった。
「…う。やっと終わったわ。フレデリカは凄いわね、あんなに早

く。」
「いえいえ、アカツキも凄いですよ。最後の方は結構慣れてたじゃないですか。私、慣れるのに結構時間かかったのに。」
「ふふ、それはフレデリカの教え方がうまかったからよ。」
「そんなー、お世辞でも嬉しいです。」
「本音よ本音。」
あとの時間は閉館まで入り口近くにある席に座り、貸出なんかを希望する人の対応をすればいいという。昨日彼女が見たのは、この光景だったのだ。彼女たちの他に数人ここから離れたところに司書として座っている。ここは図書館としてはトップクラスに大きいらしい。やはりそうなのだろう。彼女もここまで大きい図書館は見たことがなかった。だから人手不足もその分顕著なのだろう。
あとの時間は彼女にとって幸福そのものだった。好きな本を好きなだけ読める。今日散々歩き回ったおかげである程度ジャンルの場所を覚えたので見つけるのも簡単になった。フレデリカもそういう。
閉館まで時は過ぎた。今日は本の貸出を願うものはいなかった。図書館に来る人はそこそこいるのだが、借りる人がいないのは不思議だ。
「そうですね。本を借りる人は滅多にいません。借りても結局夜になればここと同じで暗くて読めませんし、明かりをつけても読みにくいですから。ここのほうが窓も大きいですし明るいんですよ。何より本がたくさんありますから。本は高価なんですよ。」
フレデリカはそういう。そうか。確かに昨日フレデリカと出会ったときはあたりに明かりはほとんど見えなかった。因みに本の値段がいくらぐらいか聞いたところ、昨日のコンビニの弁当の１０倍以上はするそうだ。…それは図書館で読んだほうが絶対にいいな。
閉館したあとに行うのは軽い見回り。まだ人がいないか、忘れ物がないかを確認する。終わったら館長に報告、それで帰れる。彼女は約束通りその日の給料をもらった。相変わらず基準が分からないがだいたい本が2冊買えるぐらいだ。案外もらえるものだ。
「さ、早く帰りましょう。あまり外にいると危険ですから。」

「どうしたのよ。昨日はそんなに慌ててなかったじゃない。」
「本当は人間があまり出歩くもんじゃないんですよ、夜に。人間じゃない人もここにはよく来るので昼は人気が多いのでおとなしいですが、夜だと襲うことがありますから早く帰ったほうがいいんです。私達司書は仕事が夜遅いですから尚更。」
その割には昨日結構ルンルンとコンビニに行ってた気はするが、まあ昨日実際にフレデリカを攫おうとしてたやつは見たし本当なのだろう。余計なことはせずにさっさと帰ろう。
今日は幸運にも幸運にも何にも会わずに帰ることができた。帰るとフレデリカは早速夕食の準備をしだした。
「あら、いつの間に買い物に行ってたの？」
「昼休みのときです。いつもそのときに行ってるんですけど昨日は昼休みがなくなっちゃうぐらい忙しかったんで。やっぱり、食材を買って作ったほうが安上がりでいいですよ。」
「そうね。」
夕食を食べたらフレデリカはさっさと寝てしまった。夜遅くまで仕事をしてそこから夕食の準備をするとなるとかなり疲れるだろう。彼女自身負担になっているのでは、と少し思うがフレデリカは自分のためだけに作るよりかは誰かに作るほうが全然いいと言ってくれる。
夜も更け、今日も月が浮かぶ。この世界では何故か狩りをしたいという欲求が浮かんでこない。それほど自分が満足しているのだろうか。今頃鳴子はどこで何をしているのだろうか。ヒョイッとまた窓から猫がやってきた。昨日と同じ柄の猫。今日は最初から彼女の膝に乗り喉を鳴らしている。彼女はまた一晩中猫を撫で続けた。

翌日、図書館へ行くと館長と先に来ていた司書が話し込んでいた。
「おはようございます。あれ、どうかしましたか？」
「おはよう、いや実は少し困ったことになってね。」
話を聞くに、今日ここから別の町の図書館に本を送る予定だったと。最近その道中に猛獣に襲われることが増えたため護衛を雇っていたそうだ。しかし、今朝今日護衛につく予定だった人が体調不良で

ついていくことができなくなったそうだ。今から新しく護衛をしてくれる人が見つかるかわからないし、かと言って護衛もなしに出すわけにもいかない、ということだそうだ。
「誰か、代わりの人が見つかるといいんだが……因みに君たちは……。」
「まさか、無理です。」
「私もです。」
「私も。」
「私はいけますよ。」
「いや、いいんだちなみに聞いてみ……え？」
手を挙げたのはもちろん彼女だ。本業なところまである。猛獣から守る、要は獣狩りということだ。
「いいのアカツキ!?」
「まあ、私はそれが本業だから…。」
「ほ、本業？」
「いや、この際何でもいい。助かったよアカツキ。幸い護衛する道は途中で別もひとと交代するからその日には帰れるはずだから。」
「では、私は今日はそっちに行きますね。どこへ向かえば？」
「正門に行けば業者がいるはずだ。これを持っていきなさい。」
渡されたのはこの図書館のマークがついた首飾り。
「気をつけていってきてくださいね。」
フレデリカに見送られて図書館を出る。制服から狩装束に着替えた彼女は言われたとおり正門に向かう。業者の外見を聞き忘れたが多分見ればわかるだろう。
そうこうしていると、正門が見えてきた。業者は…ああ、多分あれだ。荷台に大量に積まれた本が見える。
「あの…。」
「あ？……ああ、君が？」
「はい。よろしくお願いします。」
業者の人は彼女の姿を訝しんだが首飾りを見て納得したようだ。待機していた牛を歩かせ正門を出る。

「今から２０ｋｍほど歩く。そこで交代だからそこまでよろしく。」
「わかりました。」
森の近くに大きな街があるので門をでればすぐに森に入る。轍にそいながら荷物を牛に引かせる。荷物である本が大量な上に引っ張っているのが牛ということでかなりスピードが遅い。
「お前、男か？女か？」
「はい？」
「いや、その見た目だからよ。性別がどっちか分かんねえんだよ。声は女っぽいが。」
「私は女ですが。」
「まじか…大丈夫なのか？」
「ええ、心配はご無用。本業ですから。」
「そうか、そこまで自身があるなら…ともかく頼むぜ。俺はせいぜい逃げんのが限界だからよ。」
「はい。」
森はすぐに深くなり。辺り一面が木となった。もはや目印は通ってきた道だけでそれでもすぐに前後がわからなくなりそうだ。
……聞こえた。狼の鳴き声だ。少し遠いが、気づかれたか。
「…おい。」
「はい、聞こえました。まだ遠いようですが。」
「このまま気づかれずに行ければいいが…少しスピードをあげようか。」
「そうですね。あまり早すぎると揺れる音で気づかれるので程々に。」
「あいあい。」
歩くスピードを少し上げた。……音がした。遠くから茂みの音が。だんだん大きくなってくる。こっちに近づいてきているのか。まさかバレたか。武器を取り出し、聞こえてきた方向へ体を向ける。来る、来るぞ。段々、段々と大きくなっている。速い。走ってるな。人間のスピードじゃない。獣だ。
「おい。どうした。」

気づいていない業者が牛を止めた。まずい。彼女は海へあまり人を守りながら戦ったことがない。これだと後ろを気にしてなかなか戦えない。

「危ないですから私から距離をとって。」

「は？何を…」

「いいから！」

バッと茂みから飛び出てきた。狼だ。狼ではあるが体躯が異常に大きい人間以上ある。いや、それどころかこいつは…ヤーナムにいるような狼じゃないか。

第15話

どういうことだ。町中で人攫いを見たときから違和感はあったがこいつまでいるのはいくら何でもおかしい。なぜかは分からない。考えられるのは何らかの理由でヤーナムから迷い込んできたか、それとも獣の病がこっちまで媒介されたか。後者はないと思いたいが、一先ず荷物を守らないと。幸いにも獣が狙っているのは自分だ。

「今のうちにできるだけ遠くへ！」

いや、駄目だ。こいつが1匹とは限らない。この場からできるだけ離れてはほしいが目の届かないところまで行かれると守りきれない。やっぱり戻って…と言おうとしたとき、その思案どおりもう一匹が飛び出した。しかも狙いは業者のようだ。

彼女は酒瓶をとりだす。血の匂いがするこの酒を業者に向かう獣めがけ投げる。見事瓶はあたり、割れ、中身がぶちまけられる。人間はきつ過ぎる、しかし血に酔う彼女には心地いい匂いではあるのだが。中身をまともに浴びた獣はその場でのたうち回るが、そこに彼女を狙っていた獣が噛み付いた。噛みつかれた獣は、血の匂いで混乱しただ同じ獣に食い尽くされるだけであった。1匹になった獣を彼女はすぐさま処理し業者に向かう。業者は荷台によりかかり息を切らしていた。

「はぁ、はぁ。な、なんだあいつ。あんなの見たことないぞ。」

「見たことないの？」

「狼はあるさ。でも、あんなデタラメな大きさしたやつは見たことねえぞ。あんなのに襲われたら命がいくつあっても足りねえぞ。」

あいつがここの固有種という楽観的な考えは打ち砕かれたわけだ。ということは必ず原因がある。今すぐ調べたいが今は課せられた仕事を全うしなければ。

日も傾き始めた頃、道の向こうで仰々しい格好をしたやつが自分たちを見つけて近づいてきた。そいつは持っていた紋章を見せながら話しかけてきた

「やあ、やあ。私が護衛を引き継ぐものです。あなたが前任？若い

ねえ。女の子じゃないか。」
鎧をガシャガシャと鳴らしながらやって来たそいつは、見た目の割に声が若かった。お前も若いだろうが。
「あまり見くびらないほうがいいぜ。この子には十分助けられたんだ。それじゃ、ここまでありがとうな。またあいつに出会わないように祈っとくよ。」
「…あなたも無事でいられますように。」
ここまで何度か普通の獣には出会ったが結局あの狼に出会ったのはあの時だけだった。森は暗くなるのが早い。日が傾き始めたばかりだというのにもう薄暗くなっている。例の場所は依然として死体が転がっているがハエやなんかは一切ちかよっていない。出てきたのはこの茂みの奥。すでにかなり暗くなっているがそんなことを気にせずに進む。進んでいくうちに血の匂いがしてきた。そこらの動物ではない。人間でもない。獣の病に侵された者の独特の血の匂いだ。進むたびにどんどん濃くなっていく。酔いしれそうになるのを我慢しながらその中心地にへと進む。
ふと、開けた部分が見えてきた。おそらくあそこが中心地。そこは半径５ｍ程度の真円上でその真ん中に何かある。
「何で灯りが……。」
あの灯りだ。だが少しデザインが違う気がする。ここは灯りしかないように思えるが明らかに血の匂いの強さが異常だ。まるでヤーナム中の獣の血を集めたみたいな匂いの濃さ。彼女も理性を保つのに苦労するほどだ。
途端に感じる気配。人ではない。エヴェリンを向けると森に逃げるローブ姿が見えた。
「待ちなさい！」
エヴェリンを相手の足めがけて発砲する。が、当たったローブ姿は霧散してしまった。
「な、クソ！」
どこぞの森のババアを思い出す。鐘の音はしないが、啓蒙の多さが裏目に出ている。段々分身が増えていってる。しかしその全てが森

に逃げている。完全に逃げる気だ。彼女を襲おうというのではない。是が非でも逃げる気だ。おそらく奴が獣を呼び出した張本人なのだが捉えようにも３６０度どこを見ても同じ格好をしたやつが森に逃げていってる残念ながら追いかけるのは無理だ。そのまま見送って見えなくなった頃不思議と血の匂いも段々と薄れていって更にはあの変わったデザインの灯りも消えてしまった。

かすかに残る血の匂いを辿ってもとの道まで戻ってきた。相変わらず死体がそのまま転がっている。多分この獣はあのローブに呼び出されたんだろう。だが、このままにしといても病を振りまくかもしれない。燃やしておこう。あの業者は獣の血を浴びてないから大丈夫なはずだ。ここで燃やしては森に引火してしまうかもしれない。森と城壁の間は平地があるのでそこで焼いてしまおう。

平地の岩場まで死体を引きずり日をつけた後街へと向かう。日は沈み、すっかり暗くなっていた。図書館はすでに閉館時間になっていたようで、入るやいなやフレデリカに飛びつかれた。

「遅かったじゃないですか！」

「ごめんなさいね。思ったより時間がかかってしまったわ。」

「いやいや、無事でよかったよ。はい、これ今日のぶんね。今日はホントおつかれ。多めに入れといたよ。」

「すいません、ありがとうございます。さ、帰りましょう？」

「はい。」

深夜、今日も猫を撫でながら彼女は月を眺めていた。眺めながら彼女はあのローブ姿を思い出していた。

ローブ姿の顔は見えなかったが、走り方は男の走り方に見えた。ただ、彼女も狩人をやっていく上で走り方は変わってきたので、ローブ姿が男なのかは分からない。身長的には高すぎず低すぎず。体躯はローブのせいでよく分からなかった。そしてあの変わったデザインの灯り。彼女が知っているものよりも色が少し暗く、模様はあまり変わってないが、彼女が使うものが釣り下がっているいわゆるカンテラ状のものであれはどっちかというと街灯に近かった。ポールに直接

くっついている。あのタイプの灯りは見たことがない。それ以外に特徴はなかったが一番不思議なのはあのローブがいなくなって、血の匂いも、あの灯りすらも消えてしまったことだが、どれも彼女には初めてのことであって全く見当がつかなかった。
　残りの日数、幸いにも何も起こらず、彼女にとっては読書に耽ることができるという幸せな日々を過ごした。しかしそれも今日でおしまい。明日には鳴子との待ち合わせの日だ。
「一週間だけだったけどありがとうね。」
「一週間がまるで一ヶ月のようでしたよ。私もこんなに楽しい日々を送れたのは久しぶりです。やっぱり誰かと一緒に過ごすのが一番ですね。」
「そうね、一人は寂しいものね。」
　昔の妹たちが思い浮かぶ。今はもういない３人。墓参りぐらいしたいが遺体がどこに行ったのかわからないし、どうせどこかに収容されているかすでに別で埋葬されたのだろう。
　フレデリカはその日遅くまで起きていた。明日も仕事じゃないのかと聞くと休暇を取ったらしい。
「はぁ、寂しいなぁ。」
「大丈夫よ。貴方には私以外にも色々な人がいるじゃない。」
「でもー、家に帰ったら一人なんですよ。」
「じゃあ、誰か一緒にいてくれる人でも見つけたら？」
「う…それは、また…別にどこかで……。」
「うふふ。そうしていると色々と逃すわよ。」
「まるで、知っている風ですね。私と同じぐらいでしょうに。」
「さあ？見た目で判断してはいけないわよ。」
「…ふぁ。」
「大丈夫？眠いなら寝てしまってもいいのよ。」
「いえ、今寝たら絶対にアカツキの見送りができませんのでこうなったら徹夜します。」
「今まで徹夜しなかった人が急にできないわよ。」
　案の定そこから３０分もしないうちにフレデリカは寝息を立て始

めた。それを見計らったかのように猫が窓から入ってきた。
「あなたとも今日で最後ね……そうだ、私が出ていったあと、この子と一緒にいてくれないかしら。この子すっごく寂しがり屋だから。」
猫は理解したのかしてないのか分からないような返事をして、喉を鳴らす。彼女も微笑を浮かべ猫を撫でる。
空が白んできた。いつもならこの頃に猫は彼女の膝からおり、出ていってしまうのだが今日は未だに彼女の膝の上までいた。やがて日が昇り始め、活動が早い人間たちが何かしらの準備をする音が聞こえてきた。
「…そろそろ行こうかしらね。…頼んだわよ。」
猫に念押しをし、そこらにあった紙に『私にはもう必要ないから全部あなたが使ってちょうだい』と書いて今までの給料が入った封筒を置き、最後に自分の帽子を置いておく。なに、もう一式分の予備がある。一つぐらいどっかにおいていったって問題はない。
「世話になったわ。」
フレデリカを起こさないように静かに扉を閉め1階に降りる。準備で起きていた宿主に別れを言って外に出る。彼女は制服から装束に着替えて鳴子との待ち合わせ場所に向かった。
待ち合わせ場所である正門前、そこにはすでに鳴子がいた。
「あれ、もういたんですか?早いですね。」
「いえいえ、暁さんも十分早いと思いますよ。まだこんなに朝早いのに。」
「時間がわからなかったので取り敢えず早めについとこうと思って。」
「なるほど、時間厳守ですね。」
「そう、ですかね。」
時間を決めてないのに時間厳守ってあるのだろうか。いやそんなどうでもいいことはどうでもいいんだ。
「それで、鳴子さんの用事ってなんなんですか?」
「あ、そうですね。じゃあ、取り敢えず行きますか。」
「行くってどこへ…?」

「北です。」
「北。」
「北です。」
「はぁ。」
北と抽象的に言われてもよくわからないが、鳴子に言われるままダイラス＝リーンの街を出る。北に向かいながら森に入りしばらくしたところで鳴子が止まった。
「じゃあ、飛びますね。」
「…はい？」
「飛びます。」
「なんでです。」
「目的地まで歩くと死ぬほど時間かかるからです。」
そう言うと、鳴子の体からメキメキと骨が折れていっているかのような音がしだした。
「え、ちょ、大丈夫ですか⁉」
「心配しないでください、ちょっと体を作り変えてるだけですから。」
「か、体を？」
やがて鳴子はうずくまり、四つん這いになった。再び彼女が声をかけようとすると、背中から来ていたローブを貫いて何かの骨組みのようなものが出てきた。鳴子が痙攣し始めた。すると今度は骨組みのようなものからどんどん羽が生えてくる。痙攣し終わり、立ち上がった鳴子には見事な翼が生える結果となった。
「さ、これで飛べますよ。ほら、手を繋いで。」
「え、は、はい……うわっ⁉」
突然のことで理解の追いつかない彼女は言われるままに両手をつなぐと、途端に鳴子はそのまま飛び上がった。
「う、うわぁ、飛んでる。」
「うふふふふ。こっちのほうが楽でしょう？このまま行きますよ。」
ビュンと速度をあげ北に向かって飛ぶ鳴子。しかし速度をあげたせいで彼女の手にかなりの負担が生じ、結果早々に握力が限界を迎え

ようとしていた。
「ちょ、な、鳴子さん！あ、握力が！握力がもう！」
いくら狩人をしていて人間離れしている彼女でもまだ人間をしているので流石にキツイのだが、高速で飛んでいるせいか鳴子は全く気づかない。
「ちょ、も、もう無理……あっ。」
手が、抜けた。
「え、暁さん？暁さーん!?」
重力と慣性に従い斜めに落ちていく彼女。下にはまだ森が広がっており、うまく行けば葉が衝撃を吸収してくれるだろうが、最悪枝が刺さる。あの木に落ちるなと思っていた頃に何かに服を捕まれ、そのせいで服が腹に勢い良く食い込んだ。
「おゴォ!?」
「だ、大丈夫ですか？」
「ちょっと大丈夫じゃないです……。」
「と、取り敢えず一度下ろしますね。」
地面におろしてもらうと圧迫された腹が戻りまた痛みが走り出す。その痛みに耐えること数分、やっと落ち着いてきた。
「大丈夫ですか。なんで突然落ちたりなんか…。」
「すみません…握力がなくなてしまって…。」
「握力？」
「すごい速さで飛ぶもんですから、とても引っ張られるんですよ。」
「…ん、えっとぉ……あ、あーあー、なるほどそういうことですか。すみません。そこまで考えれてなかったです。」
「いえ、そんな。」
「それじゃ、もうちょっと乗りやすいものにしますね。」
またメキメキと音が鳴り出すが今度はなるこの体全体が変わっていく。ローブが破れ、骨格が人間じゃないものへと変わっていき、同時に体全体から毛が生えていく。心なしか体躯も大きくなっていき、最終的には大きな人面鳥へとなっていた。
「さ、背中に乗ってください。これなら疲れないでしょう。」

「あ、はい。」
なんだろう、既視感がある。どこかで見たような気が…映画で……
あ、あれだ。ハ〇ルだ、ハウ〇で見たことあるやつだ。
背中に乗り、かなりマシにはなったが今度は風圧により背中から落ちないようにするのにかなり苦労したのであった。

第16話

風圧に押されてしばらく、気づけば地面に降りていた。
「あ、こ、ここは？」
「お疲れ様です。さ、目的につきましたよ。」
「は、はあ。それでここはど、こ…。」
彼女の眼には鳴子の後ろに立つ巨大な動物が見えた。像よりも大きなその体には鱗が生えており長い首には馬のような顔がついている。翼には蝙蝠のように被膜が張っており、一言では言えばその見た目はドラゴンであった。
「私のペットです。シャンタク鳥のシーちゃんです。」
「シャンタク鳥、と、鳥？えと、そのそのシャンタク鳥…シーちゃん？に何かするんですか、餌付けとか？」
「いえいえ、この子知能は人間並みにあるんでご飯ぐらい自分で何とかしますよ。建物とかも立てたりしますし。ただこの子自分の首が届かないところを繕いすることができないですよ。だから私がたまにこうやって代わりにしてあげるんです。人間の構造はこういう時に楽ですよね。」
「え、あ…あれこの子が建てた…。」
シーちゃんの横には遺跡で見るような建造物があった。人が建てたものと遜色ない形はこんな生物が建てた者とは到底考えられない。
鳴子は一生懸命シーちゃんの首をよじ登っている。手に持ったクロスでシーちゃんの首を拭くつもりだろうか。
「すみません、暁さんは背骨に沿って拭いてもらえますか？」
「あ…はい…大変なら巨大化するぐらい大丈夫ですよ？でかい人外死ぬほど見てきましたし。」
「あ、そういえば暁さん大丈夫でしたね。じゃあそうさせてもらいます。」
鳴子は一度降りてから巨大化して拭き始めた。彼女も首の付け根から体を拭き始めた。近くで見ると結構光沢があって綺麗な鱗だ。拭けば拭くほどその光沢は増していく。

「綺麗でしょ。シーちゃんの鱗。」
「はい。つなぎ目もきれいで色もとてもきれいです。」
「たぶんそこらに生え変わりで抜け落ちた鱗があるので持って行ってもいいですよ。生えているものほどではありませんけど抜け落ちた鱗でも十分綺麗ですよ。」
「じゃあ、後でもらいますね。」

始めはそんなに時間はかからないと思っていたが終わったころには日も暮れようとしていた。
「こんなもので大丈夫ですよ。」
「や、やっと終わった。」
「すみません、こんなに時間まで付き合わせてしまって。」
「い、いえ、私もなんか無駄に時間撮らせちゃってすみません。」
多分いつもはこんなに時間はかからないのだろうが彼女が少し手間取ってしまったせいで時間がかかってしまった。しかし、こんなに手間がかかることをシーちゃんは一人で自分たちがしたところ以上のところをやっているのだと思うとすごいなあと思う。
「はい、これをどうぞ。」
「これは？」
「いったじゃないですか、シーちゃんの鱗をあげるって。はい、今日のお礼です。」
「ありがとうございます。…5枚もですか？1枚で十分ですよ。」
「あの子達のお土産にでもしてやってください。」
「あー、ありがとうございます…あれ、鳴子さんに話したことありましたっけ。」
「人数は教えてもらってないですねー、でもそれぐらいはわかりますよ。」
「はは、まあそうですよね。そろそろ驚かなくなりました。」
「今日はもう遅いでしょうし、ここに泊まっていくといいですよ。」
「そんな、大丈夫ですよ。」

「いやー、でもここ結構危ないんですよ夜になると。暁さんなら大丈夫かもしれませんけど…大事をとって、ね？」
「…鳴子さんがそう言うなら、まあ。」
「良かったぁ。じゃあ、あそこの建物にどうぞ。」
「あれって、シーちゃんが作った建物にですか？」
「人間でも十分使えますよ。」
何故かあるドアをくぐると確かに部屋の広さも天井も人間用っぽい。石造りではあるがやけに落ち着く空間だ。
「暁さんはあそこの部屋をどうぞ。」
「あ、どうも。」
もうすっかり暗くなっている部屋に月光が差し込んでいる。月は満月であるのに星はそれに負けじとかがやいいている。今まで見た星空の中でも一番きれいだろう。今頃ヤーナムはどうなっているだろうか、いつも通り獣がはびこっているのだろうか。それともまた別の上位者が住み着いているだろうか。
暁たちはどうしているだろう。遠征はどこまで進んだだろう。あの様子だと昔の遠征とはわけが違うのだろう。昔は遠征に行くのにも命がけだった。そもそも海に出ること自体自殺行為に等しかった。
数か月前のやつの言葉を思い出す。すでに自分は過去の存在だ、本来ならあの場で終わっていたはずだった。どういうわけだか目覚めた先はヤーナムであったが。最後の記憶、自分に近づいたのは恐らく狩人であったのだろう。なぜあの場に狩人がいたのか…まあ、どうでもいいか。今こうやって自分が存在しているのであれば。あ、帰ったら暁たちに契約書を書かせなければ。でも契約書ってどこでもらえるんだろうか。自分の時は変な爺さんに書かされたが……狩人さんが持ってるかもしれない。
「どうしましたか、眠れませんか？」
「…え？」
「いえ、もう夜も更けてしまったのなかなか眠りにつきなさらないので。」
「え、いやだって、まだそんな…。」

窓を見るとついさっきまで地平線近くにあった月は真上まで上がっていた。こんなに時間がたつまで自分は思考に浸っていたのか。いや、そんなはずはない、内容的にたかが数分程度だ。
「それとも、知らないうちに時間が進んでいましたか？」
「っ、ま、まあそんなところですかね…。」
「ふふ。そんな何か鎌をかけたわけじゃないんですよ。この世界は限りなくあちらの世界に似ています。なので、住民や迷い込んだ人たちも難なく馴染むんですが…やはり、暁さんは少し違うみたいですね。」
「でもこんなことは初めてですよ。」
「きっとそれは私のように指摘する人がいなかったからです。あなたはずっとどこかこの世界に抵抗してたんですよ。自分はこの世界の住民ではないって。多分一人でいたらどんどん自分の知らないうちに時間進んでたと思いますよ。」
「そうですかね…。私、抵抗してる気は全くないんですけど。」
「私も暁さんみたいな人は初めてですけどね。世界に抵抗する人類なんて初めて見ました。」
「私はそんな気はないんですが…。それに私はもともと夜は寝ません。そういう存在なので。」
「無意識ですか。もっと珍しそうですね。そういうことなら私とおしゃべりしませんか？そこに椅子もありますし。」
「…これもシーちゃんが？」
「はい。器用でしょ？シーちゃんは私とよく一緒にいるので人間のことをよく知ってるんですよ。」
「はぁ、でもまあ、なんて言うか…あの体躯でこのサイズ作れるんですかね。」
「さぁ、私もシーちゃんが何か作っているところは見たことがないので、ただシーちゃんが作ったことは確実です。ここ、人間が来れるようなところではないので。」
シーちゃんが作ったという椅子はやはり石製だった。別にこの辺に木が全くないことはないが、石のほうが加工しやすいんだろう。

「…あら、朝ですね。」
「あ、本当ですね。では、私はそろそろ。」
「待ってください。もう、言ったじゃないですか、一人だと時間がどんどん進むって。私が入り口の近くまで送ります。暁さんはワープしても大丈夫ですよね。」
「大丈夫ですよ、似たようなことよくしてますし。あ、でも握りつぶす方法は痛いし発狂してしまうので勘弁ですけど。」
「じゃあ大丈夫ですね。握りつぶさないので、ワープしたらすぐに扉に入ってくださいね。」
「分かりました。」
鳴子がつぶやくと次第に彼女の視界はゆがんでいった。再びはっきりした時は目の前にいつシカの扉があった。入ろうとしたときふと自分の影を二度見してみたが一回目と二回目で少しではあるが影の長さが変わっていた。それを見て彼女はささっと扉に入った。
何時しか見た真っ暗な階段。あの時はその階段を下って行ったが今度はひたすらに上がっていく。最初はごつごつとした岩場が見えていた壁もいつの間にか何も見えず、感触がただ感じられた。初めに見た門番は同じ場所で出迎え、また同じように見送ってくれた。また真っ暗な階段を上がっていく。そろそろ時間が分からなくなったころ扉が見えてきた。その扉をくぐると彼女が出たのは廊下、ではなく自分の部屋。鳴子の部屋から入ったというのに自分の部屋に出るとはどういうことか。急いで振り返るが先ほどの不思議な空間はなく廊下が見えていた。何度もこういう不思議なことを体験したが未だになれない。不思議がって少し進んだところで彼女に声がかかった。
「ヨアケさーん！」
「…あら暁。帰ってたの。」
「ええ、つい昨日帰ったわ。」
「昨日夜に帰ってからすぐにあなたの部屋に向かったが居なくてね。狩りに言ってたのかい。」

「…ええまあそんなところね。」
「えーずるーい。私も早くしてみたいのに。」
「分かった分かった、ちょっと待って思い出したことあったから。今からちょっと契約書がないか探してくるわ。」
「契約書ですか？」
「そんな難しいことじゃないわ。ただ自分の名前書くだけよ。ちょっとないか探してくるからそこで待っててくれるかしら？」
彼女は夢に戻ってすぐに狩人さんに訪ねた。幸いにも狩人さんには心当たりがあったようで引き出しから紙を1枚引っ張り出した。
「そうそう、それよ。それをあともう3枚くれないかしら。」
彼は一瞬躊躇するような素振りを見せた。
「ふふ、そりゃ驚くわよね。急に4人も狩人になりたいなんてね。安心してすぐに来させるわ。」
4人分の契約書を収めようとしたがどうも素直に収まってくれない。何か引っかかってるなと思い確認するとそこにあったのは薄紫色の物体。これはシーちゃんの鱗だ。暁たちに渡すように余分に貰ったやつだ。
「…あれ夢じゃなかったのね。…私が夢とかなんとか言うのも可笑しいわね。」
彼女は夢から戻り部屋に入った。暁たちはそれぞれ部屋を物色していたようだ。
「あら、いいものでも見つかったかしら。」
「いいえ、何も見つからなかったわ！」
「あら正直。はいこれ、それぞれ自分の名前書いてね。」
「……これでいいのですか？」
「で、これをどうするんだい？」
おっと、そういえばそんなこと考えていなかった。自分のときはあの爺さんが勝手に持っていったが。
「きゃあ!?な、何よこれ！」
暁の足に何かしがみついている。なんだただの使者じゃないか。ああ、使者に契約書を渡せばいいのか。

「き、気持ち悪いー！」
「気持ち悪いとは何よ気持ち悪いとは、可愛いでしょ。書いた契約書はその使者に渡しなさい。多分それでオッケーよ。」
「分からないのかい？。」
「私がやったときとはちょっと違うのよ。さ、行くわよ。狩人様に挨拶しないと。」
彼女は４人を灯りがある部屋に入れた。４人ともこの灯りをしっかり認識しているようだ。この灯りは狩人だけが使う特別なもの。狩人にしか認識できない。それがしっかり認識できているようならあれで正解だったのだろう。
「いい？何も考えずにこの灯りに手をかざすの目も瞑ってね。」
「えっと、こうかしら？」
「うおっ、消えたぞ。」
「さすが私のコピー。すぐに慣れたわね。」
「コピー？」
「なのです？」
「…それは今は関係ないわ。さ、あなた達も。」
順々に夢へと移って行き最後に彼女が行った。夢に戻ると何故かあたふたした彼がいた。小屋には書きかけの『ようこそ』。彼の手には何やらいろんなものがあった。
「えっと、あの人は？」
「あの人が狩人様よ。どうしたのそんなにあたふたして……え、歓迎会？大丈夫よ、そんなに大げさにしなくても。」
「え、さっきのでわかるの？」
「何か言ってたっけ。」
「いえ、何も言ってないのです。」
「狩人って凄いわ！」
「多分関係ないと思うよ、それ。」
「皆様、はじめまして。私は人形、狩人様たちのお力添えをしております。」
「に、人形が喋った…。」

「早く慣れなさい。いずれこの人形と使者だけが癒やしよ。狩人様、この娘たちが例の子よ。向こうから暁、響、雷、電よ。」
「……」
「そうよ、同姓同名。だからこの娘たちにはヨアケと名乗っているわ。」
「何で分かるのですか。」
「分からないわ！」
「堂々というものではないね。」
そしてなんやかんや始まった歓迎会。場所はいつもいる場所から離れた花園。普段全く用がないので立ち入らない場所なのだがとても広い。そこに大きな机と人数分の椅子が置かれた。机の上には紅茶と茶菓子が。聞けばすべて人形の手作りだという。
「こんなことできたのね。」
「はい。以前から狩人様に入れることがございましたので。」
「ふーん。」
この花園。昔狩人様が原初の狩人ととある上位者を狩った場所らしい。彼女はその話を全く聞いていない。今度詳しく聞いてみてもいいかもしれない。そう思いながら彼女は紅茶が入ったカップに口をつけた。

第17話

小さな歓迎会が終わった後、彼女は４人に狩人の道具を紹介していた。

「これが仕掛け武器。狩人はこいつを使って狩りをするの。仕掛けって言ってもこいつはただ伸びるだけだけど。これなんかはちょっと面白いかもね。」

彼女は一本の杖を出した。彼女がその杖を一振りすると刃が伸びて杖にまとられた。

「ちょっとかっこいいのです。」

「見てくれはいいけどね、威力が弱いからあんまり使えないのよねこれ。見てくれはいいのに。」

彼女が杖で床を一突きする。すると刃は杖の中にしまわれていった。

「派手なのはないの!?」

「派手？派手って言うなら、例えばこいつかしらね。これは私の昔のお気に入りよ。」

彼女が出したのは突起が付いた棒と刃が円盤状に一対並んだもの。その真ん中には穴がある。彼女はその穴に持っていた棒を挿した。ひどくこすれる音と火花を散らしながら刃が高速回転する。

「回転ノコギリっていうの。昔は重宝したわね。今は別のものつかってるけど。とりあえず、仕掛け武器って言うのはいろいろあるわ。とりあえずこの、ノコギリ鉈か、仕込み杖、獣狩りの斧をお勧めするわ。」

「えー、私さっきの回転ノコギリが欲しいわ。」

「無理よ、あれは最初から扱えるものじゃないのよ。いづれ使えるようになるから最初はその３つから選びなさい。」

「…じゃあ、私これにする！」

「い、電も雷ちゃんと同じものにするのです！」

「ふむ…じゃあ私はこれにしようかな。」

「私はこれにするわ！」

選んだのは、雷と電が獣狩りの斧、響がノコギリ鉈、暁は仕込み杖だった。
「暁、本当にそれでいいの？本当に弱いわよ、私も使ったときあったけどすぐにやめたわ。」
「これが一番レディっぽいわ！」
「…そう。あー、あと銃も使うわ。こっちは違いは単純よ。射程を取るか当たる面積を取るか。ぶっちゃけて言えば距離を取ることがそれほどないから最初は散弾銃で十分だと思うわ。」
「じゃあ、そうするわ。」
「そうだね。」
「私もそうするわ！」
「み、皆と同じにするのです…。」
「じゃあ、最後に狩り装束だけど…これはあそこの使者と相談してきなさい。費用は私が持つから。」
「お金かかるの？」
「似たようなものがかかるの。今は気にしなくていいわ。」
彼女が指したのは水盆の上にいる使者たち。それぞれが何かを持っている。４人がそこへ向かうと彼女は彼に４枚の紙を差し出した。契約書だ。
「はいこれ。狩人様に渡せばいいかしら？」
彼は彼女の頭を撫でながらその紙を受け取った。
「うふふ。後は頼んだわ。」

彼女は慰霊碑の前にいた。向こうへと行くための彼女の名が彫ってある慰霊碑。何の前触れもなくこの花畑に現れた。彼ですら心当たりがなかった。そもそもここに書かれていることは彼女にしか読めなかったし、その内容も彼女の名と没した年月が書かれているだけだ。しかし、その大きさは彼をも超える。金息の森にあった謎の石碑のようだ。
「ヨアケさーん！着てきたわよー！」
「ん、どう、気に入ったのはあった？」

雷電姉妹はヤハグル一式を選んだようだ。この二人はいつも同じものを選ぶな。響は灰装備か、で、暁は…
「…何それ。」
「ふふん。優美でしょ？」
「……。」
「すまない、暁がこれがいいと聞かなくて。」
「…いや、まあ、これは私も少し申し訳ないというか…どうせ後で思い知るだろうからいいわ。じゃあ、今から武器の使い方を教えるから。」

ヤーナム。獣の病がはびこるこの町は血の医療が盛んだったが皮肉にも崩壊の原因にもなった。そのある建物の上。
「うわ、おどろおどろしいわね。」
「あれ、ここ開かないわ？」
「そこは逆側しか開かないわ。こっちよ。」
４人は彼女の背を追う。彼女は少し行ったところで止まった。
「この先から獣は出始めるわ。基本的に私は後ろにいるから。死んでも大丈夫よ、さっきの場所から出てくるから。」
「え、今とんでもないことを聞いたような…」
「それぐらいの覚悟はしてもらわないと。安心しなさい、最初は誰でも死にまくるものよ。」
「そうと決まったら出発よ！」
「ちょ、ちょっと暁落ち着いて。危ないから。」
暁は建物の屋上を走る。木箱が積まれているのを見て壊そうとしたがそれよりも早く獣が券を振り回しながら現れた。暁は突然のことに動けなかった。ドレスは言わずとも戦闘に向いたものじゃない。刃先はドレスをやすやすと破りその下の肉を切り裂いた。暁は呻き、倒れた。おびえた顔をして浅く呼吸をしている。赤いドレスはさらに赤黒く染め上がっていた。
「あ、あ？い、痛い…痛い…。」
あの獣はもとは人間だ。自分たちで獣狩りをしようとして逆に獣

になってしまった。獣になってしまった彼らはもはや人間と獣を区別できない、むしろ自分たちと同じ獣を人間だと思っている。獣を狩るという意志だけが残っている彼らは獣を殺すまでその武器をふるう。

獣は虫の息になっている暁に容赦なく剣を突き立てる。目の前の獣が死ぬまで何度も、何度も、何度も何度も。暁は刺されるたびにほんの少し体が浮き上がった。止めに頭に突き刺され、やっと獣は動きを止めた。ただの死体になった暁はだんだんとその形を崩し入り上になって消えた。獣は目の前の者が消えるとゆったりと元居た場所に戻っていた。

「…ああいう風になるから気を付けるのよ。」

「あ、暁…」

「そう心配しなさんなすぐ戻るから、ほら。」

後ろの明かりから霧が現れ徐々に形を成す。最終的にそれは暁に変わった。暁は戻ってすぐに吐いた。さっき歓迎会で飲み食いしたものをすべてその場にぶちまけた。彼女は暁のそばにより背中を撫でた。

「すぐに突っ走るからよ。次からは気をつけなさい。」

「う…おえ…」

「あ、暁…?だ、大丈夫?」

「あーあー、ほらほら、全部吐いちゃいなさい。」

数分後、呼吸は荒いが暁は落ち着いてきた。吐くことはなかったが、今度は涙が止まっていなかった。

「うぇ…ひっく、ひっく…。」

「さて、どうしたものかしらね…とりあえず行きましょうか。あなた達は先行ってなさい。気を付けるのよ。あと自分が進んだ道を覚えておくように、死んだらまたここに戻ってくるんだから。」

「う、うん。」

「暁ちゃんは…?」

「私がついておくから、落ち着いたら私たちもいくわ。」

「…分かった。」

３人は響を先頭にして先へ進んでいった。ほどなくして声が聞こえてきてやがてしなくなった。ここには誰も来なかったから先に進んだのだろう。
「はいはい、大丈夫、大丈夫よ。」
暁は依然泣きじゃくっている。自分が思うのもなんだが、こんなに泣き虫な性格していただろうか。いくら待っても泣き止まないのでいっそのこと担いでいこうかと思ったところで灯りから誰か出てきた。３人だった。
「…あらあら。」
３人は気づくと暁と同じように吐き出した。が、吐くだけ吐くと落ち着いたようだった。
「早かったわね。」
「う、そりゃあんなに大群が居たら対応しきれるわけないだろう。」
「まだ痛い気がするわ…」
「胸に穴が開いている気がするのです。」
電はそういって胸のあたりをさすっていた。と、暁が自分の体をまさぐりだした。
「あ?ちょ、ちょっと何やってるの。」
暁は手早くそれを取り出した。上位者の知恵。暁はそれを割った。すると暁はすぐに落ち着きを取り戻し立ち上がった。
「…大丈夫?」
「うん。大丈夫。」
はて、不可解な、と思ったが落ち着きを取り戻したのでまあいいか。暁はすたすた歩きだして何事もなかったかのようだ。３人もほどなくして立ち上がった。
暁の様子がやはりおかしい。技量は素人だ。ドレスなんぞでまともな防具になるわけもない。ただ、２回目以降は死に対してなんの恐怖もないように見える。何か取りつかれたかな。彼女もさすがに何回は死に対する恐怖はあった。最初に上位者の知恵を授けたのがいけなかったかな?…恐れないっていうならそれでいいか。確実に響たちよりかは早く人の道を離れるだろうが、そもそも自分はとっくに

人の道を離れているわけで。
何回も死にはしたが、大橋の前まで来た。４人も素人から毛が生えた程度だがまあ、大丈夫だろう。なんならこれからもっと死んでもらって経験を積んだほうがいい。
「この先に、大きな獣が現れるわ。とても強いだろうけど４人いるなら大丈夫よ。じゃあ、後は好きに回りなさい。」
「え、一緒にいないの？」
「基本的なこと教えたからもういいでしょ？あとは好きにヤーナムでも回りなさい。もしヤーナムに飽きたらほかの場所もあるから。狩人は気ままに獣を狩るのよ。もうここに夜明けは来ないわ。」
彼女は４人に何も言わせず道を引き返した。しばらくたって甲高い鳴き声が聞こえてきた。聖職者の獣、聖職者はより大きな恐ろしい獣になるそうだ。そうなのだろう、狩人も呑まれれば獣となる。血に酔った狩人ほどより恐ろしくなる。今もし彼女が獣になればどれほど恐ろしい獣になるだろうか。きっとどの獣よりも恐ろしい獣になるだろう。
夢に戻った。彼はどこか散歩しているらしい。人形も寝ていた。本当はもっと付き合う予定だったが飽きた。先回りしてビルゲンワースで待っていよう。前に読んだ本で少しメンシス学派に興味がわいた。それはもちろんこの集団が上位者に執着していたから。
ビルゲンワースは静かなところだ、何かの実験体らしきものが彷徨ってはいるが。このビルゲンワースで見つかったメンシス学派の誰かの手記。さっき見つけた。前には見つからなかったものだ。中にはなにかの実験の経過か何かが語られている。…上位者を…作ったらしい。これはヤハグルで出会ったものではないみたいだ。上位者を隠し守るために上位者を作ったと…メルゴーの乳母と名付けたようだ。乳母…乳母…そういえば悪夢の中にそれっぽい奴がいたかな。…隠し守る。何から隠すっていうんだい。上位者のために上位者を作り上げる、じゃあ上位者相手か？でもあの場にその上位者はいたが守っているっていうその上位者はいなかったが…赤ん坊の泣き声は聞こえたが、あれが上位者か？にわかには信じられないが、乳母

という名前を付ける限りではやはりあの鳴き声の正体は上位者か。

「……」

思案につかれた彼女はふと湖を見る。この下今はもういない…いやいるのか。ここにいた爺さんには退いてもらった。今頃は中にいた学徒と何かしているだろう。彼が狩人として勤めを果たしきらない限りこの夜は明けない。彼女は狩りを全うしない限り夜は何度も繰り返す。この世界の秘密は暴かれて、また隠される。ここの蜘蛛を狩った時、遠くに女性が見えた。赤ん坊の泣き声と押しつぶされそうな巨大な赤い月。月…月ねぇ。まさかとは思うが…

ここにはメンシス学派のほかに医療協会の本もある。本当に何でもあるなここは。きっと大学的な立場だったんだろう。中にフラスコとか落ちていたし。中身を読んでみたが、いわゆる学術書のようだ。訳も分からない専門用語が連なっている。分かる単語は上位者と瞳という言葉くらいか。医療協会も上位者に興味があったらしい。だが専門用語やらがつらつらと書かれているだけでまったく内容が分からなかったので早々に投げ出した。そして取り出した小説を椅子を揺らしながら読み始めた。

主人公は一般な人。今までの人生も一般的で友人もどこにでもいるような奴だった。彼に普通じゃないようなことはただ一つ。彼はデジャブを感じることが多々あった。学校での先生の話の持って生き方。車がやってくる順番。テレビで見る大きなニュース。小さなことから大きなことまでよく感じていた。最初は周りによくそのことを話していたが、そのうち聞かされる友人がうんざりした様子を見せだしたので話すのはやめてしまった。だが、デジャブは収まらない。むしろ前よりも増えている気がする。彼は就職した。彼の仕事柄危ないことはよくあった。建築関係で働く彼はよく高所にいる。作業しているときによくデジャブを感じる。昔のものよりも確固たるものを感じるせいでたびたび手が止まり一緒に働いている友人から心配されていた。ある日のことだった。彼はいつも通り高所で作業をしていた。そこでの作業が終わり移動していた途中、角を曲がった瞬間死角にあったバケツを踏んでしまった。そのせいでバランス

を崩した彼は足場から落ちてしまった。ビルの何十回からも落ちる彼は、自分は死ぬんだと感じた。なぜかこの瞬間でさえをデジャブを感じた。視界いっぱいに地面が広がった瞬間「次は…次こそは…」という声が聞こえ目を覚ます。

なにか悪い夢を見ていたようだった彼はその夢が何なのか分からず、悶々としたまま高校に行く準備を始めた。

この小説は『タイムトラベラー』という題名だそうだ。タイムトラベル、今いる時間から過去に戻ったり未来に進んだりする。この世界も離れてしばらくすると時間が巻き戻って夜が始まる。これはタイムトラベルだろうか。自分はタイムトラベラーなのだろうか。

第18話

「来ないわね。」

結構待った気がする。が、まだ来ない。どこでそんなに時間を喰ってるんだか。月はまだ白い。ああそうだ、鎮守府に行こうか。提督の様子がおかしいとか言っていたし、何よりほったらかしにされたのが気に入らない。だが、様子がおかしいとは聞いたがどうおかしいとは聞かなかったな。せいぜい付き合いが悪くなったぐらいか。

彼女は本を閉じ腰を上げた。

しばらくぶりに戻った鎮守府は前にしていた工事も終わったようで建物も増えているようだし、人も増えている。その分、ずいぶんと騒がしくなっていた。人がいるとこそこそ調べるわけにもいかないので取り合えば夜まで待つ。結局夜まで待ったが誰一人として訪ねることはなかった。夜になれば昼とは打って変わってシンと静まり返っていた。彼女は早速行動を開始する。提督を調べるのだからまずは提督がどこにいるのか探す。まず正面から普通に入ろうと思ったのだが、相も変わらず奴がそこにいるのはいいとして、前とは違って誰かが入り口の前に立っている。多分艦娘だ。見張りを付けたのか、何故、人が増えたからか?あったことない奴だ。別の場所から行こう。

確かドッグのほうに牢に入る入り口があったはずだ。あそこなら誰か立ってることはないだろう。

やはりドッグには誰もいなかった。明かりだけが静かにあった。確か扉がこの辺りに…あった。中に入ると雰囲気が一気に不気味なものになる。その程度で彼女にはなんてこともないのでずんずん進む。牢には誰もいなかった。入り口に聞き耳を立てて誰もいないのを確認すると、音をたてないようにゆっくり開けた。やはり誰もいない。右側はすぐに壁だ。牢ってこともあるのでここは建物の端っこなんだろう。

足音を立てないよう静かに歩く。このフロアは一切人の気配がし

ない。扉は等間隔にあるが、その全てが倉庫か空き室か。脳内で地図を広げた感じここら辺は建物内の右端っこだ。前は案内されて最短距離で行ったからそこまで大きくはないように感じたが今こうやって自分で歩いてみるとこの建物は意外に大きい。廊下の突き当りを右に曲がる。さっきよりも長い直線が見える。歩いてみてもずっと人の気配がしない。なぜ人の気配がしないのにこれだけ部屋があるのか…そういえば人は増えていたな。寮を別に建てたからか。

廊下の真ん中に立ったところでここがロビーだと知った。左側に玄関が見える。あ？なんか不自然だ……直立不動だ。まるで人形だな。顔も動かずか？後ろ姿しか見えないが、ま、動かないでいてくれるならそのままでいてくれ。

ここからなら提督室までの道は覚えている。提督がまだそこにいるのかはわからないがとりあえず行ってみよう。彼がどう怪しいのかなぜ怪しいのかはわからないが行ってみよう。果たしてそこに理由があるか分からないけど行ってみよう。

階段を上る、登り切った先の真ん中が目的地だ。

「…だ……こ…いの作戦はそこまで大掛かりにはなさそうだね。」

「そうね。」

「今回の作戦が終わったら休暇を取ろうと思います。加賀さんも一緒にどうですか？」

「そうですね。たまには一緒に過ごしましょう。」

……通り過ぎたか。階段を下りる音がした。隠れた部屋から出て目的地の目の前に立つ。きっとこの先に彼がいる。彼はまだここにいる。じゃあ、だめじゃないか。この部屋を探るのは彼がいなくなってからじゃないと、それまで隠れて居よう。

彼女は隣の部屋に入り待つ。じっとして、息を殺して、どんな音も聞き逃さないように。やがて扉があく、鍵をかける音、足音が小さくなった。外に出て部屋のノブを回す。しかし開かない。ああ、鍵をかけられたんだっけ。どうしよう。これでは入れない。困った。

「困ったわ。本当に困った…まあいいかしら」

あまり騒ぎになるようなことはしたくないが仕方がない。ノブの

部分を破壊して無理やり入る。中は前からあまり変わっていない。怪しいと言えるようなところは見当たらない。ゲームなんかでは引き出しなんかに手記やらパソコンに謎の文章があったりするが実際にはそんなことはしない。ここにはなにか怪しいものがあることはなかった。となれば彼を尾行するのが正解か。

残念ながら彼が出ていってから時間が経ってしまったので今から彼を探すことはできないだろう。諦めて今夜は帰る。廊下に出ると電気が切れていた。玄関まで降りてくるとあの二人の艦娘はいなかった。というか扉もしまっている。仕方がなく来たときと同じように牢に向かい、そこからドッグを経由して出る。

残念ながらドッグを出たところで提督の後ろ姿が、なんてことはなかった。

誰とも合わず安全に夢まで戻ってくると、四人がいた。暁の服装が変わっている。

「あら、服変えたの？」

「あ、ヨアケさん。」

「そうなのよ、やっと変えてくれたのよ？暁ったら何回死んでもあの服装がいいって、レディだからって。」

「最近ついに心が折れたのです。」

「弱いー、って半泣きになりながら杖を振り回してたもんね。」

「も、もう！そんなこと言わないでよ！で、でも私が最初に死に慣れたわ！」

「あれだけ死んでたらそりゃそうなのですよ。」

「…最近ちょっと電が毒気ついた気がしてるんだけど気のせいかしら。」

「どう、狩りは順調？」

「ええ！なんか広い場所まで行ったわ！」

広い場所？ヤーナムは広い場所だらけだからよくわからない。でも順調そうならいい。

「ヨアケさんは何してたの？」

「私？私はあなた達の提督を嗅ぎ回ってるわ。」

「怪しいって言ったから？」
「そう。私を放置した仕返しにね。まあ、あなた達が怪しいって言っただけだから本当にやましいことがあるのかはわからないけど。今日は何も成果は無かったわ。あなた達他になにか知らないの？」
「うーん、怪しいったって最近無視されることが多かったってぐらいだし…」
「でも今まで司令官さんが無視することはなかったのでやっぱり変なのです。」
「誰か付けたこととかないの？」
「さあ、私はつけたことはないな。」
「私もないわ。」
「そう。じゃあ、地道に探すしかないわね。私はまたしばらくあっちにいることにするわ。あなたっちも頑張りなさい。」
「はーい！」

戻って来たところでまだ深夜だ。調査するにはもう遅い。また明日の夜を待つしかない。
彼の部屋を覗いた限りではおかしいところは見受けられなかったが、やはり数ヶ月放置させるのはおかしい。今度はつけて行ってみよう。
その日の朝は騒がしかった。放送で招集命令が下ったやいなや寮という寮から艦むすが一つの建物に走っていった。
昨日彼女が提督室の部屋のドアを破壊したのでそのことだろう。
「……」
彼女は部屋を出た。すると丁度部屋を出る鳴子と鉢合わせた。
「あ、おはよう御座います。」
「おはよう御座います。」
「どうしたましたかこんな朝早くに。」
「いえね、なにか面白そうなことがあるので。」
「…ああ、さっきの。」
「はい。では、少し急ぎますので。」

建物を出る。艦娘達が向かったのは庁舎の中だ。入り口には誰もいなかった。しかし、あれだけの大人数が入っていった割には静かだ。講堂かなにかあるはずだ。右には何も無かったので左側だ。階段のそばを通り過ぎると、角を曲がった先に扉がある。くぐった先は外廊下だった。そしてその行き着く先はまるで体育館のような大きな建物。おそらくあそこが講堂だろう。入り口には誰もいない。静かに近づき扉に聞き耳を立てる。…何も聞こえない。

「みんな集まったか。」

長門の声だ。よく通る。が、その声に反応する様子は全くない。

「今回集まってもらったのはほかでもない。提督室のドアが何者かによって破壊されていた。」

どよめきはない。本当にこの中に入ったのか？あそこに窓があるから覗いてみよう。

…いる。かなりの大人数がこの講堂の中で所狭しと並んで立っている。自分が思うのもなんだが少し気味が悪い。まるで生きているようには見えない。人形みたいだ。対照的に壇上で話をしている長門たちには変わった様子はない。淡々と人形たちに話しかけている。おや、提督がいないようだ。こういう時は提督も一緒にいるもんだと思ったが、別の場所にいるのか？

結局話しも今後警備をより強化するという月並みな対策をするだけに終わった。これならさっさと提督のほうに行っていればよかったかもしれない。昼は大きく動くことができない、かといって夜になるまで隠れて待つのも暇だ。というわけで昼もこそこそと探検してみよう。

例のごとくドッグから牢を経て庁舎に侵入する。経路があまり人目につかないところにあるのでここまでは楽。だが、問題はここからでぱっと思い付くような場所は何もなかったのでどこを探るか決まっていない。何か謎の地下空間とかあれば面白いが、そんなところがあるようには思えない。ひとまず牢にこもってどこを探検するか考えよう。

脳内マップを開く。講堂を見たときにその周辺に空き地が広がっ

ていた。それもまあまあ広かった。だが、ああいうところに地下空間かなにか隠し通路の入り口があるのは少し考えづらい。あの下に空間が広がっているのはあるかもしれないが…どっちみち提督をつける必要がありそうだ。

今の時点では提督に怪しいところはなさそうだが、あの艦娘の様子は明らかにおかしい。ちょっと前は生き生きしていたし、何かあるのはあるはずだ。

出ようと立ったとき小さな鉄格子の窓から入った光が何かを照らした。

「…本棚？」

なぜか本棚がある。中にはそこそこ本が、どれも題名がついていない。昨日は夜に忍び込んだので気づかなかった。そもそも前はこんなものなかった。一冊手に取り松明を灯りに中を読んでみる。

「へー…これは、これは…」

中には簡潔に言って上位者の作り方が書かれていた。まさかの文字に一瞬理解できなかった。ということはまさかメンシス学派のやつが居るのか？…いや待て、いくら何でもぶっ飛びすぎてるだろう。なんでこの世界にメンシス学派がいるんだ。あーでも、アメンドーズがいたということはそういうことか？メンシス学派はアメンドーズに隠させていたらしいし…。

本の内容に戻ろう。ここに書かれている方法では上位者の材料に人間を使っている。ということはあの艦娘たちは上位者の材料なのか。確かにあれだけの量居れば上位者を作るのには十分だ。となればもしかして秘密の空間への入り口もまさかここに……？

「あ、あった。」

あった。牢の一番端っこに穴が開いている。中は真っ暗で全く分からないが地下へ梯子が伸びている。今行ってもいいがひとまず、戦利品として本を何冊か持っていこう。

夢にあの４人はいなかった。彼に尋ねるとついさっきまた出かけて行ったそうだ。仕方がないので彼と一緒にまとう。彼はいつも夢

の中を散歩したり、時には自分でお茶を入れたりする。今回も彼に付き合って花園で2人でお茶を飲んでのんびりと待っていた。
お茶を飲み終わり小説を読んでいると、聞きなれた声が向こうから聞こえてきた。4人は少し疲れている様子だった。それに装備もそれぞれ変えていた。
「あ、ヨアケさん。」
「順調かしら？」
「それがね、あの3人がなかなか倒せないの。」
「何回やっても死んでしまうのです…」
「3人？ああ、ビルゲンワースの前の、でも4人で行けば楽じゃないの？」
「4人でいるときは楽なんだけど一人でもやられるとね。」
「…じゃあ、一人一人が強くなるしかないわね、後はそこにある障害物も利用しなさい。あ、そうだ。今日は面白いもの見つけてきたのよ。」
「どんなの？」
「ほらこれ。庁舎の中から見つけてきたわ。」
「何これ？」
「読んでみて。」
「上位者…材料に人間!?」
「え、何それ不気味ー！」
「上位者って誰なのです？」
「さあ？」
「え、上位者知らない？」
「じょういしゃっていう人に会ったことはないわ。」
「…ほら、あれよ。庁舎にしがみついていた奴がいたでしょう。あれ上位者よ。アメンドーズって言うの。」
「ああ、あれ上位者なの？え、じゃああれって人間からできてるの…？」
「いや、あれは違うわ。あれは外から来たのよ……ってこの本から書いてた。」

「それも鎮守府から見つけたやつかい？」
「いや、これはビルゲンワースで見つけた物よ。」
「ビルゲンワース？」
「それは今はいいわ。これで鎮守府内にこっちの世界の人が紛れ込んでいる可能性が出たわ。面白いことになりそうよ。私はもう少し探ってみるからあなた達も頑張りなさい。最後はあなた達も呼ぶから。」
「はーい！」

第19話

彼女は考えていた。牢で見つけたメンシス学派の本もそうだが、艦娘たちの様子が明らかにおかしい。先日まであの4人と一緒に過ごしていたはずだ。それに前日の昼間も人形っぽさはまるでなかった。訓練されているというならそれでしまいだが、となれば昨晩のあの見張りが不自然だ。あの4人の様子を見れば少人数のグループであれば私語があるはずだがあの二人にはそれがなかった。しかし考えたところで行きつく先はただ不自然だということ。大体、結論を出す目的がなかった。

持ってきた数冊の本はどれも上位者の作り方について書かれていて、うち一冊は手記であったが中身が英語だったのであっちで書かれたものではない。中身も特筆するようなことではなかった。この本の中身で何か進展したことはなかった。むしろ〝あった〟ということが進展だ。

暁を見て久々に思い出したレディというものを意識しながら彼女は紅茶を一口飲む。彼が本を欲してきたので一冊渡した。が、数ページめくるとすぐに返してしまった。彼は聡明ではあるがこうした考え事は得意ではない。上位者なんてのはただ狩る対象でしかないのだ。彼女も小説は好きであるがレシピを見たって何の面白みもない。それでも嫌も押し込んで読んでみたがそうやって読んだものが頭に入るはずがない。というか内容は前に読んだものと一緒だ。彼女はペッ、と本を机の上に投げ出した。ぐぐっ、と背を伸ばして右を向いた。花園を囲う柵その先。霧ががった下界から天に向かって幾本も突き出す黒い柱。一度もあれを気にしたことはないがいざ意識して思うとアレは何だろうと思う。しかしアレは何か、と彼に問うても首を横に振るだけ。周りは知らないことばかりだ。

百聞は一見に如かずという言葉がある。簡単に言って見たほうが早いという意、こうやって分かりもしないレシピやどこぞの誰が書いたか知らない日記を読んであれこれ考えるよりあの梯子の下を見るほうが早いだろう。思い立ったが吉日、さっそく例の場所に向かう。

相変わらず陰気な場所だ。牢だからそれは当たり前だが、そういえば牢を庁舎内にそれも地上階に作るというのは珍しいと思う。普通は別に建てるか、庁舎内でも地下に作るもんだと思うが、それもこの梯子を隠すためだったりするだろうか。しかしまあ、初めてここに来たときはこの梯子に気づかなかったんだが…。

この梯子の下から何かを感じることはない。何かいるなら何かしらの気配を感じるはずだが、とりあえず降りてみる。下は相当深いようで真っ暗だし、降りるまでかなりかかりそうだ。最初は少し警戒しながらゆっくり降りて行ったがだんだん面倒になってきたのですー、と滑り降りていく。滑り降りたとき足元でカツン、となった。松明で足元を照らすとどうやらコンクリートらしい。勝手にヤーナム基準で水浸しのよくわからない石材とか思っていたがこういうところはさすが現代といったところか。近くの壁を照らしていくと、壁もコンクリートのようだ。そのまま松明の持つ手を滑らしここならあるはずのものを探す。

「……あった。」

スイッチ、恐らく照明。そのスイッチを上にあげると少しのラグとともに一斉に照明がつく。思ったよりもずっと広い。庁舎が丸々入るんじゃないかと思うほどだ。こんなにも広いせいだ、彼女が歩くたびカツーン、カツーンと大げさに反響する。やがては時まで歩いたとき、そこには大きめのプールがあった。学校よりも大きめ、競技で使うようなプールが四角形のこのスペースから突き出すように作られている。と、彼女は跪いてそのプールの水を舐めた。しょっぱい、ということはコレは海水でこのプールは海とつながっているのか。

こんなものか、何か怪しいものがあるわけでもない。この空間自体怪しいがそれ以外には何もない。入り口が梯子で、牢にあるということだけが違和感だが、少し拍子抜けした気分で戻る。ドッグに戻ろうとしたときかすかだが声が聞こえてきた。

「道具はちゃんと持ったか？」

「はい。忘れ物はありません。」

「よしじゃあ行くぞ。」

エンジン音も聞こえてきた。ゆっくりと扉を引いて隙間から覗く。ボートに何人か人影が見える。あれは夕張と提督だ。あとは数人艦娘が乗っている。外はもう夜のようだがこんな時間に提督まで同伴でどこに行くつもりか。ついていきたいところだがさすがに潜り込むのは難しそうだし、追い付くこともできない。何か持っているだろうかと思ったが何も持っていない。道具、というのはすでに積み込まれたのか。今回はおとなしく帰ろう。

夢に戻った彼女はその場で空を仰いだ。

「何もなかったなぁ…」

今のところ詰み状態だ。これがゲームなら攻略サイトの一つでも開きたいところだが生憎これはゲームじゃない。うんうんと悩んでも何も出てこない。すると、彼が彼女のところまであるいてきて頭を撫でた。

「…そうねこのまま考えてたって何もないんだったらしょうがないわよね。ありがとう狩人様、少し気分転換に行ってくるわ。」

大聖堂によく似た、しかしどこか違う場所。右側の扉の先はこんな道だっただろうか、左側には扉があったはずでは。真ん中の扉は空いている。その先の風景は知っていたものと少し違う。聖堂街全体に植物の根が全体に絡みついたような風景。ここは狩人の悪夢、曰く血に酔った狩人の行き付く先だとか。彼女にはちょうどいい場所だ。ここには獣のほか血に酔った狩人どもが目に映るすべてを狩りつくす。コツコツと一人階段を上る先に一人に狩人が佇む。彼女を視認すると持っている獣肉断ちを担ぎ彼女を迎え撃つ。

奴は鉈状だったそれを鞭のように伸ばしてきた。彼女は下をかいくぐって回避して後ろにつく。鉈を振りかざすが奴は振り返りながら獣肉断ちで彼女を断ち切らんとする。すでに鉈を振っていた彼女は今から回避することができずとっさに鉈と銃で受ける。固くしなった獣肉断ちを受けた彼女は吹き飛び壁に打ち付けられる。すかさず奴がまた襲い掛かる。さっきと同じ大振りしゃがんでも単純に

飛んでも当たりそうなその攻撃に、彼女は鉈の振り上げてはじき返す。獣肉断ちは上へ跳ね上がりノコギリ鉈は左下に打ち付けられる。その合間に互いが銃を撃つ。一発ずつもらった。

大きな得物が打ちあがった奴と小さめの得物が地面に打ち付けられた彼女なら、彼女のほうが動けるのは早い。奴が動けないうちに距離を縮める。しかし奴も腐っても狩人、人間とは思えないほどの筋力で振り下ろす。だが、彼女もまるで人間ではないのだから行動早い。さっきまでノコギリ鉈が握られていた右手には今なにもない。彼女の右手が奴の腹に深々突き刺さる。手に触ったものすべてを絡めつかみ引きずり出した。内臓とともに大量の血が彼女にかかる。

奴は腕を上げたまま固まっていた。彼女が体を蹴ったことで背中から倒れる。ふう、と息を一つ吐いて空を仰ぐ。空は明るい、悪夢と言うには少し明るすぎる気がする。

「……どこ、ここ何処よ…？」

「あそこっぽいよね。」

「でもこれ何なのです？」

「木の根っこじゃない？」

何か聞き覚えのある声がする。おどろいて横を向くと残念ながら根っこのようなものが邪魔をして見えない。渋々階段を降りていくと、だんだん姿が見えてきた。あの４人じゃないか。どうしてここにいるんだ。

「あ、ヨアケさん！」

「…なんでここにいるのよ。」

「暁が急に空中に浮いたかと思ったら消えちゃったんだ。」

「だから私達も急いであとを追ったのよ。」

「急に走り出したかと思ったら空中に浮かれたのでびっくりしたのです…。」

なるほど、理由はわかった。さては服に釣られたな。

「…釣られたのね。」

「つ、釣られてないわよ！」

「そういう事にしてあげるわ。」

「あのぉ、ここはどこなのです？」
「ん、ここは狩人の悪夢よ。あんまりここに来るべきではないわね。」
「え、何か呪われるとか？」
「敵がとても強いから。油断すると私でも余裕で死ぬわ。」
「そっちー…？」
「でもヨアケさんがそう言うなら相当だね。」
「そうよ、別にここで狩りをしてもいいけど死ぬばっかりじゃ意味ないから戻りましょうねぇ。」
彼女は半分追い返すように４人の背中を押して帰る。
「そういやどうして聖堂街にいたの？森の方にいたはずでしょ。」
「えっと、あの３人を倒して、なんかでっかい芋虫も倒したわ！」
「…上位者を倒したのね。」
「そしたらなんか月が赤くなってね、なんか変な雰囲気だったから助けた人大丈夫かなって、だから聖堂街まで戻ったの。」
「なるほどね。」
「ヨアケさんはどうしてここに？」
「行き詰っちゃってね。牢に地下に入る梯子があったから降りてみたんだけど特に何もなくて。」
「……あ、私たちそろそろ戻らないといけないんじゃ？」
「え、あれから何日経った？」
「待ってね…あー、２日か３日ぐらい？」
「もらった非番が終わってしまうのです！」
「やばい、戻らなきゃ!?」
４人はばたばたと走り去っていく。彼女もなんとなくついていった。そういえば４人はあの艦娘たちとは全然違うな。なんでだろう。４人がこっちに来た時に一気に変わったのか、いやでもそんな一気に変わるのか。そもそも何をしたらあんなに機械みたいになるんだ。
部屋に入った時外は夜だった。廊下に出て外を見るとそそくさと走っていく４人が見えた。
「なーんなのかしらねぇ。」

「何がです？」
…鳴子か。もう流石に慣れた。
「…いや、あの４人は違うなぁ、と。」
「それはどういう？」
「先日に侵入したんですけどほとんどの艦娘がなんか様子がおかしかったんですよね。なんというか人形っぽいというか…。」
「…ずっとそうでしたよ？」
「え？」
「一部の艦娘を除いてずっと、外から来た娘も次の日にはもうあんな感じです。」
「…なんで気づかなかったんだろう。」
「意識障害みたいな何かでもかけられてたんじゃないですか。」
「まさかそんなものが……もしかして…いややっぱりそんなことないかしら？」
「心当たりが？」
「まぁ、私にまでかかるほどなので逆にすぐに分かりましたけど、ちょっと現実的ではないんですよね。」
「そうですか。暁さんはそうであることを願っていますか？」
「…そうですね。そうであれば対応は楽ですから。」
「じゃあ私は暁さんの思い通りになることを願っています。」
気配が消えた。振り返るともう誰もいなかった。まるで最初からいなかったように、彼女が最初から虚空と話していたかのように。
翌朝だった。どう動こうかと考えていると、ノックもなしに誰か入ってきた。その前から大声で彼女の名前を呼びながら上がってきたので誰かは分かるが。
「ヨアケさん！」
「…なあに？」
「みんなの様子がおかしいのです！」
おや、どうやらこの４人も違和感を覚えたらしい。
「なに、まるで人形みたいって？」
「そう！みんな人形みたいに…って、あれ？」

「知ってたの？」
「知ってたわよ…ずっと前から。」
「すごーい！さすがヨアケさん！」
なんだろう、この気持ちは。遠い昔に捨てた罪悪感と似ている気がするが、これはきっと気のせいだろう。
「でもどうしてなんだろう？」
「ヤーナムに行く前はみんな普通だったのです。」
「多分、それはあなた達が狩人になったからよ。何らかの意識障害が狩人になったことで解かれたの。」
「何らかのって？」
「恐らくは…ビルゲンワースの湖にいた芋虫は覚えてるかしら？」
「うん。」
「あれはロマという蜘蛛の上位者よ。」
「え、あれ蜘蛛だったの…？」
「そういや足がたくさんあったね。」
「頭しか印象に残ってないわ。」
「…でね、ヤーナムではロマがいろいろなものを隠していたの。例えばそう…あの赤い月とかね。」
「じゃあもしかしてそのロマっていう上位者がここにも居るのですか？」
「それは分からない。私は異変には気づいたけどロマがいる痕跡は見つけてないわ。でもアメンドーズがいるならもしかしたら…」
「つまり、ロマを倒したらみんな戻るのね！」
「いや、違うと思うよ。」
「ともかく、私たちはロマを探せばいいのね。」
「いるとは断言できないわよ。」
「でもいるかもしれないんでしょう？いなかったらまた考えればいいのよ！」
「…じゃあ、お願いできるかしら。」
「はーい！」
４人がまたばたばたと去っていく。あの娘たちも数日の間ですっ

かり狩人だ。普通この短時間で上位者を探し出そうなんて結論は出せない。もしかしたら自分よりも才能があるかもしれない。暁には少しひいきでちょっとした英才教育もしているからそれもあるかもしれない。そうだ今度また上位者の知恵を櫃あげよう。

それにしても、そうか、ロマか…ここまでくると怪しいのは奴しかいないな…やっぱりつける必要があるな。

第20話

現在夜の約１０時、彼女は庁舎の茂みに潜んでいた。視界から玄関が見える。先程残業まみれだったらしい提督が玄関を左から右へ横切るのをみた。取り出したのは青い秘薬。これで玄関を通る。例のごとくお人形さんな艦娘が見張っているが、わざわざ置いてあるぐらいだ、正面から来たものには反応できるのだろう。秘薬を飲んだ状態では単純な動きしかできないから、とりあえず玄関を過ぎるところまで……

意識が戻ったとき丁度角を曲がる奴が見えた。足音を立てないように歩いて壁につく。予想だと、奴はあの部屋に入るはずだが……入った。跡をつけて例の部屋の前まで来る。念の為聞き耳をしたが、扉の前に誰かが立っているなんてことはない。

入ると、そこには誰もいなかった。だからあのはしごの下を覗いた。明かりだ、明かりがついている。降りたか、しかし不用意に自分も降りると面倒になりそうだ。

本来、彼女の目的は満足すること。故に今やっている事は全て彼女の興味から来ているものだ。その興味とは、即ち上位者。大体、この鎮守府はおかしい。なぜアメンドーズがいる。この世界はヤーナムや血の医療とは全くの無関係だ。しかし、実際にここにいる、ずっといる。さらに彼女すら気づけなかった異変。狩人が気づけない、それ即ち上位者の仕業だろう。果たしてそれがアメンドーズによるものか、ロマ…もしくはまた別の上位者か。どっちみち上位者は狩る。あとあの提督は怪しい。現にこうやって梯子の下にいるわけだし、メンシス学派の本だっておいていた。まさかとは思うがあの男、メンシス学派か？

「…ァぁ……」

「…？」

何か聞こえた。

「あああァァああ――――」

うめき声、どこかで聞いたことがある。聞き取ろうと思えば思うほ

どその声はどんどん不明瞭になっていく。……ああ、思い出した。あれはいつしか彼女の戦力テストに使った……

「…は？」

思わず声が出てしまった。今下で使われているのはいつしか試験的に使用した深海棲艦をおびき寄せる装置だ。なぜ鎮守府の地下でそれを使っているんだ。一体なんの目的で。

鎮守府に深海棲艦が押し寄せるかと思ったがそれから少し経ってもそんな気配は全くしない。こうして待っている間も声はずっと聞こえてきている。だがあれはもはや声とは言い難く、音といったほうがまだあっているだろう。何かの音、しかしそれを説明するのに適切なものが浮かばない。深海棲艦というのはどうも理解しがたい。ああやってわけもわからず奇声を発するものもいれば、たどたどしいが言語を発する者もいる。そういうやつはイ級やロ級が出している声を理解しているのだろうか。もしかしたら人間が動物を使役するのと同じ感じなのかもしれない。

…また余計に色々考えてしまった。最近癖づいている。要はあの男があの装置を使ってこの下で何かをしている、それだけだ。問題はその何かなのだが。

不気味な声をひたすらに聞いていたがだんだん、小さくなっていく。久々の変化に感覚を研ぎ澄ませるが聞こえてきたのははしごを登る音、しまった。奴が戻ってくる。

彼女はドッグへ向かう扉の向こうに隠れた。登りきる音、ドアを開ける音がする。しかし開けたのは彼女が居るほうではない、庁舎へ戻るドア。少しだけ開けて誰もいないことを確認すると梯子に手をかけて降りていく。

降りてから前回と同じように電気をつける。と、底には予想外の光景があった。何もない、前に彼女がこの場にやってきたのと同じように何もない空間が広がっている。少なくとも奴が上ってくる少し前まで確実に深海棲艦の声がしていた。あの短時間で何の痕跡も残さずに上ってくるのは不可能だと思うが…まさかあの装置を起動しただけで何もしていないなんてことはない。そっちのほうが意味不明

だ。じゃあ結局奴がここで何をしていたのかということだが、上位者が隠してる…という考えは一度捨てよう。そう考えると何でもかんでも上位者のせいにして何も解決しなさそうだ。しかし、こうも何もないのではどうにもできない。せいぜいあの男が何かしら関与しているということが分かったぐらい……帰るか。

どこか無駄な時間を過ごした気がする今宵。これ以上自分で何か見つけることは無理かもしれない。あの４人から何か報告があるまではまたここでおとなしくしていようか。飽きたと思っていたここの風景もしばらくぶりに戻ると少し新鮮味を感じる。冷蔵庫にはあのときもらった蜂蜜酒がまだ結構残っている。せっかくなので蓋代わりのグラスで1杯。あぁ、酒を飲み物として飲んだのはこれが最初だったが酒に魅了されているようだ。今ならヤーナムの酒も行ける気がする。今まで投げつける以外にしたことがなかったが、そうだ、自分は狩人だ。血によった狩人。ならばこの酒だって行けるはずだ。そう思って勢いに任せて1杯。

「…あぁ。」

こりゃあいい。なんたって香りがいいんだ。濃厚なほどに、少し下品とも言えるほどの濃厚さ。狩りをするのには向いてないがこれは酔うのに丁度いい。蜂蜜酒は美味いが、この1本しかない。ヤーナムの酒で十分なら今夜はこの移ろいゆく月を見ながら過ごそうじゃないか。

さてさて、そろそろ月も水平線近くなってきた頃。瓶をあおって飲むのもそれはそれでいいが、やはり彼女的にはグラスで飲むのが好みなようで……いや、そんなことはどうでもいい、重要なことじゃない。月を眺めているとけたたましい喇叭が鳴り響く。時計を見ると確かに起床時間っぽいが月はまだ空の上、なるほどそういう季節か。それはそうとヤーナムのどこに行けばグラスが置いてあるだろうかと考えているとノックもなしに入ってくる誰か。振り返ると暁たちがそこにいた。

「あら、はやいわね。起床時間さっきでしょ？」

「何言ってるの？起床時間は1時間前よ？」
「あら？」
確かに1時間すぎている…グラスのことを考えていただけで1時間経ってしまっていたらしい。はてさて、酔いというのは時間の感覚を曖昧にさせてしまう。
「…あー、で？どうしたの？」
「あ、あのね！上位者っぽいもの見つけたの！」
「本当？」
「本当よ、本当！」
予想外の言葉に響の方を見るが響も頷いているので、暁の妄言ではないらしい。
「どこで？」
「ここの反対側よ。講堂からもっと向こう。旧ドッグの中にそれっぽいのがあったの。」
反対側か。彼女はずっとこっち側しか探索していなかったのでそりゃあ見つからないわけだ。そうか、そういえばこの鎮守府は孤島だったか。
「なるほど。そういえば旧ドッグなんてあったのね。」
「元々ここは飛び地で挟撃をするために無理やり作られたところなの。」
「今はもう前線が違うから使ってないわ。一度に2隻までしか出撃できないし。」
「ふーん、じゃあちょっと私も様子見に行くわ。」
4人に案内されてその、旧ドッグまで行った。少し大きめの建物、その中に入ると確かに海面がビルゲンワースの湖みたいに白く光っている。
「確かにいそうね。じゃあ行こうかしら。」
「え、もう？」
「何もなかったから、もう上位者ぐらいしか疑う要因ないの。大体私そんな考えるの好きじゃないし、これでどうにかなるならそれがいいわ。」

飛び込むと海水に濡れることなく新たな湖が広がっていた。そしてあの蜘蛛も。
「…一緒ね。」
４人も彼女の後すぐに落ちてきた。
「一緒だね。」
「そうね、さあ、さっさとやりましょう。取り巻きはお願いするわ。」
ロマは一人だと苦労するが複数人だと全く苦労はしない。厄介なのは取り巻きの子蜘蛛でそれさえいなければ全く強くない。雷を纏わせてずっと殴ってればなんとかなる。
「はい、おしまい。」
ロマが消滅し間もなく子蜘蛛も消えた。すると何か聞こえ始めた。それはだんだんと大きくなり聞こえる全てがその何か、うめき声に変わっていく。瞬きをすると光景が一変し、旧ドッグに戻ってきた。
「あれ、戻ってきた？」
「う、まだあの声が残ってる…」
彼女は４人をおいて空の様子を見に行った。やはり月が赤い。何か、変わったらしい。そして、あのうめき声、深海棲艦だ。
「わぁ、月が赤い！」
暁がたったったっと走ってやってきた。その後ろから響が雷と電に支えられながら近づいてきた。雷電コンビは顔色も大丈夫そうだが、響の顔がまだグロッキーだ。暁は満面の笑顔だが。
「行ってみましょうか。何か変わっているかも。」
目指すはあの地下空間。ロマが何か隠していたというなら、今ならそこに何かがあるだろう。月が赤く変わったせいか周りの雰囲気が不気味に感じる。
「どこに行くの？」
「地下。」
「地下ならあっちだけど？」
暁が指すのは彼女が目指す方向とは明後日の方向だ。しかも、あの地下空間は彼女が覚えている限り梯子以外の出入り口はなかったはずだ。

「あっち？」
「うん。地下でしょ？」
なんだか情報の齟齬がありそうだがとりあえずついていってみる。
そこにあるのは狭そうな平小屋。中は下に続く階段があるだけで、そこを降りていくと真っ暗な空間が広がっていた。暁が電気をつけてくれると、いくつかの牢屋があった。
「…ここは？」
「牢だけど？」
「違反者が入るやつ？」
「そう…だけど？」
「庁舎のじゃなくて？」
「え？あそこにはないけど？」
「右奥のやつよ…しらないの？」
「あそこはいっつも鍵が閉まってるから…。」
「……なるほど。分かった、行きましょう。」
「もういいの？」
「ええ。」
階段を上ると、響が壁にもたれて座っていた。
「大丈夫？」
「まだ吐き気がするよ…みんなはよく平気だね。」
「まぁ、すぐに聞こえなくなったし。」
「聞こえなくなったら平気なのです。」
響が復活できるまで待っておこうと思っていると、遠くから誰か近づいてくる。多分こんな夜中に何をしているのか聞かれるんだろう。どう言い訳をしたものかと思ったが、何やらやけに遅い。それに歩き方もおかしい。
「……」
「どうかしたの？」
「いや、あっちから誰か来てるんだけどなんかおかしいなって。」
「あれはたぶん川内さ…ん？」
暁が言うにはあれは川内らしいが…いやあれは絶対違うぞ。服こ

そ確かにそうだがそこから見える本来人の形をしているものが違う。その顔は川内の顔どころがもはや人間の顔すらしていない。腐りかけていている。

「…あれが隠されていたものかしらね。」

「え、あ、あれどうするの？」

「もちろん狩る。」

相手はゆっくりゆっくり近づいてくる。こちらも武器を手にして待ち構える。相手は何も持っていないようで両手を前にかざしている。どういう攻撃をしてくるかと思ったが一定距離になると飛びついてきた。回避は簡単だし、顔同様手足まで腐りかけているのか起き上がるのにも苦労しているようだ。

「…ねえ、これ頼んでもいい？わたしは、あそこ行きたいから。」

「え、あ、うん。」

「もし追い付くんなら、庁舎の玄関から一番右奥の中にある梯子の下にいるから。」

「わ、分かった…。」

彼女は４人を置いて一人庁舎に入る。電気は付きっぱなしだが誰一人いないそのまま例の部屋を目指すと廊下の真ん中に誰かいる。

「あ…」

「……吹雪。」

「久しぶりだね。」

「どうしたのこんなところで。」

「それはこっちも一緒だよ。」

「それもそうね。じゃあ悪いんだけどそこを通してもらえない？」

「…ごめんね、それはできないの。提督に言われてるから。だから帰ってくれないかな？」

「嫌だって言ったら？」

吹雪は艤装を付けたまま立っていた。そして手に持っていた連装砲を彼女に向けた。

「ごめんね。本当にごめんね。なんでかは分からないけど提督に言われたから…」

「心配しなくていいわ。無理にでも通るから。」
仕方がない、とつぶやきながら一歩踏み出そうとしたその時、あろうことか吹雪は屋内で撃った。威嚇のつもりだったか彼女自身ではなく足元に撃った。それでも大きな爆発は一発で建物を無残にし、壁や天井が崩れ二階まで見えた。
「…本気みたいね。」
「私だって本当はこんなことしたくないの。でも提督からの命令だから…」
さっきの川内もどきは恐らくロマが居なくなったから本当の姿が云々のせいだと思うが、吹雪は違うのか。
「いいえ。気にしなくてもいいわ。やることは変わらないもの。」
さっきと同じように一歩踏み出す。当然吹雪もまた撃ってくる。次はあててくるかと思ったが砲口からまた威嚇だと判断した。横にずれて砲撃で崩れた部屋に逃げる。艦砲は強力だが、そのせいで煙がひどい。そのすきに距離を縮める。煙を抜けたところでちょうど吹雪の目の前になった。吹雪はぎょっとしたがそれでも彼女に砲口を向けた。これは逆に彼女をぎょっとさせたが体をひねり射線上からずれる。瞬間彼女の体をかすめ部屋がまた爆発した。そしてその爆発と吹雪の首が跳ねたのはほぼ同時だった。首の切り口から血がどぼどぼ流れ出る。部屋の隅に転がった吹雪の首には彼女と最後に目が合った時の驚きの顔があったままだった。
彼女は転がった吹雪の首を一瞥に歩いて例の部屋へ向かう。やはりカギがかかってるか。鍵など持っているはずがないので鍵の横とドアノブの横を撃ち抜きドアをけり開ける。そのまま梯子を下りていく。部屋に入った時にから急に聞こえてきたうめき声は、降りるたびにさらに大きくなっていく。降りた先はすでに電気がついていて、とんでもないほどの気配があった。降り切って振り返るとそこにはあの男とその後ろになんとも形容しがたい真っ黒な異形がいた。

第21話

「やあ…待ってたよ。」
「あらそう。」
「なんだ、そっけないね。」
「予想はできたわ。にしても趣味悪いわね、その服。」
「趣味が悪いとは何だい、正装だよ。それを言うなら、僕はそっちのほうが趣味が悪いと言えるね。」
「物は言いようね……ああ、なんか見覚えがあると思ったけどあなたドリームランドにいたでしょう。」
「ドリームランド？」
「あなた一回ぐらい変な森にいたことはない？そこで獣まで呼び出しやがって。」
「…ああ、一度夢に見たね。好きに行動できたから夢だとは気づかなかったけど後々気づいたよ。」
「あなたね、むやみやたらに獣の病をふりまかないでくれる。」
「なんだい、あそこは実在していたのか？それならもう一度行きたいね。あそこなら研究がはかどりそうだ。それに君だって狩りができるんなら本望だろう？」
「…はぁ。で、その後ろのは何。」
「ははは！よくぞ聞いてくれたね。これこそ僕が作成した上位者さ！……君たち狩人は獣じゃ飽き足らずあろうことか上位者まで狩り始めた。いったいどれだけの上位者が犠牲になったと思う。なんとかミコラーシュ様は悪夢を作り出し、そこで研究を進めることができた。僕もこの世界で独自に研究をすすめ、やっと作ることができた。まあね、だから君がやってきたときは正直驚いたさ。赤城から送られてきた写真でピンときたさ。君が狩人だってね。僕は慌てて準備したさ。アメンドーズやロマに隠してもらった。だが、アメンドーズに関しては逆に君に感づかせてしまったかもね。しかしまぁ…あれだね。ロマまで…きっとあの副産物たちにも気づいただろう。あれも一緒に送るつもりだ。ああ、ミコラーシュ様…待っていてください

…」
「…長い自分語りお疲れ様。いくつか言っておくわね。上位者狩りをしてるのは…まあ成り行きよ。でもまあ最近は楽しんでたわね。だから今までやってきた探偵ごっこもこれのため。楽しかったわ。でも責められるのは困るわ。そんなこと言ったらあなた達だって上位者を作るために市民を材料にしたじゃない。まぁもとはと言えばビルゲンワースの連中のせいだけどね。あ、あとミコラーシュなら私が殺したわよ。」
「は…？・き、君はいま、なんといった？」
「だから、ミコラーシュなら私が前に殺したし、上にいた上位者だって狩ったわ。」
まぁ、一度夢に戻ればなぜか復活するのだが。だからいまヤーナムに戻ればまたいるだろう。
「…き、君はなんてことをしてくれたんだ…そ、そんなミコラーシュ様…そ、そうだ、僕、僕だけでも…そうだ、そうだよ。なんてすばらしいことなんだ…自分で作った上位者でミコラーシュ様の願いが叶うかもしれないんだ。」
「ま、というわけでそいつ狩るからってなにしてるの？」
「やるぞ…！・僕はやるぞ！・僕だけでもやるんだ！・僕だけでも瞳を見出して見せる！・さあ、深海の深淵よ僕に瞳を分け与えたまえ！」
奴は後ろの異形に呼びかけ手を広げた。異形は奴の言葉に反応したのかもぞもぞと動き始める。ところどころ深海棲艦の一部が見えるので、あれは深海棲艦を材料に作られたのだろう。その中ではっきりと頭を残している部分の口が開き中から人間の上半身のような骨格が出てきた。それは奴の頭をつかみにらみ合う。やがて奴は耳から血を流し始めたかと思うと頭がはじけ飛んだ。頭を失った奴は糸が切れた操り人形のように崩れ落ちた。彼女はその様子をずっと黙って見ていた。

ああ、汝、汝よ。なんと醜い姿だろうか。そのような姿では何もできまい。死すら与えられないのだろう？死は解放であるか？否、死とは次へ進むための段階に過ぎない。だが、それはとても重要なことなのだ。多くの存在は死を乗り越えることができないのだから。上位者になりたければまずは死を乗り越えよ。

「…深海の深淵ねぇ。微妙な名前ね。さて、深海の深淵とやら。私はあなたを狩るわ。」

『そなたが狩人であるか。』

「あらそうよ。話が分かるのね。」

『我は知っておる。我は上位者という存在である。たとえ低俗なものに生み出されようともそやつに好きにされることは許されぬ。そなたはそこの低俗とは違うな。だが我らに届くこともない。』

「…ええ、そうね。でも私はあなたたち上位者を狩る、上位者狩りの狩人よ……汝、死に興味はないかな？」

『死とな。そなた我らに死を与えられると思っているのか？』

「狩人とはそういう存在である。もはや狩るものは獣だけではない。青ざめた血を求めよ。狩りを全うするために。求めよ、求めよ、青ざめた血を、上位者の血を。そのためならば獣狩りも上位者狩りも、狩人狩りも行うのだ。」

『そなた、本当に我らに死を与えられるとでも？』

「試してみるか？」

『いいだろう。我らはそなたをとことん利用したい。人が人ならざる者に変化した存在、とくと興味がある。』

「狩人は狩るだけ。ただ狩るだけ。狩るためならば上位者の知恵すらむさぼりつくす。」

深海棲艦の残骸がつながってできた触腕が上から降りかかってくる。彼女は避けたが先ほど頭がはじけ飛んだ奴の残骸は押しつぶされた。どかされた地面には無残に押しつぶされたはずの残骸はなく、その触腕に引っ付いて触腕ごと内部に収められた。

『ああ、こいつには脳がなくなってしまったな。取り込んでも意味

がない。そなたの脳を見てみたい。』
「私は汝の素材が欲しい。汝からはどんな聖杯ができるかとても気になる。」
『そなたは今でも墓荒らしをするのか？』
「墓荒らしとは人聞きの悪い。探索と言ってくれたまえ。」
団子上の異形の端からにゅっと何か伸びてきた。深海棲艦によく見る歯のついた大きな艤装、つまりは砲。彼女が見たことない形をしている。確実に撃ってくる、それはわかるが口径が分からないのでどれほどの範囲があるのかわからない。大体こういう時は近づけばいい。狩りの基本だ。
撃った。コンクリートの地面は無残に砕け散っている。多分重巡かそれに近いぐらいの砲だ。爆風は当然届きはしない。だが、回避のために異形に近づくと、異形は体からいくつもさっきと同じものを生やした。それはあっという間に彼女を囲うように広がった。躱せない、そう悟った瞬間、目の前に閃光が走った。

「…軽率だったわね。」
つい癖で相手に近づいて回避しようとしてしまった。まさか全体から生えるとは思わなかった。久々に死んだ。あの部屋に戻ってきたらしい。
「あーあ、かっこつけるもんじゃないわ。」
ドアを開けると廊下を赤い光がほんのり照らしている。鳴子も真っ赤な月を眺めていた。
「あ、どうも。」
「あ、暁さん。見てくださいよ。珍しいですね、この世界でもあんなに真っ赤になることなんてあるんですね。」
「あ、まあ、そうですね。すみません急いでるんで。」
「そうですか。じゃあまたあとで……おもしろいなぁ人間って、あんなのつくっちゃうんだねぇ。」
外に出るとそこらにあの人間もどきが歩き回っている。
「そういえばあんな奴いたわ。面倒ね、突っ切ろうかしら。」

突っ切ろうと走り出すと遠くから爆発音が聞こえた。その音に人間もどきは反応する様子はない。彼女もそれに付き合おうとは思っていない。
戻ってきた。異形はまだそこにいる。
『戻ってきたのか。殺したはずだが、消えてしまったから不思議に思ったが…』
「狩人だから。さ、続きよ。」
ノコギリ鉈片手に突っ込む。生えた砲塔からの砲撃を避けて切りかける。刃は簡単に入り振りぬくと体の一部が飛び散っていく。青い体液も飛び散りそこから重油の匂いが漂っていく。まだ全然届いてない。異形の体はそのすべての面が正面ですべての面から砲塔が触手のように伸び、ショットガンのように生え撃ってくる。彼女はその全てをよけ斬り、斬り、斬り、斬る。そしてスカッた。異形は彼女の視界から消え、そして彼女は死んだ。

「飛んだ。飛ぶのね、あの巨体で。」
廊下はまだ赤く光っていた。鳴子はまだ空を見ていた。
「あれ、いつの間に戻っていたんですか?」
「あ、いや、死んだだけです。」
「あーなるほど。よくわかりませんが、応援します。」
「ありがとうございます。」
外にはまだ人間もどきが歩いていて、爆発音も聞こえていた。彼女は気にも留めず走って戻っていった。
『まだ挑むか、狩人。そう何度も死んでは心が持たないぞ?』
「上位者に心配されるなんて光栄なことね。心配しないで。続きよ。」
同じように突っ込む。斬りつける。視界から消えた。上を見るとやはりあの異形が上にいる。バックステップで下がると彼女にいた場所に異形が落ちてきて、派手にコンクリートの破片が飛び散った。また斬って、避けて、避けて、斬って、斬って、囲まれて、死んだ。

廊下は赤く光っていた。鳴子は空を見ていた。人間もどきは歩いていた。彼女は走った。

斬り、避け、斬り、斬り、斬り、斬り、潰された。

廊下は赤く、空を見て、歩き、走る、斬る、避ける、死ぬ。

赤く見て歩いて走って斬って避けて死んで赤くて見た歩いた走った斬った避けた死んだ赤く見た歩き走って斬って死んで赤くて走って死んで赤くて死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで赤くて死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで

死んだ。

「」

響はいい妹だったと思う。クールで、よく私の暴走を止めてくれた。でも人と付き合うのが少し苦手で、実は甘えん坊で、私の暴走を止めるより、私に甘えてくるほうが多かった。

血なんて繋がっているはずがなかった。すべてが他人で、でも姉妹にならなくちゃいけなくて、響はそれが怖かった。だから私は形だけでもお姉ちゃんにならないといけなかったから頑張ってお姉ちゃんになった。ちゃんとお姉ちゃんだったかな？響は怖くなかったかな？

狂気って何だろう。狂う。狂うって言うのはずっと笑っているっていうこと？笑うしかないって言うじゃない。でも私は笑うしかないことなんてなかったわ。あの時だって死ぬんだってしか思わなかったわ。響のおなかには穴が開いちゃって、私が声をかけても何も言ってくれなくて、血がいっぱい出て、痛そうで、かわいそうだった。響が死んじゃったからとても寂しかった。寂しいのに痛くて響を見ることが出来なくて悲しかった。もっと響の顔を見ていたかった。でも気持ち悪くて、血を吐いて、起き上がれなくて、もう響の顔を見れなくなってとても悲しかったの。

狂気って言うのは分からないわ。

狩人は楽しいわ。最初は怖かったけど慣れたらそうでもなかったわ。最近はコピーも狩人になってくれたから退屈することもなさそうなの。ヤーナムはいい場所よ。あそこの人や狩人様にとっては日常かもしれないけど私にとっては観光地なの。あ、でも狩人様はヤーナム出身じゃないらしいの。どこかは聞けなかったけど今度聞いてみたいわ。

上位者って何なのかしら。よくわからないわ。気持ち悪い見た目して、ロマなんて蜘蛛?・芋虫?・だし。でも月の魔人は上位者っぽいかも。あれって宇宙人なんだっけ?・何か本で見たわ。でもメンシス学派は自分たちで上位者を作り出したのよね。あれってメンシス学派がおかしいのかしら、それとも上位者って実はそうでもないのかしら?悪夢の中に監禁されてたしやっぱりそうでもないのかもしれないわ。じゃあなんで私はあんな団子に苦戦しているのかしら。それは私があいつを見るのが初めてだからよ。それにあの団子は深海棲艦の集合体だもの。砲撃はどの上位者の攻撃よりも早いの。それにあいつの砲塔はどこまでも伸びるわ。瞬間火力にリーチまであったら苦戦するわ。でも私は挑み続けるの。狩人だから。たとえ死んでも挑み続けるわ。狩人になってしまった私にはそれしかないの。上位者になり切れなかった私には。人間を捨てきれなかった私には。

『そなた、よく飽きもせずに来るな。もう何度死んだ。いい加減知っただろう。所詮そなたは我には勝てん。』

「」

『…もう終わってるなそなたは。まるで生気が感じられん。我が言うのもなんだが生物とは思えんな。我の一部にしてやろう。そこまでさせるそなたの脳と瞳に興味がある。』

「」

触手が伸びてきた。先についている口は開かれておりその中に砲塔はない。彼女を捕まえるつもりだ。彼女はそれを切り捨てた…いや、これは囮だ。右側から伸びてきた触手に反応した瞬間左から数本間隔をあけて伸びてきた。右手では間に合わない。持ってきた大砲

で何とかする。昔のタイプの大砲だから破壊まではできないだろうが軌道をそらすことはできる。一本目は彼女に追いつく直前でそれた。そのすぐ後ろからもう数本襲ってくるが対応できるまでの時間は十分稼いだ。一本はよけ残りを切り捨てる。後ろから襲ってきた2本を切り捨てた。間髪入れず突撃する。ノコギリ鉈で斬るのはそのでかい図体、ではなく上半身の骨格。異形は

この骨格が目のような役割を果たしているらしい。今まで何度かこの部分をかばうような動作をしていたがやっぱりだ。ここを攻撃すると異形全体がのたうち回り骨格が内部に引き戻されダウンした。

ここ最近美しい狩りというのを意識してきた。狂気ながらもスタイリッシュに…なんてのはいいわけか。正直に言うと彼女は彼にあこがれてノコギリ鉈を使っていた。彼はノコギリ鉈で狩りをしていたといっていたから彼女もそれを真似したのだ。だが今回はそんな余裕はない。彼女はノコギリ鉈をしまい、もともと使っていた回転ノコギリを取り出した。先につけたノコギリは火花を出しながら回っている。彼女は構えて限界までノコギリを回して勢いよく振り下ろした。回転するノコギリに異形の体は無残に引きちぎられていく。何度も振りかざしては振り下ろし、振りかざしては振り下ろし、異形の青い体液がどれだけかかろうともその手をやめない。やがて体が異形で見えなくなってしまうんじゃないかというところで突然異形がはねた。彼女は飛びのき、異形が落ちてくる。今までに何度も異形がはねたせいですでにコンクリートの床はボロボロになっており小さく小さくなった破片が飛び散る。

上半身の骨格が再び生えそのポーズは彼女を指さすようだった。

『貴様、貴様よくも我を焦らせてくれたな。生まれてまだ日は浅いがよもや我のような存在が貴様如きにこんな感情を抱かさせられるとは到底思わなかったぞ。腹立たしいが感謝しよう。我にこのような感情を教えてくれたことを。腹立たしい、ああ腹立たしい。礼だ、後悔させてくれよう。

異形が骨格を収めて間もなくうごめきだした。そして黒い塊をいくつか飛ばしてきた。べちゃっと落ちてきた塊はもぞもぞとうごめ

くとだんだんその形は深海棲艦へと変わっていった。黒い塊は深海棲艦に代わるとすぐに彼女に向けて砲撃を開始した。それと同時に異形も攻撃を再開しだした。さっきと攻撃は変わらないが深海棲艦の砲撃が加わるだけでも十分脅威だ。せいぜい駆逐艦程度なのが幸いだがそれでも艦砲は脅威でしかない。ごり押しするわけにはいかないのでまずは深海棲艦の掃討を行う。もはや深海棲艦など彼女にとっては雑魚以下である。彼女は手際よく掃討していく。しかし、そのほとんどを倒したところで再び異形がうごめきだして黒い塊を飛ばしてくる。面倒なことをしてくれる。深海棲艦を飛ばし続けられるとジリ貧だ。黒い塊は異形から飛ばし続けられているのでこのまま塊を飛ばさせ続ければいずれ消えてなくなるかもしれないが大きさ的に現実的ではない。

……しかし、そうだな。観察してみるとたいしたことないな。骨格を収めてから塊を飛ばすまでの数秒間、異形はうごめく以外に何もできない。他の上位者や何なら獣よりも隙が大きい。所詮は、その下賤な存在に作られた偽りの上位者だからか。彼女はこれを好機とみて行動に移した。まずは同じように深海棲艦を殲滅してく。そして異形がまたうごめきだした。その瞬間彼女は動く。異形に向かい走り出し、異形にぶつかろうかと、そこまで近づいた瞬間勢いよく回転ノコギリを振り上げた。その瞬間何か体を引きちぎった感触とは違ったものを感じた。何か硬いものを砕いたような、そう思ったのもつかの間異形が震えだした。そして叫んだ。彼女は目の前に散らばったもので察した。小さな何かのかけらそして所々形か残った白い骨格。どうやらあの上半身を砕いてしまったらしい。きっと単純に攻撃した時よりもダウンが長いだろう。なにせ根元から砕いたようだからだ。回ったのこぎりは易々と異形の体を引きちぎっていく。深海棲艦にしては柔らかすぎる体を引きちぎっていくと、やがて彼女はその手を止めた。彼女の目の前には一つの箱が埋まっていた。両手で抱える程度の大きさの箱は金属質で中からうめき声が聞こえてくる。どこかで聞いた声、そう何時しかの試作兵器が発する、深海棲艦を引き付けるとかいう趣味の悪い兵器の発する声。

この事実に気づいたとたん彼女は瞬時にかつ単純な事柄に結び付けた。この箱が異形の核である、これを壊せば異形は死ぬ。彼女は躊躇なく回転ノコギリを振り下げた。ただでさえ火花を散らしているノコギリは箱に触れたとたんすさまじいほどの火花を散らす。しかし、その刃はなかなか進まない。５秒ほど押し付けたところで彼女はノコギリを上げた。箱には少し切れ目が入っているがこれではいつまた異形の骨格が復活するかわからない。と、彼女は回転ノコギリを収めあるものを取り出した。１２ｃｍ連装砲と６１ｃｍ三連装酸素魚雷、駆逐艦暁の艤装。もし使えるなら、と思い何周回かめに拝借したものだが、これならこの箱を破壊するのには十分だろう。いそいそと艤装を取り付け箱い構える。箱に向かって一発、轟音と爆風とともに箱には大きな穴が開いた。そこまで厚くないと思っていたが実際には相当な厚みがあったようだ。撃ったことで同時に周りの体も飛び散ったのだが彼女が見たのは箱の吐出した部分だったらしい。しまった、入っていた砲弾はさっき入っていた2発だけだったらしい。空いた穴を見ると中であの装置が浮いているのが見える。幸いにもまだ武器はある。この魚雷だ。砲弾よりもよっぽど威力が高い。だが魚雷を発射管から飛ばしてもあそこまでは届かない。届かないなら飛ばす。魚雷を投げて飛ばすだが、魚雷は重い。砲弾みたいに火薬だけが詰まっているわけではない。ならば力を借りるしかない。ゴースの寄生虫、これなら魚雷をもって飛ばすことぐらいできるだろう。

寄生虫のせいでもうろうとする意識の中魚雷を発射し、地面につく前につかむ…お、重い。これでもまだ重いか。だが投げることはできそうだ。最大限の力をもって魚雷を穴に投げ入れる。魚雷は見事穴に吸い込まれていき、その刹那爆発した。爆風が穴からこぼれだし彼女を吹き飛ばす。投げ出された彼女はまともな受け身をとることなく床を転がっていく。

寄生虫をはがした彼女は立ち上がり異形のほうを見た。しかし、そこには異形と呼べるものなどなく、黒い大きな水たまりの中に深海棲艦の破片が浮いているだけだった。

「…悲鳴も何にもないのね、狩りがいがないわ。」
なんというか、あっさり終わってしまった。何か派手に消えるわけでもなく狩った後に何かが変わるわけでもなく、核を失った異形は意識を失い、その体を保つことができなくなって材料に戻った。それだけだ。久々の静寂もつかの間、もはや用などない空間を彼女は静かに去っていく。

第22話

梯子を上りきるとまた何かの音が聞こえてきた。砲撃音、どうやらだれか戦っているらしい。その音をたどって発生源まで行くとそこには複数の人影がいた。あの４人が見える。４人が戦っているのは、あれは長門だ。長門があの４人に主砲を撃っているらしい。それに対し４人は避けてばかりのようだ。彼女は一番近かった響に声をかけた。

「ねえ、どういう状況？」

「あ、ヨアケさん。助けてくれ、急に長門さんが襲ってきたんだ。声をかけても聞いてくれなくて。」

「くそっ！すばしっこいな。やはり副砲で攻撃したほうがいいか。」

どうやら響の言うとおりらしい。吹雪と似たような状況だ。しかし、自分を攻撃するならまだしも４人を攻撃する理輔はよくわからない。しいて言うなら狩人だからだろうか。暁たちが攻撃される理由はそれしか思いつかない。

「ヨアケさん！」

「暁、大変そうね。」

「ど、どうしたらいいのかしら。長門さんが…」

「響から聞いたわ。狩りなさい。」

「え、か、狩るって長門さんを？」

「そうよ。きっともう長門はあなた達を敵としか見てないわ。」

「そ、そんな。きっとなにか…正気を失っているんだわ！ほ、ほら赤い月のせいで…。」

「それはないわ。吹雪も同じだったから。私を敵とみなして攻撃してきたわ。吹雪はちゃんと理由があって攻撃してきたわ。『あなたは敵だから、提督にそう言われたから』って。だから私は吹雪を狩った…はぁ、殺したわ」

「そ、そんな。吹雪さんが…で、でも長門さんは」

「違うって言いたいの？いいえ、同じよ。奴は…ここの提督はメンシス学派の人間だった。あいつは私たち狩人に敵意をむき出しにし

ていたわ。だから吹雪をわたしにけしかけたの。あなた達も狩人である以上、長門も提督に命令されて狩人であるあなた達を攻撃しているの。」
「そ、それは本当なの？」
おや、いつの間にかほかの3人も集まってきたらしい。
「ええ、本当。私はこの手で敵である吹雪を殺したわ。長門の意志は決して変わらない。あなた達艦娘は提督の命令には絶対逆らえないわ。あなた達は狩人になったから支配されることはないけどね。だから殺しなさい。もうここには敵しかいないの。だからやりなさい。」
「…わかった。やるわ。」
「暁!?」
「しょうがないでしょ。やらなければ私たちがやられるんだから。」
「……私もやるわ。」
「電も決めたのです。」
「2人まで…！」
「響、あなたも覚悟を決めなさい。3人はもう決めたのよ。」
「……うぅ。」
やがて響も無言で振り返り長門と対峙する。
「はい、よくできました。親切に待ってくれた長門さんに感謝しないとね。それじゃ私は邪魔しないように離れるわ。終わったら私のいた部屋まで来てね。」
彼女はその場から離れると再び様々な音が流れ始めた。彼女はそれを無視して戻る。

そこにはまだ鳴子が立っていた。顔は赤い月の光で照らされていて鳴子もその月を見つめていた。
「ここは面白い場所でしたね。離れるのが惜しいです。」
「ええ、私もそう思います。想像よりも退屈な場所でしたが昔を思い出せました。」
「次はどこに行こうか、まだ決まっていないんです。暁さんは？」

「私はこのあと戻ろうと思っています。あの４人がいますから。」
「ああ、いいですね。仲間がいるのは退屈に最も効果的な存在です。」
「ええ、まったく。」
「あの赤い月は美しいですね。」
「…私は、あまりそうは思えません。」
「そうですか？」
「あれは、まだこの場に上位者がいるという証。私は獣狩りで上位者狩りの狩人ですから。狩人は狩りを全うするのが使命です。」
「でも地下の存在は狩ったんじゃあ？」
「いえ、まだ一ついますよ。ずっと張り付いて私のことを見ているやつが。」
「…ああ、そうですね。私としたことがすっかり忘れていました。」
「存在感が薄かったからですから。あいつは４人に狩らせようかと思います。私が狩ってもいいですけど、やはりあの４人に狩らせてあげたい。」
「うふふふ。優しいですね。」
「…優しいですか？…ここにきてから私も変わったような気がします。」
「環境が変われば人というのは変わりますよ。」
「人はそう簡単には変わらないとよく聞きますけどね。」
「じゃあ、簡単に変わってしまった暁さんは人間じゃないかもしれませんね。」
「そう…ですね。きっと私は人間じゃない。」
「ははは。暁さんはまだ人ですよ。じゃなきゃ私も人型であなたとお話ししてませんから。」
「なら嬉しいですね。」
彼女は鳴子と別れて部屋に戻った。結局一度も使わなかったこのベッド、せっかくだから最後に使ってやろうか。どうせ待たなきゃいけないのだ。本を一冊引き抜きベッドにダイブする。
「おぉあ…この感触久しぶりだわ。こんなに気持ちよかったのね…

眠気はないけどそこまで贅沢は言えないわね。束の間の人間の娯楽を楽しみましょうかね。」

「…はぁ、はぁ…ヨアケさんやってきたわよ。」

「ん、あらお疲れ。見事に血まみれね。それはあなたの血かしら、相手の血かしら？」

「相手に決まってるでしょ。みんながみんなこんなに出血してたら死んでるわよ。」

「…それもそうね。」

「ヨアケさんの常識がちょっとおかしいのです。」

「な、なんでみんなそこまで落ち着いているんだ。私たちは仲間を殺したっていうのに…」

「響、いい加減慣れる。吹雪と長門がいなくなってもここにはまだもう数人いるんだから。とりあえず…一度戻るわよ。私も久々に苦戦して輸血液とかすっからかんよ。」

「ヨアケさんが苦戦する相手…出会いたくないわ。」

「安心なさい、ここはヤーナムじゃないから死んだ奴は復活できないわ。ちょっと残念ね。さ、無駄話はこれでおしまい。早く戻りましょう。」

夢に戻ってくるのは久々な気もしたがよく考えてみればそうでもなかった。彼女は４人にアイテムを補充するように諭す。

「さ、戻るわよ。」

「え、戻るってどこに…」

「決まってるでしょ、鎮守府よ。」

「なんで？」

「なんでって、あそこにはほら、まだアメンドーズがいるし。せっかくならあなたたちに倒してもらおうと思って。」

「な、なんで私たちなのよ。」

「せっかくだからって言ったじゃない。ほら、予習予習。」

「えー…」

４人はしぶしぶ彼女についていき、またあの場所に戻ってきた。夢のような明るい空間とは違って以前暗い夜を赤い月が不気味に照らしている。
「…あれ、そういえばまだ夜が明けてないのね。」
「そうよ、ちゃんと夜を明かすためにもアメンドーズを倒して狩りを全うしないとね。」
「だからなんで私たちにそれを押し付けるのよ…」
「文句言わない、やる、いいね？」
「……」
なんだかこちらをずっとにらんでいるようだがそれは無視する。奴はずっと同じ場所にいた。庁舎の正面の壁に張り付いたままこちらをずっと見ている。しかし全員で近づいたとたん奴は飛び上がりこちらに落ちてきた。
「ほー、やろうってのね。じゃああとは任せたわ。」
「うぇ、本当に私たちでやるのね。」
「もうやるしかないのです…」
彼女は遠目から戦闘を観察する。いまだに未熟な部分も見えるがチームで戦うことを考えるなら互いにカバーできてるてるから、十分だと思う。さて、彼女はなにもただずっと観察しているわけではない。４人を邪魔する輩から守るためだ。例えば…
「あんた、吹雪をやったのね。」
「だとしたら…？」
「殺す！」
そう提督の奴隷どもとかだ。わざわざ話しかけてこずに後ろからズドンとすればよかったのに。まぁ、そんなに殺気を出していたら後ろからでも普通にばれてるが。殺すといっていたが、確かに殺す気満々だ。持ってる槍をでたらめにさしてきている。だが、ちゃんと冷静さもあるみたいでちゃんとこちらの攻撃は避けてきやがる。生意気な。我を忘れているなら適当に避けて一発切りつけてやれば終わるのに。
「あんた、なんで吹雪を殺したのよ！あんなになかよくしてやった

のに！」
「殺されかけたんだからしょうがないじゃない。」
「じゃあ、おとなしく殺されときなさいよ！」
「それは無茶な話ね。」
「いやってんなら今ここで私が殺してあげるわ。」
「お断りするわ。」
叢雲が槍を突き出したのを避けた一瞬のスキをついて彼女は叢雲の右腕を切り落とした。その激痛に叢雲は府毒うめきながら後ろによろめいた。彼女はそ個に追い打ちをかけるようにさらに切り付ける。
「う…くっ。」
「残念よ。もう少し仲良くできると思っていたのに。」
「くっ…この化け物。」
「ふふ、化け物で結構。」
彼女は叢雲の首へ刃を滑らす。叢雲の首は彼女を恨む表情のまま後ろへ落ちていった。
「雑魚いわね。はー、これで3人目かしら。あと…3，4人ってとこかしら。来るのかしらね。来たら来たでやるし、来ないならそれでもいいんだけど。」
後ろではまだどっしんどっしん音がしているのでまだまだ戦闘は長引きそうだ。
「…ん、どうしたのあんた。」
「死んじゃったのです…おしつぶされて…」
「あー、なるほど。ま、がんばって。」
向こうから電がやってきたのでどうしたのかと思ったが、なんだただ死んだだけか。押しつぶされたといっていたな。
その後もなんどか死んでは戻っていくのが見えたが。やく1時間後やっと4人が戻ってきた。
「遅かったわね。」
「これでも頑張ったのよ…あれ、これは…叢雲さん？」
「殺そうとしてきたから殺し返してあげたのよ。それにあなたたち

の邪魔されたら困るしね。」
「そう。」
「……」
「あ、月が戻っていくのです！」
電の言う通り赤かった月が元の色に戻っている。同時に雰囲気もロマを倒す前に戻ったようだ。と、月の様子を見ているとその影を何かが通っていった。
「ん？あれは何？」
「あれは…なにかの飛行機ね。」
「飛行機？どこから…というか、あれどこに向かっているのかしら。」
「えーと、まっすぐ行ったとしたら…本土、かしら？」
「本土？ああ、そういえばここ孤島なんだっけ。でもどうして本土に飛行機なんて飛ばす必要が？」
「も、もしかして私たちのことを報告するつもりなんじゃ？」
「まさか。だとしても何か困るわけでもないし。そもそも今のこの現状……あー、はいはい。なんとなくわかったわ。」
「目的が？」
「犯人もね。多分赤城か加賀でしょうね。目的は…多分響の言うとおりかしら。」
「え、赤城さんと加賀さん!?な、なんで。」
「そりゃあ、いままともに艦娘してる空母ってあの二人だけだし、本土に艦載機よこして何をするつもりなのかは…よくわかんないけど。ま、結局私たちにはそんな影響はないでしょ。ここに来ることもそうそうないでしょうし。」
「え、もう来ないの？」
「私はね？別にあなたたちが来たければ好きなだけ行けばいいのよ。」
「そっかー。」
「じゃ、今度こそ帰りましょうか。まだまだヤーナムの狩りは終わらないわよ。」

「うげぇ、まだあるの？」
「なーにいってるの。これから本番よ。アメンドーズともまた戦うわ。」
「もう踏みつぶされるのは勘弁なのです…。」
「あのレーザーもね…。」
「響？どうしたの？」
彼女は４人を引き連れて帰ろうとしたが響だけが依然として叢雲の死体を見つめて動こうとしない。
「どうしたの響。帰るわよ。」
「ど、どうした３人ともそんなに平然としていられるんだい！いくら狩人になったからって、いくらヤーナムであんなに死んだからって急に冷酷になりすぎじゃないか!?私でもさっきのアメンドーズだとかあの艦娘の恰好した化け物とかは平然と殺せるけど、いくら何でも仲間に対してあんなに冷酷にはなれないよ！」
「響、あれは敵なのよ。もう仲間ではないの。」
「でもまだ会話できたじゃないか。」
「話しはできたけどまるで聞いてくれなかったじゃない。」
「それに響ちゃんももう殺すしかないってわかってたじゃないですか。一緒に長門さんを殺したのです。」
「それは…本当に話を聞いてくれなかったから…そ、そうだ。私は殺してしまった。でも私はそのあとに弔った！ちゃんと手を合した！でも暁たちはすぐにその場から去ったじゃないか！手ぐらい合わせたらどうなんだい！」
いまだにグダグダいう響を無理やりにでも帰らそうかと思った彼女だったが動いたのは意外にも暁だった。ゆっくりと響に近づき何か見せているらしい。何を見せているのかはここからは見えない。
「……響。」
「な、なんだい？」
「これ。」
「これ？この頭蓋骨がどうかしたのかい…まさかこれ！」
「なんだと思う？」

「暁…なんてことをしたんだ…！暁、狩人になってからどこかおかしいよ！私の姉はこんなことする奴じゃなかった！」
「…私は変わってないしそこまで残酷じゃないわよ。」

途端に響が気絶した。暁は気絶した響を重たそうに運んできた。
「なーにしてきたの。頭蓋骨とか言ってたけど…」
「ん、ちょっと狂人の智慧をね？」
「…はぁ、また狂人の智慧で気絶したの？響は耐性ないわね…」
「しょうがないわよ。一番周りを見てたんだもの。一番精神がまともだったのよ。」
「…それ、遠回しに自分が狂ってるって言ってるようなものよ？」
「自分のことは自分が一番知ってるの。」
暁が響を抱えて歩いている背中を眺めていると雷電姉妹が寄り添ってきた。
「ねえ、最近暁が怖く見えるんだけど。」
「電もちょっと怖く感じる時があるのです…」
「うーん、私も我ながら少し恐ろしく感じるわ…私あんな感じに見える？」
「え…うーん、たまに？」
「そう…」
まぁ、今いる艦娘は自分たちのコピーだから似ているのは当然なのだが。しかし、本人はそのつもりじゃないかもしれないが暁は変わったと思う。多分自分より変化が激しい。
「あー、上位者の叡智はやりすぎたかしらね。」
多分最初に上位者の叡智を与えたのがまずかったのだろう。あの時はちょっと雰囲気に酔っていたというか好奇心に負けたというか…。実はあの後に少しだけ反省してたりしたのだ。あの後も暁は狂人の智慧やらなんやらよく砕いていたし、啓蒙がたくさんあるのだろう。
「…うーんまあそれはそれでいいか。」
別に彼女は協調性だの人間性だのくそどうでもいいので、狩りさえ

楽しんでくれればそれでいい。むしろ彼女が心配なのは響の方だ。
「…帰りましょうか。」

再び彼女に暇な時間が訪れた。あの花畑、樹の前に立つ石碑のさらに前で机を置き、彼女は紅茶を飲みながら読書をしていた。机を挟んだ向かいでは彼も同じように読書をしているが両手に本が握られており頭も左右を行ったり来たりしてる。
「…そんなに無理して読まなくてもいいのに。」
「……」
「うふふ。狩人様は勤勉ね。」
あちらから戻ってくるときに彼女は4人に手伝わせてあの部屋にあった本をすべて運び出した。すると彼が彼女が持ち帰った本に興味を示したのだ。夢から離れられない彼にとって新たな娯楽になり得そうなものだったからだ。だが当然彼は日本語は読めない。そこで彼女がわざわざ辞典を用意してきたのだ。
「あ、そうだ。聞きたかったんだけど死にかけの私を助けたのって狩人様？」
「……」
「え、違うの？じゃああれ誰だったのかしら。」
「あー、もう！」
ふとどこからか叫び声が聞こえてきた。暁の声。また何かにぼこぼこにされて帰ってきたらしい。
「……」
「ええ、ほんと。おかげで聖杯ダンジョンに専念するしかなくなったわ。」
「……」
「…その時がまだ来ないことを願うわ。」
「……」
「ええ、すっかりね。なーんか、変な友人もできたし、今思えば結構いい経験だったかもね。」

静寂が多かった夢も今は騒がしいことが多くなった。彼はそのことをどこか喜んでいるらしい。まだ４人と会話することができないのが残念らしいが。きっといつか４人も会話できるようになるだろう。

「…はぁ、４人が私を超えるのはいつになるかしらね。」